

八尾市埋蔵文化財発掘調査概要

昭和59年度

1985年

(財)八尾市文化財調査研究会



八尾市埋蔵文化財発掘調査概要

昭和59年度

1985年

(財)八尾市文化財調査研究会

はしがき

河内平野は幾多の先人の活動の舞台として、従来より重要な役割を果たして來たところであります。

わが八尾市域も近年の開発の波に迫られ、近代都市へ変貌しつつある今日、これら先人の足跡である貴重な文化遺産を後世にながく伝えるため、開発申請者のご理解の上、調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握と保存に努めている次第であります。

今回、近鉄八尾駅北側に位置し、駅前開発とともに東郷遺跡と八尾市の南端に位置する八尾南遺跡の調査が完了し、報告書を刊行する運びとなりました。

本書が今後、学問の発展と一般の方々への啓蒙に寄与できるならば、甚だ幸せに存じます。

最後にこの調査にご協力いただきました第一生命保険相互会社ならびに近畿財務局の関係各位、更には本書作成のためご協力いただいた調査補助員諸子に厚く感謝の意を表します。

昭和60年3月

財團法人 八尾文化財調査研究会
理 事 長 山脇 悅 司

序

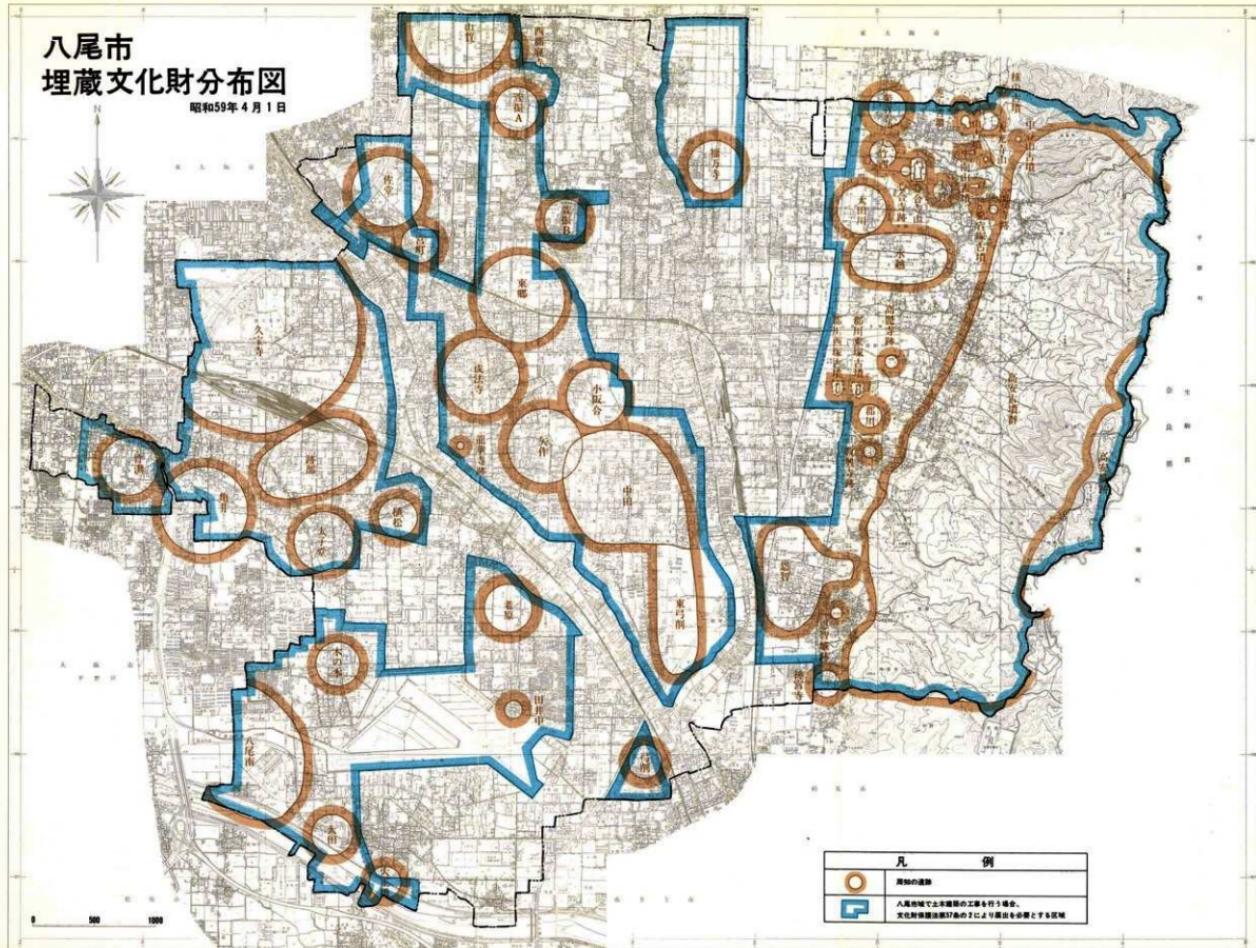
- 1、本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、昭和59年度に実施した埋蔵文化財発掘調査業務の一部を集録したものである。
- 1、本書に集録した概要報告は、下記の目次に記した通りである。
- 1、本書作成については、原田昌則・成海佳子・駒澤敦が担当し、文責は各例言で明らかにした。また、全体の編集・構成は、原田・成海が共同で行なった。
- 1、本書掲載の地図は、国土地理院発行の1/25000および八尾市役所発行の1/2500（昭和57年11月1日発行）・八尾市教育委員会発行『八尾市埋蔵文化財分布図』（昭和59年4月1日発行）をもとに作成した。
- 1、本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面で、T Pと略して記載した。
- 1、遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した。弥生式土器・土師器・瓦器一白、須恵器・陶磁器・石製品一黒。
- 1、各調査に際しては、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、広く利用されることを希望する。

目 次

はしがき	
序	
八尾市埋蔵文化財分布図	
I 東郷遺跡発掘調査概要報告	1
II 八尾南遺跡発掘調査概要報告	17

八尾市 埋蔵文化財分布図

昭和59年4月1日



TG 83-17

I 東郷遺跡発掘調査概要報告

17次

例 言

- 1、本書は、八尾市光町1丁目において実施した第一生命保険相互会社貸ビル建設に伴う発掘調査の概要報告である。
- 1、本書で報告する東郷遺跡の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が第一生命保険相互会社から委託を受けて実施したものである。
- 1、現地調査は昭和58年11月24日から昭和58年12月15日にかけて、駒澤教を担当者として実施した。なお、調査においては小川克則・津田孝二・西森忠幸が参加した。
- 1、内業整理は、現地調査終了後、昭和60年3月31日まで実施し、上記の他、大地慶子・中野慶太・上村義治・前田芳嗣が参加した。
- 1、本書作成に関わる業務は、遺物実測図-大地、図面レイアウト-駒澤・大地、トレース-成海佳子、遺物写真撮影及び本文執筆は駒澤が担当し、成海・原田昌則が編集に加わった。

凡 例

- 1、実測図の縮尺率は、遺構は1:20・1:100・1:200を基準とし、遺物は彌栄は1:6及び1:8とし、それ以外は1:4に統一した。
- 1、遺物については通し番号を与え、実測図・写真図版とともに共通している。
- 1、遺構実測図の方位は、全て磁北を示している。

本文目次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 調査方法.....	2
第3章 層序.....	2
第4章 検出遺物と出土遺物.....	3
第5章 出土遺物観察表.....	10
第6章 まとめ.....	15

挿図目次

第1図 調査地周辺図.....	1
第2図 層序模式図.....	2
第3図 検出構造平面図.....	3
第4図 S X - 1 平断面図.....	5
第5図 S W - 3 遺物出土状況平面図.....	7
第6図 S W - 1 • S W - 2 出土遺物実測図.....	7
第7図 S W - 2 • S W - 3 • S W - 4 • S W - 5 山土遺物実測図.....	8
第8図 S D - 1 • S P - 5 • S P - 15 • 包含層出土遺物実測図.....	9

図版目次

図版一 調査区西部方形周溝墓検出状況
調査区東部遺構検出状況

図版二 出土遺物
図版三 出土遺物

第1章 調査に至る経過

東郷遺跡は、八尾市北本町・東本町・光町・桜ヶ丘一帯に所在する弥生時代から鎌倉時代に至る複合遺跡である。昭和46年、東本町2丁目で下水道敷設工事中、地表下約1.5mで墨書き面上器等が出土して以来、この付近に遺跡の存在が推測されていたが、実態は明らかではなかった。^{註1}しかし、昭和55年、桜ヶ丘3丁目でマンション建設に伴う事前調査で古墳時代から中世に至る遺構や、それに伴う遺物を検出した。これ以後、現在まで16次にわたる発掘調査が実施され、古墳時代に比定できる住居址等を検出し、集落の中枢部の実態が徐々に明らかになってきた。このような状況の下、第一生命保険相互会社から当遺跡推定範囲内の光町1丁目で貸事務所建設を計画する旨が、八尾市教育委員会文化財室に通知された。この建設予定地は、埋蔵文化財の存在が充分予想される地区であり、貸事務所建設に伴って埋蔵文化財が破壊されることが危惧されたため、八尾市教育委員会は、第一生命保険相互会社に対して埋蔵文化財の保存を計るために、事前の発掘調査の必要がある旨を通知した。これに基づき、第一生命保険相互会社、八尾市教育委員会、(財)八尾市文化財調査研究会の三者間で協議の上、当研究会が建設予定地の全面発掘調査を実施することに至った。

現地調査は昭和58年11月24日から12月15日まで実施し、調査総面積は480m²を測る。



第1図 調査地周辺図 (1:5,000)

第2章 調査方法

当調査は、事前協議の段階で全面発掘調査が決定されたため、八尾市教育委員会による試掘調査が実施されていないことから、あらかじめ土層の堆積状況を知る目的で調査地西南隅に試掘坑（2m×1m）を設定した。その結果、盛土・旧耕土は、現地表から60cm～70cmの層厚であることを確認し、旧耕土下40cm～50cmに存在する土層中で土器の小破片が出土したので、この付近に遺構面が存在することが予想された。そこで盛土・旧耕土は、パワーショベルを用いて掘削し、調査地外へ搬出した。その後、上層業理に従って慎重に人力掘削を進めた。ただ、一度に全面発掘を実施した場合には、その掘削土の貯蔵場を確保するための余裕がないため、やむを得ず調査トレンチを東部と西部に分割して、調査を実施した。また、調査に先立って、調査区の周囲には、シングルソイル（コンクリート状の柱列）及びH鋼を打設して壁面を保持するとともに、隣接地の建物・道路等への影響が出ないように務めた。なお、記録保存に必要な平板実測・写真撮影・実測図作成等の作業は、調査の進行に従って順次実施した。

第3章 層序

当調査地の層序は、6層に大別できる。盛土および旧耕土層（60cm～70cm）以下、上層より第1層褐色灰色粘質土層（5cm～10cm）・第2層淡青灰色粘質土層（6cm～20cm）・第3層淡緑色粘質土層（5cm～10cm）・第4層灰褐色粘土混砂層（8cm～12cm）・第5層茶灰褐色粘土混砂層（3cm～10cm）・6層灰色粗砂～細砂層（1m以上）の堆積状況が見られる。このうち第1層から第5層では、弥生時代後期から古墳時代後期に比定される遺物が出土している。遺物の出土状況は、散発的でしかも細片が多く、新旧の時期の遺物が混在している。遺構は、第5層上面で古墳時代に比定されるものと平安時代後期から鎌倉時代に比定されるものを同一面で検出しているが、同一レベルの面からかなり下った時期の遺物も出土しており、後世の擾乱が一部第5層まで及んだことが窺われる。第1層から第4層は明らかに二次的な堆積である。第5層以下は、灰色粗砂と細砂層の堆積で1m以上の層厚を確認したが、遺物は出土していない。



第2図 層序模式図

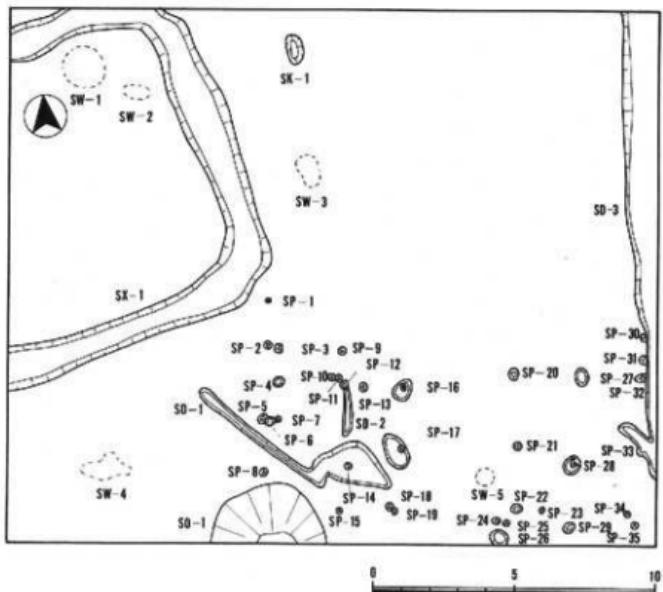
第4章 検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期に比定できる方形周溝墓と土器集積、古墳時代後期に比定できる溝と落込み状遺構、さらに平安時代後期から鎌倉時代に比定できる柱穴群、そして時期不明の溝と土坑である。ほとんどの遺構は、同一レベルの面で検出した。遺構の遺存深度は、比較的浅いものが多く、第3章層序でも述べたように、第5層までの各層から新旧の時期の遺物が混在して出土していることから、後世の搅乱によってかなり削平を受けていることが窺える。この状況を踏まえて、以下各遺構毎に検出状況と出土遺物の概要を述べていくことにする。

方形周溝墓（SX）

SX-1

調査トレンチ西部の第5層上面で検出した。検出部では「コ」の字形を呈し、北周溝の一部



第3図 検出遺構平面図 (1:200)

及び西周溝は調査区域外に至り、詳細は不明である。上部は削平を受けており、検出部数値で北周溝 5.0 m・東周溝 8.5 m・南周溝 7.5 m、幅 1.0 m～1.1 m・深さ 20cm を測る。周溝内部の堆積土は、上層は暗灰色粘土混砂であるが、下層は暗灰色砂混粘質土になり、下層部分は粘性が高くなっていることから一時期蓄水した状況が窺われる。出土遺物は、周溝内で土器の細片が散発的に出土しており、いずれも図面化できるものはないが、古墳時代に比定できるものと推定される。なお削平された墳丘部で SW-1・SW-2 を検出しているが、方形周溝墓との関係は不明である。

土坑 (SK)

SK-1

調査区西部の第 5 層上面で検出した。長径 1.0 m・短径 0.6 m・深さ 20cm を測り、楕円形を呈している。内部堆積土は、灰褐色粘土混砂で、出土遺物はなく詳細は不明である。

溝 (SD)

SD-1

調査区南部の第 5 層上面で検出した。北西から南東に伸びるもので、東部で三角形状に広がる。その中心部に柱穴 (SP-14) がある。現状で、長さ 7.5 m・幅 20cm～30cm・深さ 5 cm～10cm を測る。内部堆積土は暗灰色粘土混砂である。出土遺物は、土師器壺・須恵器蓋杯(26)・その他土師器の細片である。

SD-2

調査区南部の第 5 層上面で検出した。南北方向に伸びる小規模の溝状造構で、北端は SP-12 と接している、現状で、長さ 1.7 m・幅 20cm～30cm・深さ 10cm を測る。遺物は、上師器の細片が 1 点出土している。

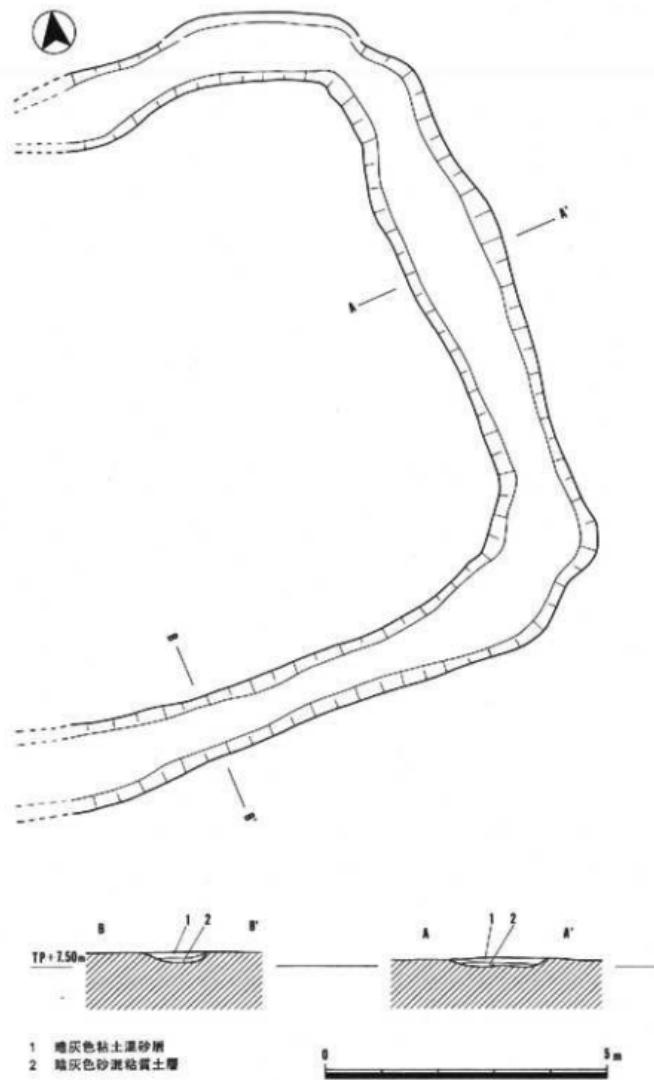
SD-3

調査区東端第 5 層上面で検出した。南北方向に伸びる溝造構であるが、東側が調査区域外のため詳細は不明である。現状で、長さ 16.5m・深さ 5～10cm を測る。内部堆積土は、上層で淡灰色粘土混砂、下層で暗灰褐色粘質土の 2 層を検出しているが、上層は第 3 層淡緑灰色粘質土と近似しており、溝の構築面は第 5 層より上層である可能性が強い。遺物は壺・甌・高杯・杯等の細片が少量出土している。

落込み状造構 (SO)

SO-1

調査区南端の第 5 層下層部分で検出した。南側部分は、調査区域外に至るために詳細は不明であるが、検出部で半円形を呈し、断面は播鉢状を呈している。検出部で径 3.8 m・深さ 70cm を測る。内部堆積土は、上層は灰褐色粘質土～粘土、下層は灰色粘土と灰色粗砂の互層である。



第4図 S-X-1 平断面図 (1:100)

柱穴 (S P)

調査区南部の第5層上面で、合計35個検出した。径10cm~40cmのものから径50cm~70cmのものがあり、深さはいずれも10cm前後を測り、比較的浅いものが多い。このうち、S P-3・S P-5・S P-6・S P-7・S P-12・S P-13・S P-15・S P-20・S P-21・S P-24・S P-27・S P-35から遺物が出土している。S P-12からは須恵器壺の細片が1点出土し、その他で上師器・黒色土器・瓦器の細片が出上しているが、出土量もわずかで、時期を断定し得る資料は得ていない。これらのうち図示できたものは、S P-5(37)・S P-15(36)出土の2点で、いずれも黒色土器碗である。なお、これらの柱穴のうち根石が遺存していたS P-20・S P-27は、建物を構成するものと考えられるが、調査区が限定されているため、建物の性格を捉えるまでには至らなかった。

土器集積 (S W)

S W-1

方形周溝壺 (S X-1) の墳丘部北側で検出した。検出部上位の第5層上面では、壺(1)の体部上半の破片が、約1m四方に渡って散乱した状況で出土した。これらの破片を取除くと第6層灰色粗砂~細砂層に至り、上位で出土した壺の底部から体部までの破片が、底部を斜下方に向けて遺存していた。

S W-2

方形周溝壺 (S X-1) の墳丘部北側で検出した。S W-1の東1mに位置する。S W-1同様、検出部上位の第5層上面で壺(3)と壺(2)の体部上半の破片が、約60cm四方に渡って散乱した状況で出土した。そしてこれらの遺物を取除いていき、第6層灰色粗砂~細砂層に達すると、上位で出土した壺の底部から体部の破片が底部を斜下方に向けて遺存していた。

以上のように・S W-1とS W-2はともに、方形周溝壺 (S X-1) の墳丘部北側で同じような状況で検出しており、両遺構から出土した壺(1)と壺(2)は、口縁部が欠損しているものの器形は同じものと考えられる。これらの壺は、方形周溝壺の墳丘部で検出したことから、壺棺である可能性があるといえよう。しかし、いずれも検出部上部は削平を受けており、方形周溝壺 (S X-1) との詳細な先後関係は不明である。

S W-3

調査区西部の第4層で検出した。まず第4層上部で壺(7)の口縁部から体部中位までの破片と高杯の杯部の細片が出土した。この2点を取除き、第4層を約10cm掘り下げ第5層上面に達するまでの層中では、小型鉢(4)がほぼ完型で口縁部を斜上方に向いた状態で遺存していた。さらに、小型壺(5)も破損しているものの口縁部を横向きにした状態で、口縁部から底部までの破片が遺存しており、上部の破片が若干内部に落込んでいた。壺(6)は、口縁部か

ら体部上半の破片が細片で出土した。これらは、二次的堆積層と考えられる第4層中で出土し、前述のSW-1・SW-2とは性格に違いはあるが、遺存状況が比較的良好であるため土器集積として扱った。

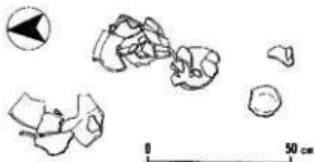
SW-4

調査区西部の第3層で検出した。弥生土器・土師器・瓦器等の細片が集積しており、いずれも磨耗を受けていた。このSW-4もSW-3同様、二次堆積層中で出土し、時期の幅が認められるものの、第3層では特に集積した状況であるため土器集積として扱った。そのうち、図示することができた遺物は、弥生土器の底部（8・9）2点である。

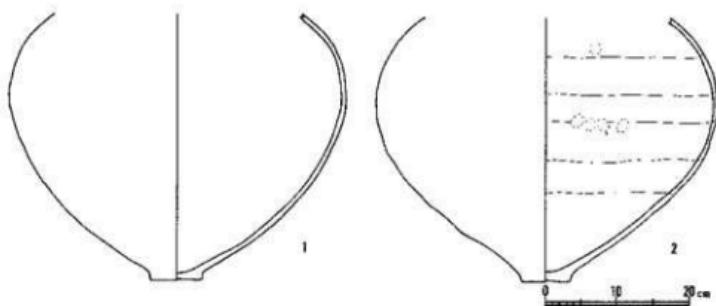
SW-5

調査区東部の第5層で検出し、下部は第6層に達している。検出部上部では壺（10）の体部が、その内部に落込み、周辺でも破片の一部が出土した。この上部の遺物を取り除くと底部を斜下方に向けて、この壺の底部から体部上位が遺存していた。このSW-5で出土した壺もSW-1・SW-2出土の壺同様、上部が削平されており口縁部が欠損している。器形は、SW-1・SW-2よりやや大型である。

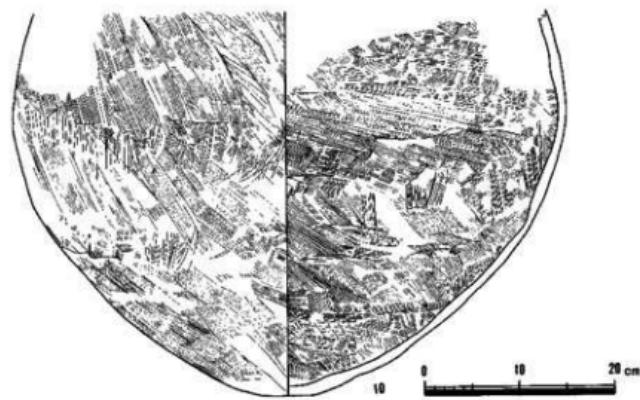
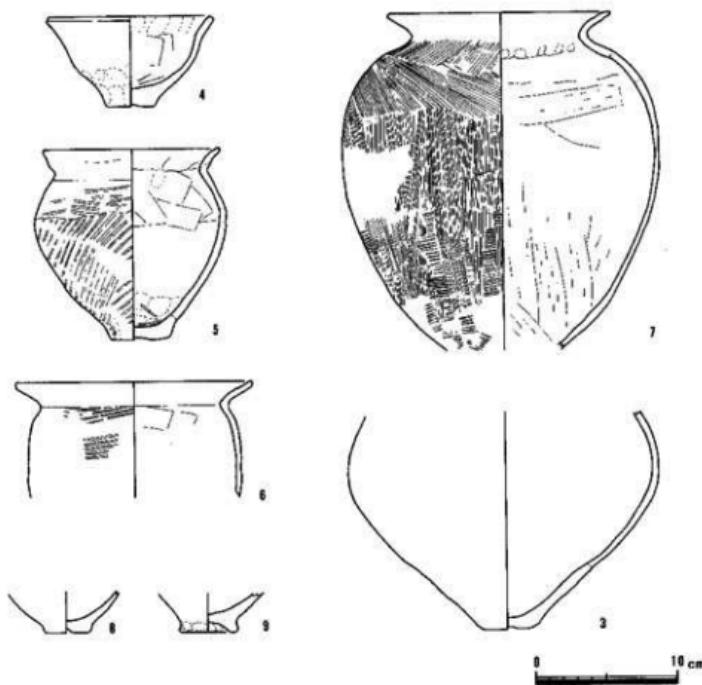
このSW-5も方形周溝壺（SX-1）の周辺部で検出したことから、SW-1・SW-2と同様に壺底である可能性があるが、検出部上部は削平を受けており、方形周溝壺（SX-1）との詳細な関係は不明である。



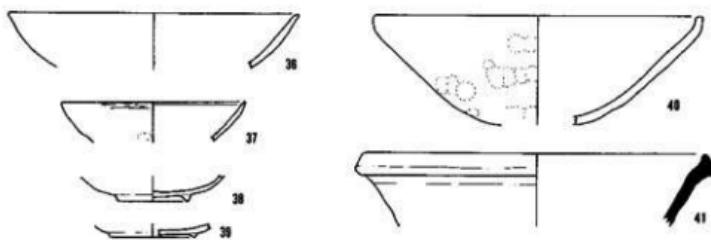
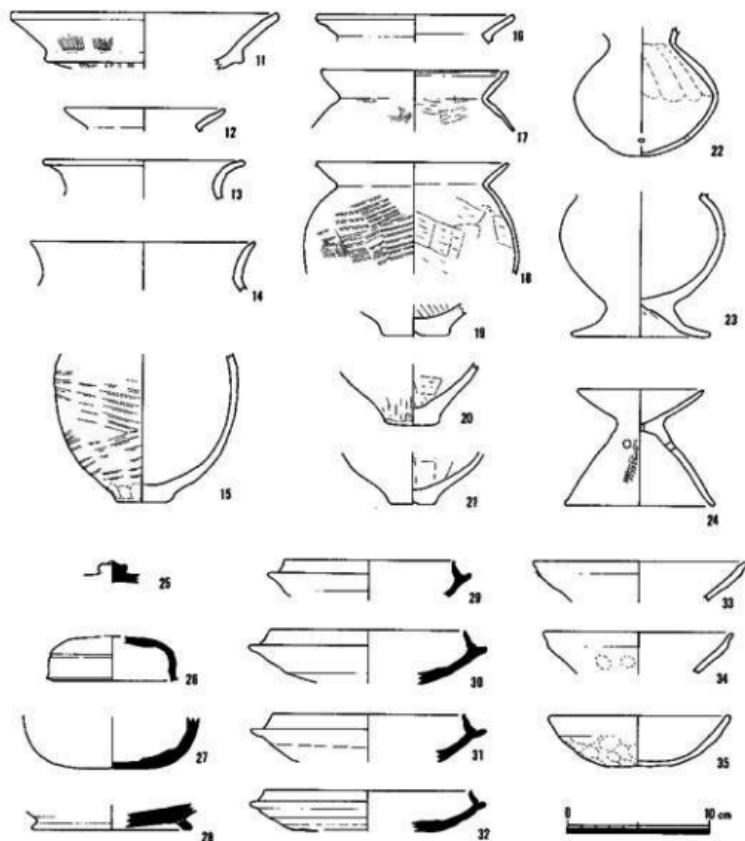
第5図 SW-3 遺物出土状況平面図 (1:20)



第6図 SW-1(1)・SW-2(2)出土遺物実測図 (1:8)



第7図 SW-2(3)・SW-3 (4~7)・SW-4 (8・9)・SW-5 (10) 出土遺物実測図（上段1:4・下段1:6）



第8圖 SD—1(26)・SP—5(37)・SP—15(36)・包含層(11~25・27~35・38~41)出土遺物実測図(1:4)

第5章 出土遺物観察表

遺物番号 測定番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法縫 番号	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1 葵	—	—	突出した平底の底面から球形に近い体部に至る。最大径は中位よりや上方にある。 内外面とも磨耗を受け調整は不明確であるが、粘土被覆を上げ成形後、板状工具によるナデを施していると思われる。	(外) 淡赤褐色～淡褐色 (内) 淡赤褐色	長石・石英 チャート・雲母を含む	良好	内面炭素付着部分あり
二 SW-1	里	—	1とは同一の型形で、底部が若干小さく外底面に凹みがある。 内外面とも磨耗が著しいが、外面にヘラミガキが認められる。	(外) 淡赤褐色～淡褐色 (内) 淡赤褐色	長石・石英 赤色酸化鉄含む	良好	
二 SW-2	里	—	突出した平底の底面から直線的にのびた後球形に近い体部に至る。最大径は体部上位にある。 内外面ともに磨耗を受け、調整は不明。	(外) 淡赤褐色 (内) 橙色	赤色酸化鉄 多量に含む	良好	
3 葵	—	12.2 6.9 底径 46 底縫 30	半底の底面から丸味のある体部へと続き、丸味をもって外反する口縫部に至る。端部は丸みのある面を有す。 外縫は、底縫側面に指頭圧痕が認められ、体部から口縫部はヨコナデを施し、内面も口縫部はリコナデ、底縫から体部はナデ。	(外) 淡赤褐色 (内) 橙色	石英・長石 角閃石・金雲母を多量に含む	良好	
二 SW-3	小型要	13.2 15.6 底径 43 最大径 14.5	突出した平底の底面から、上位に最大径を測る体部へ至る。口縫部は体部からやや外反し、端部は丸く終る。 底部側面には指頭圧痕。体部最大径附近まで右上がりのタキキ。体部上半は横タキキ。口縫部は内外面ともヨコナデ。内面底部から体部は板状工具によるナデ。	(外) 淡赤褐色 (内) 淡赤褐色	石英・長石 角閃石・金雲母を含む	良好	
二 SW-3	里	17.8 最大径 16.2	張りの少ない体部から大きく外反する口縫部に至る。底面はつまみ上げぎれに丸く終る。 外縫体部は細い横タキキ。内面体部は板状工具によるナデ。口縫部は内外面ともヨコナデ。	乳褐色	石英・長石 雲母を多量に含む	良好	
三 SW-3	里	16.6 最大径 23.0	最大径が上位にある裏の張った体部に外反する口縫部が伸び、端部は丸く終る。 外縫体部は細い横タキキを施蔽後、ハケ目調整を施す。内面は、板状工具によるケズリ(下半は下→上、上半は右→左)が認められる。口縫部は内外面ともヨコナデである。	(外) 淡赤褐色～黒褐色 (内) 淡褐色	石英・長石 雲母を含む又、赤色酸化鉄が認められる。	良好	外面は炭素の付着が認められ、暗褐色である。

遺物番号 同版番号	名 種	出土地点 法號 器形	(cm) 口径 底径	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
8	盃	—	—	突出する底部で、中央が凹む。体部は内溝 きみに伸びる。 器形を受け調整不明。	(外側) 乳白色 (内側) 水褐色	長石・石英 を含む	良好	
		底径 3.1						
	SW-4	—	—					
9	鉢?	—	—	上げ底の底部から丸みのある体部が伸びる。 外表面ともナダであるが、底部側面に指頭 圧痕が認められる。	淡赤褐色	角閃石・長 石・石英を 含む	良好	
		底径 4.2						
	SW-4	—	—					
10	盃	—	—	小さく平らな底部から球形を呈する体部に 至る。 粘土縦書き上げ成形後焼き目を消すように ハケで調整を施しており、外表面は縱に割め 方向、内面は横・斜め方向から横方向のハケ 付である。	淡褐色	長石・金雲 母を多量に 含む	良好	内面底部と 外表面に 黒斑あり
		底径 5.0						
		最大径 5.82						
二	SW-5	—	—					
11	高杯	19.8	—	内溝気味の杯底部より、外間に縁を作り外反 する。口縁端部は直角な面をもつ。 内面は擦耗か著しく不明であるが、外表面には ヘラミガキが認められる。	乳白色	長石・石英 を含む	良好	
			—					
12	盃	12.0	—	体部からくじ字形に折出し、若干外反気味 の口縁部である。端部はつまみ上げきみに丸 く終る。 調整は不明である。	褐色	角閃石を含 む	良好	
			—					
13	盃	14.6	—	水平近くまで外反する口縁部である。口縁 端部は丸く終わる。 外表面ともヨコナデである。	乳赤褐色	長石・角閃 石・雲母を含 む	良好	
			—					
14	盃	16.8	—	外反して立ち上がる口縁部で、口縁端部は 尖り気味に丸く終わる。 調整は不明である。	橙色	精良	良好	
			—					
15	盃	—	—	突出した平底をもち、仰鐘形の体部中位に 最大径を有する。 外表面は底部側面から体部中位まで右上がり、 それより上位は左上がりのタタキである。内 面は、擦耗が著しく不明である。	褐色～赤褐色	長石・石英 ・角閃石・雲 母の微粒を 含む	タタキ5箇/27 cm	
		底径 3.6						
		最大径 13.6						

遺物番号 回収番号	器種 出土地點	(cm) 口徑 基盤	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
16	甕	— 14.6	「く」字形に屈折し、直線的に伸びる口縁部である。口縁上端部は尖り気味に、下端部は丸く終わる。口縁部は内外面ともヨコナデである。	淡褐色	長石・石英 角閃石を含む	良好	
17	甕	— 13.9	口縁部は体部から「く」字形に屈折し、縁部近くで内側してつまみ上げ、縁部は外側した面をつむ。 体部外面はハケナデ、内面には板状工具によるケズリが施される。口縁部はヨコナデを施した後、縁部を上からなでつけてある。	淡褐色	長石・石英 角閃石を含む	良好	
18	甕	— 14.4	口縁部は体部から「く」字形に屈折し、縁部は若干肥厚して尖り気味に丸く終わる。最大径は、体部中位にあると思われる。 外側はタタキの後ハケで、内面には板状工具によるケズリが施されており、口縁部はヨコナデを施している。	淡褐色	長石・角閃 石を含む	良好 タタキ5条/ 2.8 cm ハケ5条/ 0.6 cm	
19	甕?	— 底径 4.5	突出した底部で中央は窪んでいる。 内面にはハケ状工具による調整痕が左回りの放射状に認められる。	(外面) 淡褐色 (内面) 灰黑色	長石・石英 粘土を含む	良好	
20	甕?	— 底径(表)4.1 底径(裏)3.6	突出した底部。 内面ともにハテケズリを施し内面には板状工具による押圧痕が認められる。	乳褐色	長石・石英 雲母粒を多量に含む	良好	
21	甕?	— 底径 3.0	突出した底部である。 内面には板状工具によるナダを施している。 外面は磨耗が著しい。	乳褐色	長石・石英 雲母・角閃 石を含む	良好 外面部に 擦付着	
22	甕	— 底径 1.5 最大径 10.6	球形の体部から外張する頸部に至るが、水平近くに屈曲する口縁部に至るが、上位は欠損する。体部下位に穿孔がある。 内面には指頭圧痕が体部中位まで認められ、底部にも若干の指頭圧痕がある。外面は磨耗が著しく調整は不明である。	(外面) 橙色 黒斑あり (内面) 灰黑色	長石・石英 を含む	良好	
三	台付甕	— 底径 10.4 最大径 12.4	球形の体部に外反気味に開く脚部が付く。 体部の最大径は中位からやや上方に求められる。 外面部とも磨耗が著しく調整は不明である。	褐色	長石・石英 粒を含む 稍良		

遺物名前 回収番号	層 遺 土 地 点	(cm) 口徑 法量 深高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼成	備 考
24	小型台面	9.3 — 底径 11.2 高 8.9	圓斗状に聞く台面で底部に円孔を穿ち、端部は直垂の面をもち上端部は尖り気味に終わる。脚部は内焰氣味に聞き上位3方に円孔があり、端部は丸く終わる。 外表面とも磨耗しているが脚部外面にヘラミガキが認められる。	淡褐色	長石・石英 角閃石含む	良	
三							
25	蓋杯 (蓋)	— — つまみ径 2.2 つまみ径 1.0	扁平な腹室錐状のつまみを有す。 外面は回転ナデ、内面もナデを施している。	白灰色	緻密	堅穢	
26	蓋杯 (蓋)	9.2 3.5	口縁部は垂直に下がり、わずかに外反して端部に至る。腹部は凹面をなして外傾している。 人井部は平らで、棱は明瞭ではない。 外面の天井部は縫端より 1.1 cm以上は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	淡青灰色	緻密	堅穢	SD-1 出 土のものと 第8層出土 のものが接 合
	SD-1						
27	壺	— — 底径 5.0	扁平な底部から直上方へ体部が伸びる器形である。底部中央の器壁は薄く、体部に向って肥厚する。 外面は回転ナデを施しているが、内面は未調整である。	(外面) 白灰 色 (内面) 灰色	長石粒を含 む 緻密	堅穢	
28	壺?	— — 高台径 11.8	「ハ」字形に開いた台形の貼付高台を有しており、底部中央は接続している部分もある。 外面凹面、高台及び高台内は回転ナデ調整である。	青灰色	緻密	堅穢	
29	蓋杯 (身)	12.6 — 受部径 15.2	上外方へ伸びるやや細い受部を行し、内傾して外反する立ち上がり部で、端部は鋭く終わる。 外表面とも回転ナデを施す。	淡灰色	長石粒を含 む 緻密	堅穢	
30	蓋杯 (身)	14.5 —	底平と思われる底盤から外方へ伸びる受部を有し、立ち上がり部はやや内傾氣味に立ち上がり、端部はやや鋭く終わる。 外面の底盤は受部周囲から 2.1 cm以下は回転ヘラケズリ。他は回転ナデを施す。	(受部より 下方) 暗灰色 (口盤部～ 内面) 暗青灰色	長石粒を含 む 緻密	堅穢	
三							
31	蓋杯 (身)	14.3 — 受部径 17.6	内削した体部から瓶くぼほ水平に伸びる受部を行し、立ち上がり部の形態は、外表面から伸びたナデが施されているため器内を減じ端部は丸く終わる。 外表面とも回転ナデを施す。	青灰色	長石を含む	堅穢	

遺物番号 既知番号	出土地点	標高 (m)	口径 法値	形態・調整等の特徴	色 調	胎 上	焼成 度	備考
32	蓋杯 (身)	15.4 —	受部径 17.6	低平な体部から水平で短い受部を有し、内 側して外反する立ち上がり脚である。 外面の底部は受部端から 1.8 cm 以下は回転 ヘラケズリ。他は円軌ナデを施す。	淡青灰色	精白	堅微	
33	杯?	18.0 —	—	体部は外上方に直線的に伸び、口縁部は各 いヨコナデによって外反し、底部は尖りざみ に終わる。 内外面ともにナデ調整。	黄褐色	赤色無化物・ 雲母を含む	良好	
34	杯	13.0 —	—	体部は外上方に直線的に伸び、口縁部は各 いヨコナデによって外反している。端部は器内 を絞じて丸く終わる。 外面体部には指頭圧痕が認められ、内面は 磨耗気味であるがナゲと思われる。	褐色・乳褐色	長石粒・雲 母を多量に 含む	良好	
35	杯	13.4 3.9	—	浅い半球形の体部で、まっすぐ口縁部に至 り端部は丸く終わる。 口縁部は内外面ともヨコナデを施し、体部 外面には指頭圧痕が頗著に認められ、内面は ナゲである。	淡褐色	長石・石英 粒を含む	良好	
三								
36	碗 (黒色土器 A類)	20.6 —	—	丸柱のある体部からほぼまっすぐに器肉を 減じながら口縁部に至る。端部はわずかに 外反ざみとなり尖りざみに終わる。 内外面とも磨耗著しく調整は不明である。	(内面) 黒色 (外面) 乳黃 色	長石・石英 粒を含む	良好	外面口縁下 1.6 cm まで 皮系吸着
37	碗 (黒色土器 A類)	13.0	—	丸柱のある体部で、口縁端部は内面に枝條 状の凹みを持つ。芯肉は比較的薄い。 磨耗著しく剥離は不明であるが、外面に指 頭圧痕が認められる。	(内面) 黑色 (外面) 乳黃 色	紫母粒を多 量に含む	良	外面口縁下 2.0 cm まで 皮系吸着
38	桶 (黒色土器 A類?)	—	高台径 5.2 高台高 0.3	垂直に下る低い高台で、断面は逆三角形を 呈する。体部は低平な底盤から角度を度え、 斜上方に伸びる。 内外面とも磨耗著しく調整は不明であるが、 内面に皮系吸着の痕跡が認められる。	(内面) 一部 黒色 (外面) 乳黃 色	精良	良好	
39	桶 (黒色土器 A類)	—	高台径 6.4 高台高 0.3	少し「V」字形に開く低い高台で、断面は逆 三角形を呈する。 内外面ともに磨耗著しいが内面は皮系を吸 着している。	(内面) 黑色 (外面) 乳黃 色	精良	良好	

遺物番号	出土地点	種類	(cm) 口径 基部 口径 基部	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
40	鉢		24.4 —	扁平と思われる底部からまっすぐ伸びる体部で、口縁部は直上に立ち上がり、端部は水平に近い。 内面と外表面はナメ、外向体部から底部には指紋状痕が認められる。	乳褐色	精良	良好	
41	鉢 (須恵質)		25.4 —	直線的に伸びる体部から外反して口縁部に狭窄する。口縁部は上方につまみあげ、側面は内傾する。 内外面とも同軸ナメ調査である。	鐵青	鐵青	良好	

第5章 まとめ

今回の調査では、方形周溝墓・溝・土坑・柱穴・土器集積等を検出した。このうち方形周溝墓（S X-1）は、当遺跡では初めて検出した埴輪遺構である。先述のように、墳丘部・周溝は削平を受けているが、東周溝から推定すれば一辺12m～12.5mの規模が想定できよう。周溝内の出土遺物は、細片が散発的な状態で出土しているが、その個々の遺物を検討すると、概ね古墳時代前期に比定できるものと思われる。また、墳丘部北側で検出した SW-1・SW-2 及び、調査区東部で検出した SW-5 は、古墳時代前期の時期に比定できるもので、壺棺である可能性がある。ただ、この壺棺と方形周溝墓（S X-1）は、ともに良好な資料ではないため、その詳細な併存関係は不明であるが、古墳時代前期の当調査地付近は、墓域として利用されていたと推定できよう。

この墓域に対応する集落を検出している既往調査地は、当調査地の南100m前後に位置する第5次・第8次・第9次・第11次・第14次調査地である。そのうち、第8次調査地では、報告例の少ない床面に砂礫を敷きつめた堅穴式住居を検出し、この調査地を中心にして第11次調査地で堅穴式住居3棟と井戸1基、西側の第5次・第14次調査地では、堅穴式住居3棟と掘立柱建物2棟と井戸7基、北側の第9次調査地でも井戸2基を検出している。なお、南側の第10次調査地は、当該時期には沼澤地であったようであり、集落の南端もこの調査地付近までであろうと推定される。また、同一の沼澤地は、第3次・第4次・第5次・第12次・第14次・第15次・第16次・第18次調査地で検出されており、集落の西端は、第5次・第14次調査地までと推定できよう。

以上の既往調査と当調査の成果から、古墳時代前期には第8次調査地を中心として半径50m

程度の居住地域があり、その外縁部は、南から西に沼沢地が広がっており、さらに、北方には墓域が存在する集落景観を呈していたと推定できる。また、当調査地は、方形周溝墓の下層に1m以上堆積している粗砂層が示すように、前代から居住地として適さない土地であったことから墓域として利用されたものと推定できよう。今回の調査で墓域を検出したことから、現時点で復元できる当遺跡の古墳時代前期の遺跡範囲は、東西200m、南北150mの規模を想定することができよう。

ところで、当調査地で墳墓遺構を検出するまでは、当遺跡の南西800mに位置する成法寺遺跡（光南町1丁目）で古墳時代前期の方形周溝墓4基を検出したことから、当遺跡を居住地域、成法寺遺跡を墓域とする集落構成を持っていた可能性も考えられていた。しかし、今回当遺跡で墓域を検出し、生産遺構を除く集落景観が想定できるようになってきたため、この説は再考を要する結果になった。しかし、成法寺遺跡内では、これらの方形周溝墓と同時期の集落は検出されておらず、これらの事柄も両遺跡間の今後の検討課題として残されよう。

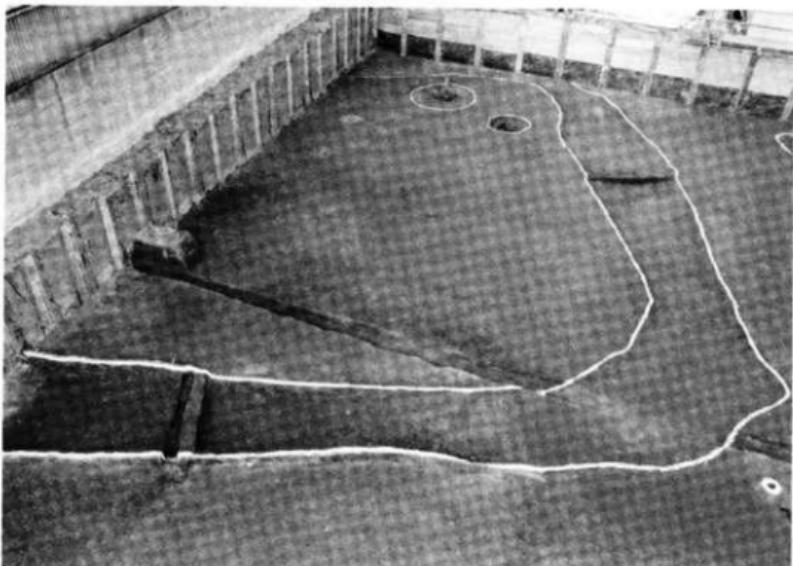
註1 八尾市役所『八尾市史文化財編』1977 口径13.5m・器高11cmを測る甕の外側に、2面の人面が墨書きされている。

註2 当調査以後、昭和59年3月1日～4月10日、八尾市北本町2丁目141番地で、(財)八尾市文化財調査研究会が発掘調査を実施した。

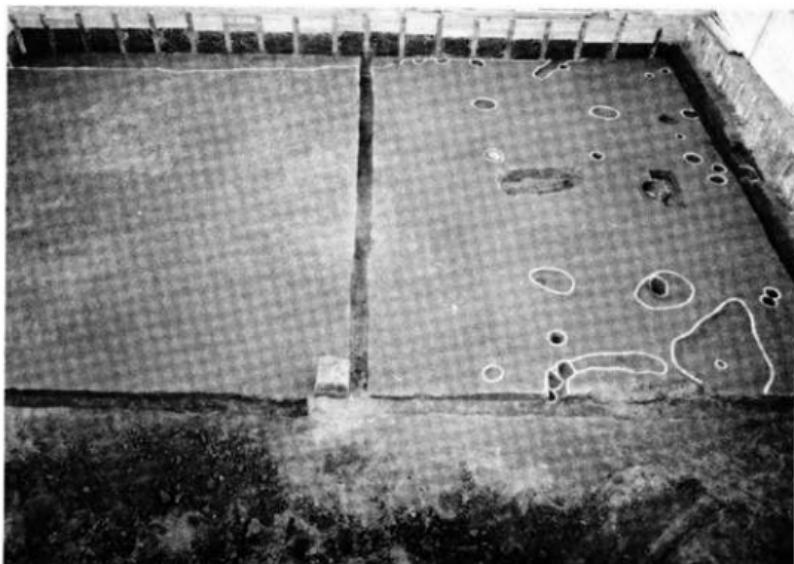
（参考文献）

- ・八尾市教育委員会「東郷遺跡発掘調査概要」「八尾山遺跡・東郷遺跡発掘調査概要」：八尾市文化財調査報告6 1981
- ・八尾市教育委員会「東郷遺跡：新進不動産株式会社ビル建設に伴う発掘調査概要」・「東郷遺跡：有限会社ユーライトマンション建設に伴う発掘調査概要」「昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査」—その成果と概要 1983
- ・(財)八尾市文化財調査研究会『成法寺遺跡』一八尾市光南町1丁目29番地の調査一 1983
- ・(財)八尾市文化財調査研究会「東郷遺跡発掘調査概要報告」「八尾市文化財発掘調査報告1980・1981年度」：(財)八尾市文化財調査研究会報告2 1983
- ・(財)八尾市文化財調査研究会「東郷遺跡」「昭和58年度事業概要報告」：(財)八尾市文化財調査研究会報告5 1984

図 版



調査区西部 方形周溝検出状況



調査区東部 遺構検出状況



5



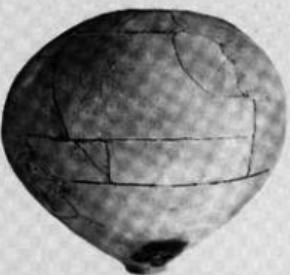
6



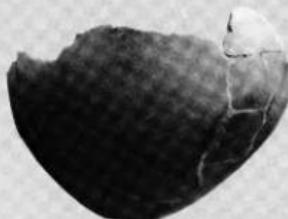
4



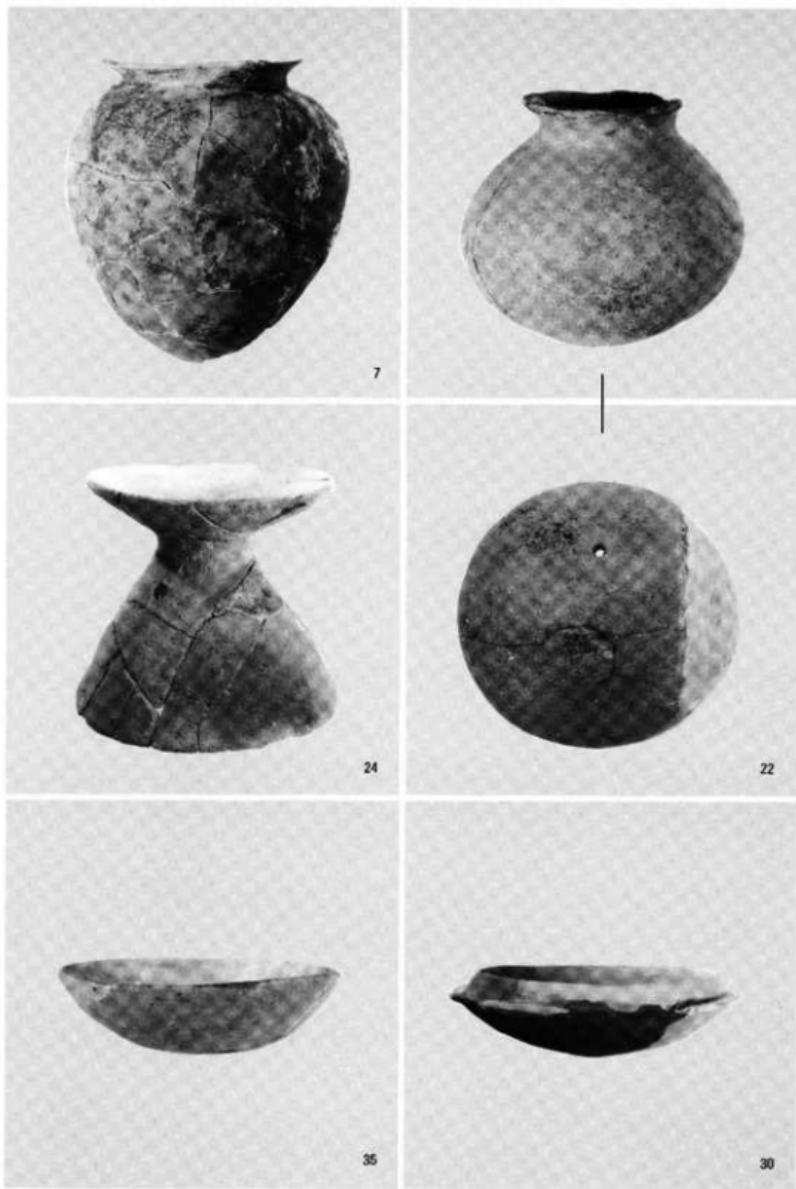
1



2



10



出土遺物

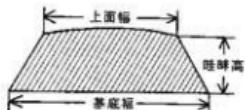
II 八尾南遺跡発掘調査概要報告

例 言

1. 本書は、八尾市西木の本4丁目4番地において実施した近畿財務局合同宿舎建設に伴う発掘調査の概要報告である。
1. 本書で報告する八尾南遺跡の発掘調査業務は、財團法人八尾文化財調査研究会が近畿財務局から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は昭和59年7月10日から昭和59年9月25日にかけて、原田昌則・成海佳子を担当者として実施した。なお、調査においては中野慶太・郡山順夫・吉原早智子・上村義浩・森山恵・相松隆・麻田優・萩原剛良・南草良彦・柏本幸寿・樽井正が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後の昭和59年9月26日から昭和60年3月30日まで実施し、上記の他、大地慶子・中塚実絵・村口美穂が参加した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測図—原田・成海・大地・吉原、図面レイアウト—原田・成海、トレース—成海・大地、遺物写真撮影—原田が担当した。
1. 本書の執筆は主に原田が担当したが、第4章出土遺物観察表は成海、第5章まとめは原田・成海が共同で行った。
1. 一部の出土遺物については、田中清美氏（財團法人大阪市文化財協会）の御教示を得た。記して感謝の意を表する。

凡 例

1. 実測図の縮尺率は、遺構は1:40・1:80・1:100を基調とし、遺物は製塙土器1:3・勾玉1:2、それ以外は1:4に統一した。
1. 遺物については通し番号を与え、実測図・写真図版とも共通している。
1. 遺構実測図の方針は、全て磁北を示している。
1. 水田畦畔の計測については、右図を参考にされたい。



本文目次

第1章 調査に至る経過	17
第2章 地理・歴史的環境	18
第3章 調査概要	23
第1節 調査方法	23
第2節 基本順序	24
第3節 調査結果	25
1 Aトレンチ	26
1) 検出遺構	26
2) 出土遺物	36
2 Bトレンチ	40
<第1調査面>	40
1) 検出遺構	40
<第2調査面>	41
1) 検出遺構	41
2) 出土遺物	45
<第3調査面>	47
1) 検出遺構	47
3 Cトレンチ	52
<第1調査面>	52
1) 検出遺構	52
<第2調査面>	54
1) 検出遺構	54
第4章 出土遺物観察表	57
第5章 まとめ	81

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	18
第2図	調査区設定図および地区割図	23
第3図	基本層序模式図	24
第4図	S B-1 平断面図	26
第5図	A レンチ平面図	(折込) 26-27
第6図	S K-1 出土遺物実測図	27
第7図	S K-1 平断面図	28
第8図	S K-2 出土遺物実測図	28
第9図	S K-3 平断面図	29
第10図	S K-3 出土遺物実測図 1	30
第11図	S K-3 出土遺物実測図 2	31
第12図	S K-3 出土遺物実測図 3	32
第13図	S K-3 出土遺物実測図 4	33
第14図	S K-3 出土遺物実測図 5	34
第15図	S K-4・S K-5 出土遺物実測図	34
第16図	S K-8・S K-9・S D-1・S D-2・S D-4 出土遺物実測図	35
第17図	S P-7 出土遺物実測図	36
第18図	A レンチ包含層出土遺物実測図 1	36
第19図	A レンチ包含層出土遺物実測図 2	37
第20図	A レンチ包含層出土遺物実測図 3	38
第21図	A レンチ出土製塙土器実測図	39
第22図	B レンチ平面図	(折込) 40-41
第23図	S K-11・S D-8 出土遺物実測図	41
第24図	S P-102 出土遺物実測図	42
第25図	S W-1 平断面図	43
第26図	S W-1 出土遺物実測図 1	44
第27図	S W-1 出土遺物実測図 2	45
第28図	B レンチ包含層出土遺物実測図 1	46
第29図	B レンチ包含層出土遺物実測図 2	47

第30図	Cトレンチ出土遺物実測図	52
第31図	Cトレンチ第1調査面平面図	53
第32図	人跡跡断面図	54
第33図	Cトレンチ第2調査面平面図	55

表 目 次

第1表	水田法量表	51	第3表	八尾南遺跡における遺構出土初期 須恵器・韓式系土器一覧表	86
第2表	畦畔法量表	51			

図 版 目 次

図版一	Aトレンチ全景	図版一二	AトレンチSK-1出土遺物
図版二	AトレンチSK-3	図版一二	AトレンチSK-2・SK-3出土 遺物
同	断面		
図版三	AトレンチSB-1	図版一四	AトレンチSK-3出土遺物
同	柱根検出状況(SP-51)	図版一五	AトレンチSK-3出土遺物
図版四	Bトレンチ第1調査面	図版一六	AトレンチSK-3出土遺物
図版五	Bトレンチ第1調査面畦畔I	図版一七	Aトレンチ出土製塩土器 同 裏面
同	畦畔II		
図版六	Bトレンチ第2調査面	図版一八	AトレンチSK-4・SK-5・S K-8・SK-9・SP-7出土遺物
図版七	Bトレンチ第2調査面SW-1	図版一九	Aトレンチ包含層出土遺物
同	10F地区包含層遺物出土状況	図版二〇	Aトレンチ包含層出土遺物
図版八	Bトレンチ第3調査面	図版二一	BトレンチSK-11・SD-8・S W-1出土遺物
図版九	Cトレンチ第1調査面	図版二二	Bトレンチ包含層・Cトレンチ包含 層出土遺物
図版一〇	Cトレンチ第2調査面		
図版一一	Cトレンチ第1調査面水田d		
同	第2調査面人跡跡		

第1章 調査に至る経過

当調査地の位置する八尾市西木の本4丁目は、八尾南遺跡推定範囲の北辺部に位置している。隣接する大阪市とは、調査地の西側と北側を境として区割されており、市域を境として遺跡名も長原遺跡と区別されている。遺跡名を異にする長原遺跡も、本来は一連の遺跡として捉えられるべきもので、両遺跡に含まれる地域は、地下鉄谷町線延伸工事および近畿自動車道天理～吹田線建設工事に伴う一連の発掘調査以降、急激な開発が各所で実施されており、調査数も飛躍的に増加している。

今回の調査地である西木の本4丁目では、八尾南遺跡発掘調査〔八尾南遺跡調査会1981〕^{注1}後新たな開発に対応するための基礎資料を作成する目的で、八尾市教育委員会が昭和55年6月に八尾南遺跡範囲確認調査〔八尾市教育委員会1981〕^{注2}を実施している。調査の結果、平安時代の水田遺構と古墳時代中期の遺物包含層が確認され、遺跡の北方への広がりが新たに認識された。さらに昭和56年7月、前記調査区の西側で実施された防衛庁宿舎建設工事に伴う発掘調査〔(財)八尾市文化財調査研究会1983〕^{注3}では、既往調査で確認した平安時代の水田遺構の構築面より50cm下層において、古墳時代中期の集落址が検出され、2時期の生活面の存在が明らかにされた。なかでも古墳時代中期の集落遺構の存在は、当遺跡の範囲が北方へも広がることを明確にしたことにとどまらず、隣接する長原遺跡との有機的な関係を示唆する資料として注目された。

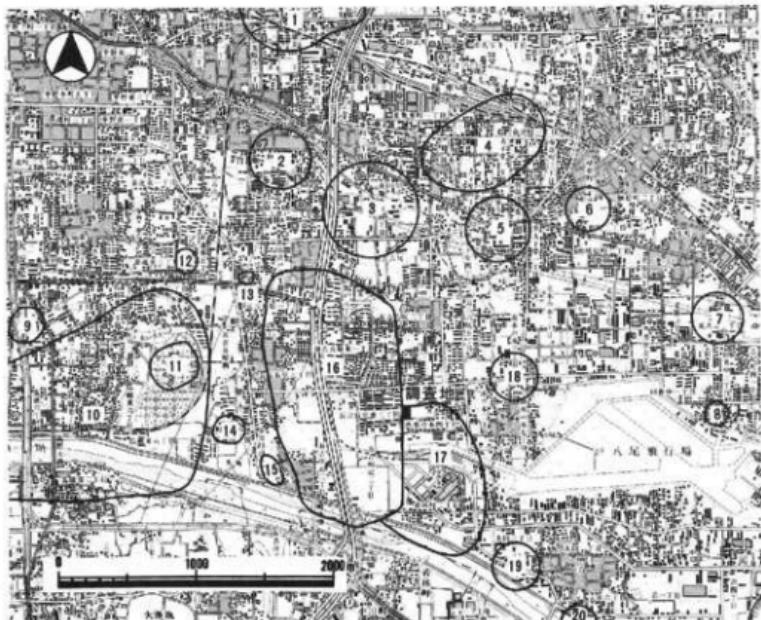
この様な情勢下、近畿財務局から昭和59年度の事業として、前記調査地の西側に合同宿舎(鉄筋5階建建物)を建築する旨の計画書が、八尾市教育委員会文化財室に提出された。これら一連の計画書を受けた八尾市教育委員会文化財室は、当該地が既往調査地に隣接する関係で、しかも建物の基礎杭構築深度が遺構面に達するため、八尾市文化財保存に係る事務取扱い要領に基づき発掘調査が必要であると判断し、事業者へその旨を通告した。その結果、近畿財務局から大幅な建築変更が困難との回答を得たため、基礎工事によって遺構の破壊が予想される建物建築予定地を対象に、記録保存に必要な資料を作成する目的で発掘調査を実施することが三者間で了解された。

発掘調査は、財團法人八尾市文化財調査研究会が主体となって実施することが、八尾市教育委員会文化財室・近畿財務局・財團法人八尾市文化財調査研究会の三者間で決定され、契約締結後、現地調査に着手した。

現地発掘調査期間は、昭和59年7月10日から9月25日までで、調査面積は900m²を測る。出土遺物の整理作業および報文作成業務は、引き続き昭和59年9月26日から昭和60年3月30日まで実施した。

第2章 地理・歴史的環境

八尾南遺跡は、河内台地の東縁から北側の河内低平地にかけて広がる旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。西接する大阪市側の長原遺跡も行政区割で区別されているものの、本来は一連の遺跡として捉え得る性格を帶びた遺跡と考えられる。既に両遺跡名を冠する報告書が数冊刊行されており、地理的環境・歴史的環境についても、巨視的に概説されたものや遺漏なく繰り説明されたものがあり、大概的な変遷は語り尽くされた感がある。由にここでは、巨視的な捉え方はそれらに譲り、八尾南遺跡および長原遺跡を遺跡名の概念に固執せず、一地域内での遺跡推移の範囲で捉えたうえで、今日までに蓄積された花粉分析の結果から推定される自然環境を基に、周辺遺跡をミクロ的に考えていきたい。^{註4}



1 加美遺跡	6 植松遺跡	11 瓜破磨寺	16 長原遺跡
2 竹洞遺跡	7 老原遺跡	12 喜連東所在遺跡	17 八尾南遺跡
3 亀井遺跡	8 田井中遺跡	13 出戸四丁目所在遺跡	18 木の本遺跡
4 駄部遺跡	9 瓜破北遺跡	14 長吉野山遺跡	19 太田遺跡
5 太子堂遺跡	10 瓜破遺跡	15 長吉川辺遺跡	20 大正橋遺跡

第1図 調査地周辺図

本地域周辺で人類の歩影が認められるのは、今から約1万年前の長原遺跡の東部地区（長吉川辺3丁目）である。これらの旧石器人の生活の舞台となった基盤面は沖積層下部層に相当する上層で、長原地山層と付称されている。この土層は、最近の発掘調査やボーリングデータが示すように、南側から北側へ急激に下っていることが指摘されており、当時の活動の場は、堆積作用の比較的緩慢な南辺部や西辺部に比定することができる。この時期の遺物は、長原遺跡（長吉川辺3丁目）で確認した長原地山層から、小型ナイフ・石核・剣片等が出土している。他に、八尾南遺跡（B地区・剣片）・長原遺跡（長吉長原西1丁目・国府型ナイフ）・瓜破遺跡（国府型ナイフ）・山之内遺跡（剣片）からも出土が報ぜられているが、全て後世の遺構や包含層中に含まれたものである。

縄文時代草創期の遺物としては、有舌尖頭器があり、長原遺跡（長吉川辺3丁目）・桑津遺跡から、土器を共伴せず単独に出土している。

縄文時代前期以降の河内平野の環境は、縄文海進による河内湾の形成（河内湾Ⅰの時代）、^{註5}河内湾溝辺部の三角州の発達と上町台地北方の砂州の発達による淡水化（河内湾Ⅱの時代）^{註5}の変遷が認められるが、当遺跡周辺ではこの時期に比定される遺構・遺物は認められない。

再び人々がこの地に活動を始めるのは縄文時代後期で、河内湾の淡水化が進み、河内潟に移行する時期（河内潟の時代）である。この時期の八尾南遺跡周辺の自然環境は、後背湿地～三角州性の低温な環境で、樹木花粉が認められず、ヨモギ属・イネ科・カヤツリグサ科が主で、比較的乾燥した草原地帯であったと推定される。この時期の遺物は、八尾南遺跡（C-S地区）・長原遺跡（長吉出戸8丁目・長吉長原東3丁目）・城山遺跡から、甕等の細片が少量出土しているが、いずれも明確な遺構に伴うものではなく、縄文時代の狩獵・採集経済を維持するには、不適当な土地であったものと推定される。

縄文時代晩期になると、長原遺跡（長吉出戸8丁目・長吉川辺3丁目）で、居住地と墓域が確認されており、この時期における集落遺跡の存り方を示す資料として注目される。これらの遺跡から出土する土器は、長原式土器と呼ばれるもので、土器型式では船橋式土器に後続しており、縄文時代晩期最終末に比定できる。なお、花粉分析結果から復元できる当地の縄文時代晩期最終末～弥生時代前期の自然環境は、縄文時代後期とは一転して森林地帯であったようであるが、イネ型花粉の出現率も高い。事実、長原式土器の中には稲穀の圧痕があるものも存在しており、一部で稲作が行われていたことが推定される。これらの事柄は、縄文時代の生活環境に稲作が導入され、徐々に変化していく過渡期的な現象を示す資料と考えられ、新しい文化の受容が、この時期に沖積地への進出を可能にした要因であったと考えられる。なお、瓜破北遺跡・城山遺跡からも縄文時代晩期最終末に比定される土器・石器が出土しているが、遺構に伴うものでなく、実態は不明である。

弥生時代前期も、自然環境には人差がなかったものと推定される。この時期の遺跡は、大乗川の自然堤防上や、羽曳野丘陵の縁辺部に集中して立地している。長原遺跡（長吉川辺3丁目）では前期古段階の甕の細片が検出されており、周辺に遺構の存在が想定できる。しかし、遺跡が急増するのは中段階以降で、八尾南遺跡（C-S地区）・山井中遺跡・長原遺跡（長吉出戸8丁目）・城山遺跡・龜井遺跡・瓜破遺跡・瓜破北遺跡等があり、さらに前期末の水田跡が、長原遺跡（長吉川辺3丁目）で検出されている。

弥生時代中期の当遺跡周辺の自然環境は、前期と変わりなく森林地帯であったようで、稻作を主とする社会にあっては、不適当な土地であったようである。この時期、北方に広がる低平地に木の本遺跡が新たに活動を始める他、前期から続く山井中遺跡・龜井遺跡・長原遺跡（長吉出戸8丁目）・城山遺跡・瓜破北遺跡では、集落の規模が一段と拡大している。

弥生時代後期に入ると、羊齒類胞子やイネ科・ヨモギ属等の草本類が急増し、その反面、アカガシ属・シノノキ属の花粉が減少する傾向で、八尾南遺跡では、B-1地区・C-1地区を中心として再び集落が形成される。この時期長原遺跡では、中期の集落に引き続き、長吉出戸8丁目を中心にして集落が営まれている。一方、墓域としては、長原遺跡（長吉出戸8丁目・長吉長原東1丁目・長吉川辺3丁目）・八尾南遺跡（若林3丁目）で方形周溝墓が検出されている。

古墳時代前期（庄内式期）になると、遺跡の中心は八尾南遺跡（D-1地区・D-2地区・D-3地区）および瓜破北遺跡に移動したようで、集落遺構・墳墓遺構を備えた大集落を形成している。これら以外この時期には、長原遺跡（長吉長原東3丁目）・城山遺跡で土坑が検出される程度で、遺跡間の関連をつかむまでに至っていない。ただ、八尾南遺跡（若林町1丁目）^{註6}で検出された破鏡は、瓜破北遺跡および北方に位置する加美遺跡と同様、方形周溝墓に伴う副葬品の可能性があり、居住集団の性格と共に、当時の埋葬に対する意識を反映した資料として注目できる。

〔庄内式期〕に続く〔布留式期〕も前代と同様、八尾南遺跡（C-4地区・D-1地区・D-2地区）・瓜破北遺跡が中心的な集落であったようであるが、周辺の集落は増加する傾向で、木の本遺跡（南木の本4丁目）・長原遺跡（長吉出戸8丁目・長吉長原東1丁目・長吉川辺3丁目）に集落の存在が認められる。一方、この頃になると古墳の造営が始まり、八尾南1号墳（B-4地区）・長原1号墳（塚の本占塚）・長崎85号墳（一ヶ塚古墳）が出現する。

古墳時代中期に入っても当地は古墳造営が盛んで、長原遺跡では一辺3~15mの小型方墳が約100基検出されている。これらの群集墳は旧地形や分布状況から、瓜破・長原・出戸の各群に区別されているが、これらに八尾南遺跡（若林3丁目）の方墳および龜井古墳を含めて古墳の分布を考えるとき、何らかの開発の中心がこの地域に移動したと考えざるを得ない。さらに、この時期の花粉分析結果からも、大規模な伐採により原生林が二次林化したことがマツ属花粉

の増加により明確にされており、開発の事実が植物相に反映した現象と考えられる。この時期の集落は、八尾南遺跡（C-4地区・西木の木4丁目）・木の木遺跡（南木の木4丁目）・大正橋遺跡・長原遺跡（長吉川辺3丁目・長吉長原西1～3丁目）・瓜破遺跡で検出されている。また、この時期は当地域周辺の集落形成においても、堅穴住居から掘立柱建物に移行する直期であり、生活様式にも変化が生じたことが容易に推察できる。韓式系土器や初期須恵器の出しがそれで、新たに長柄甕・平底鉢・壺の器種が加わるとともに、製塙土器から推察される塙の安定供給も、当時の社会生活を発展させた要因の一つであったと考えられる。しかし、後期前半を境として古墳の造営も終焉を迎えると、周辺の集落も減少の一途を辿ったようで、明確な遺構の検出例も少なくなる。

奈良時代になると、周辺一帯は畔耕を阡陌に配する水田地帯に変化していたようで、地形も現在に近い景観を呈していたものと推定できる。八尾南遺跡・長原遺跡を通じてこの時期の遺構・遺物は希薄であるが、瓜破遺跡内には複弁蓮華文軒丸瓦・近江系飛雲文軒丸瓦の出土を見た成本庵寺や瓜破庵寺の存在が推測されている。一方、長原遺跡内においても奈良時代に比定される屋瓦が確認されており、古代寺院の存在が想定できよう。

平安時代になると、条里区割に合致した集落が、長原遺跡（長吉川辺3丁目）・木の木遺跡（木の木1丁目）に出現するが、開発が活発に実施されるようになるのは中期以降で、なかでも長原遺跡では建物群が耕地内に分散して検出されており、計画的な土地利用が実施されていたことが窺われる。

平安時代末期～鎌倉時代前期になると、八尾南遺跡（若林3丁目）・木の木遺跡（空港2丁目）・津堂遺跡が出現する。この時期長原遺跡（長吉川辺3丁目）では、集落の周囲に大溝を廻らせる環濠集落化が顕著で、集落形態も散村から集村に変化している。

続く鎌倉時代・室町時代も遺跡の中心は長原遺跡（長吉川辺3丁目）にあったようで、八尾南遺跡範囲では、水田に関連する遺構を確認するにすぎない。さらに室町時代中期以降は、長原遺跡の範囲においても遺構・遺物の存在が希薄で、以後居住地としては顧みられることなく、周辺一帯は水田地帯に移り変わったようである。

註1 八尾市遺跡調査会 「八尾市遺跡」 一大阪市高速電気鉄道2号線建設に伴う発掘調査報告書－1981 以後【八尾市遺跡1981】と記述する。

註2 八尾市教育委員会 「八尾南遺跡範囲確認調査」『八尾南遺跡・東部遺跡発掘調査概要』：八尾市文化財調査報告6 1981 以後【八尾市教育委員会1981】と記述する。

註3 (財)八尾市文化財調査研究会 「八尾南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査

- 概報1980・1981年度」：（財）八尾市文化財発掘調査研究会報告2「1983以後（（財）八尾市文化財調査研究会1983）と記述する。
- 註4 安川善憲 「八尾南遺跡の出土の花粉分析」『八尾南遺跡』大阪市高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書一 八尾南遺跡調査会編 1981
- 註5 横山卓雄 「氷河時代の大坂」『大阪府史第1巻古代編I』 大阪府編 1978
- 註6 昭和59年1月9日～7月6日、八尾市岩林町1丁目49地で、（財）八尾市文化財調査研究会が発掘調査を実施した。
- 註7 昭和58年2月28日～6月6日、八尾市岩林町3丁目27地で、（財）八尾市文化財調査研究会が発掘調査を実施した。

〔参考文献〕

- （財）八尾市文化財調査研究会 「八尾南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 1980・1981年度』：（財）八尾市文化財調査研究会報告2 1983
- （財）八尾市文化財調査研究会 「木の本遺跡」一八尾市若狭事業に伴う発掘調査一：（財）八尾市文化財調査研究会報告4 1984
- （財）八尾市文化財調査研究会 「八尾南遺跡」『昭和58年度事業概要報告』：（財）八尾市文化財調査研究報告5 1984
- 八尾南遺跡調査 「八尾南遺跡」大阪市高速電気軌道2号線建設事業に伴う発掘調査報告書-1981
- 八尾市教育委員会 「八尾南遺跡範囲確認調査」「八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要」：八尾市文化財調査報告6 1981
- 八尾市教育委員会 「木の本遺跡：福田マンション建設に伴なう発掘調査概要」「昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査」一その成果と概要一 1983
- 長原遺跡調査会 「長原古墳発掘調査報告」-大阪市交通局地下鉄谷町線延長工事、第31・32工区の発掘調査- 1978 同改訂版 （財）大阪市文化財協会 1982
- （財）大阪市文化財協会 「平野区長吉川遺跡調査報告」・「平野区長吉出戸4丁目所在遺跡発掘調査略報」「大阪府下埋蔵文化財担当者研究会第1回資料」 1979
- （財）大阪市文化財協会 「瓜破北遺跡」一共同講習会工事に伴う発掘調査報告書一 1980
- （財）大阪市文化財協会 「瓜破北遺跡II」-大阪市下水整備新造工事（瓜破地区その8・その9）に伴う発掘調査報告書 1981
- （財）大阪市文化財協会 「長原遺跡発掘調査報告II」-大阪市高速電気軌道第2号線延長工事に伴う発掘調査報告書一 1982
- （財）大阪市文化財協会 「長原遺跡発掘調査報告III」-（仮称）大阪市立第8幼稚学校建設に伴う発掘調査報告書一 1983
- （財）大阪市文化財協会 「瓜破遺跡」 大阪市土木局施工の大阪市平野区瓜破6丁目側道舗装新設工事に伴う遺跡発掘調査報告書一 1983
- （財）大阪市文化財協会 「加美遺跡（K-M4-1次）発掘調査概要」「大阪府下埋蔵文化財担当者研究会（第10回）資料」 1984
- （財）大阪市文化財協会 「発掘された大阪」-（財）大阪市文化財協会設立5周年記念 1984
- 大阪府教育委員会 「八尾市龜井遺跡発掘調査概要」-八尾市龜井町2丁目所在一：大阪府文化財調査報告1970-3 1971
- 大阪府教育委員会 「津守遺跡発掘調査概要」「大阪府文化財調査概要1983年度」 1984
- 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 「城山遺跡現地説明会資料」 1984
- （財）大阪文化財センター 「龜井・城山」一枚尾川南部流域下水道事業吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書一 1980

第3章 調査概要

第1節 調査方法

合同宿舎の建築予定地に合わせて3箇所に調査区を設定し、南側から順にA～Cトレンチと付称した。

調査の方法は、最終調査深度が地表下3.0m迄と明示されていたため、オープン調査法で実施した。但し、既往調査の際、多量の湧水が認められたため、壁面の保持に憂慮し、勾配を充分に保つ方法を取った。掘削方法は、地表面より1.6m迄は機械掘削を行ない、以下は土層薙理に従って人力掘削を実施し、精緻な調査に務めた。

調査地の地区割は、調査区の西側道路の東側の延長線を南北線とし、東西50m、南北80mに渡って設定した。設定した一区割単位は5m四方で、南東隅を基準点にし、東西線はアルファベット（東からA～K）・南北線は数字（南から1～17）で付称した。なお、地区名の表示は、一区割の南東隅に交差する南北線・東西線を用い、1A～16Jと付称した。



第2図 調査区設定図および地区割図 (1 : 1250)

第2節 基本層序

当調査地一帯は、戦時中の軍事基地の引き込み線のあった地区であることが、調査前に指摘されていた。機械掘削を実施してみると、プラットホームのコンクリート塊や、排水路が南北に走っていることが判明した。その中には、古墳時代中期初頭の遺構面に達している部分も認められたが、危惧された状態でもなく調査を実施することができた。

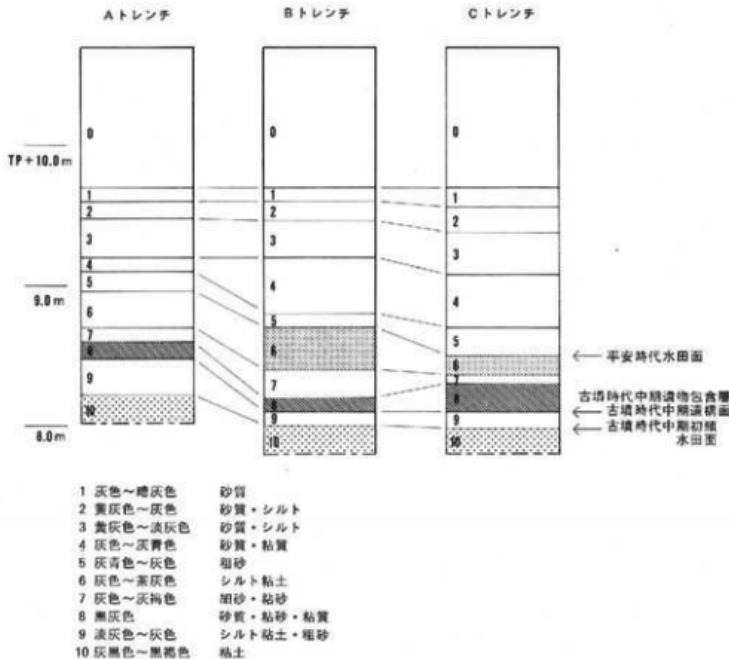
ここでは、各調査トレンチで普遍的に存在した10層を挙出して基本土層とした。

第0層：盛土。層厚120~140cm。地表面の標高はTP + 10.70~10.80mを測る。

第1層：灰色～暗灰色砂質。層厚10~20cm。旧耕土および軍事基地当時の地表面を示す上層である。

第2層：黄灰色～灰色砂質シルト。層厚10~30cm。床土。

第3層：黄灰色～淡灰色砂質シルト。層厚10~50cm。比較的安定した土層で、調査区全域に



第3図 基本層序模式図

渡ってほぼ水平に堆積している。

- 第4層：灰色～灰青色の色調で、土質には砂質と粘質の2種がある。北側に行くに従って層厚が漸増しており、土質も砂質から粘質に変化している。層厚10～40cm。
- 第5層：淡灰色～灰色粗砂。層厚10～30cm。平安時代の水田上部に被る土層である。細砂・中砂を主体とする土層で、洪水時の一時的な堆積であることが看取される。層中に平安時代末期に比定される遺物を包含するが、出土量は希少である。
- 第6層：灰色～茶色シルト粘土。層厚10～40cm。比較的安定した土層で、調査区全域に渡って広がっている。B・Cトレンチでは、平安時代に水田として利用された土層で、層中には酸化鉄・マンガン等が斑点状に沈着している。
- 第7層：灰色～灰褐色の色調で、土質には、細砂・粘砂がある。第5層と同様、洪水を起因とする土層である。層厚10～30cm。
- 第8層：黒灰色の色調で、土質には砂質・粘砂・粘質の3種がある。古墳時代中期の遺物を包含している。ただ、Cトレンチで同時期に比定される土層は、灰茶色粘土であり、層相を異にしている。層厚10～15cm。
- 第9層：淡灰色～灰色の色調で、粗砂を主体とするがAトレンチ西側では、シルト質粘土に変化している。層厚5～35cm。第5層・第7層と同様洪水に関係する土層で、A・Bトレンチでは古墳時代中期の集落を構成している。
- 第10層：灰黑色～黒褐色粘土。層厚20cm以上。全体に粘性の強い土層で、古墳時代中期初頭の水田面を構成している。

第3節 調査結果

当初の教育委員会の指示事項では、表土下2.0m付近に広がる平安時代の水田遺構と、その下層0.3m付近に広がる古墳時代中期の集落址が調査対象面として明記されていた。

上記の指示に従って、発掘調査を開始したが、Aトレンチでは平安時代の水田遺構が確認できず、古墳時代中期の集落遺構を検出したのみであった。一方、B・Cトレンチでは古墳時代中期の遺構面より約15cm下層で、古墳時代中期前半の水田遺構を検出し、更に前時代の遺構面が存在することが確認された。なお、今回検出した各時期の遺構構築面の状況や、既往調査の結果から、当調査対象地の中央部から東部にかけて谷状地形を呈していることが判明した。今回の調査においても、それらを物語る様に、古墳時代中期初頭から平安時代末期に比定される土層間で、少なくとも二時期の洪水の痕跡を看取することができた。この様なことから、当遺跡は微地形に左右されながらも、その都度遺跡の性格を変化させつつ推移したものと推定される。以下、各トレンチごとに概観する。

1 Aトレンチ

調査対象地の南側に設定したトレンチで、40m×10mの規模を有する。

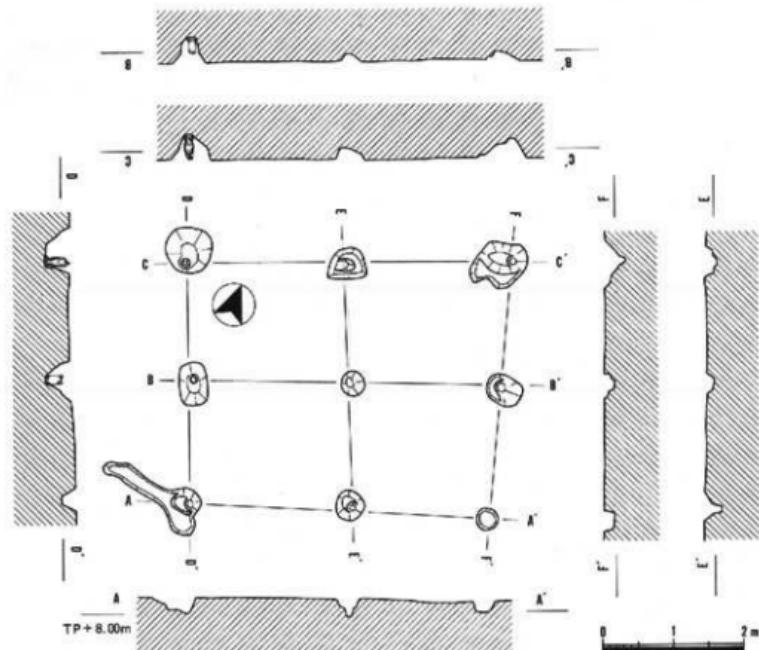
調査の結果、表土下2.2m (TP + 8.50m) 付近に存在する第9層淡灰色粗砂～灰色シルト質粘土層上面で、古墳時代中期に比定される掘立柱建物1棟 (SB-1)・土坑7基 (SK-1～SK-7)・溝6条 (SD-1～SD-6)・柱穴96個 (SP-1～SP-96) を検出した。

1) 検出遺構

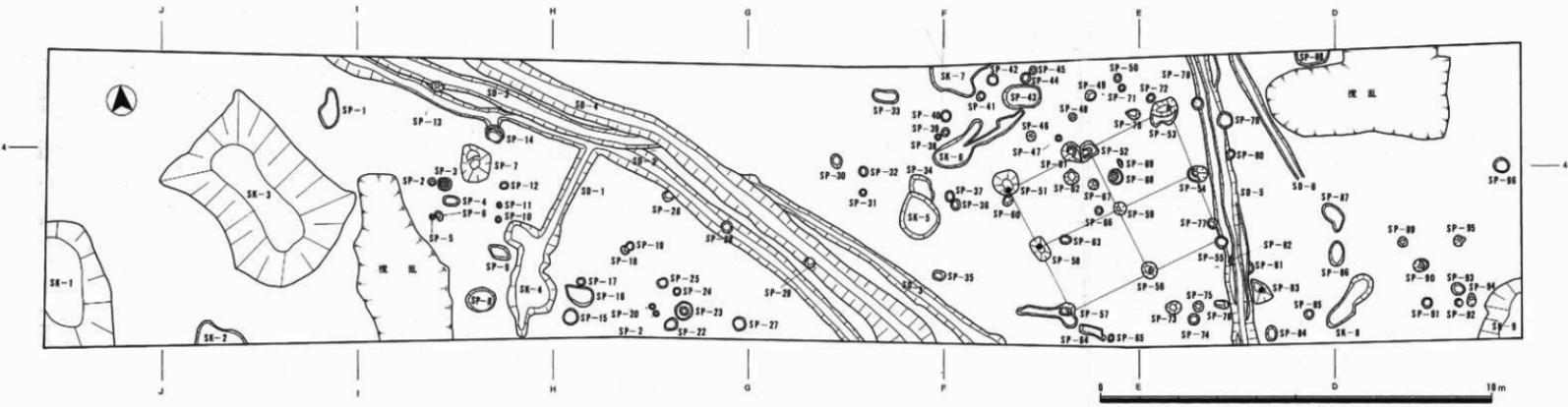
掘立柱建物 (SB)

SB-1

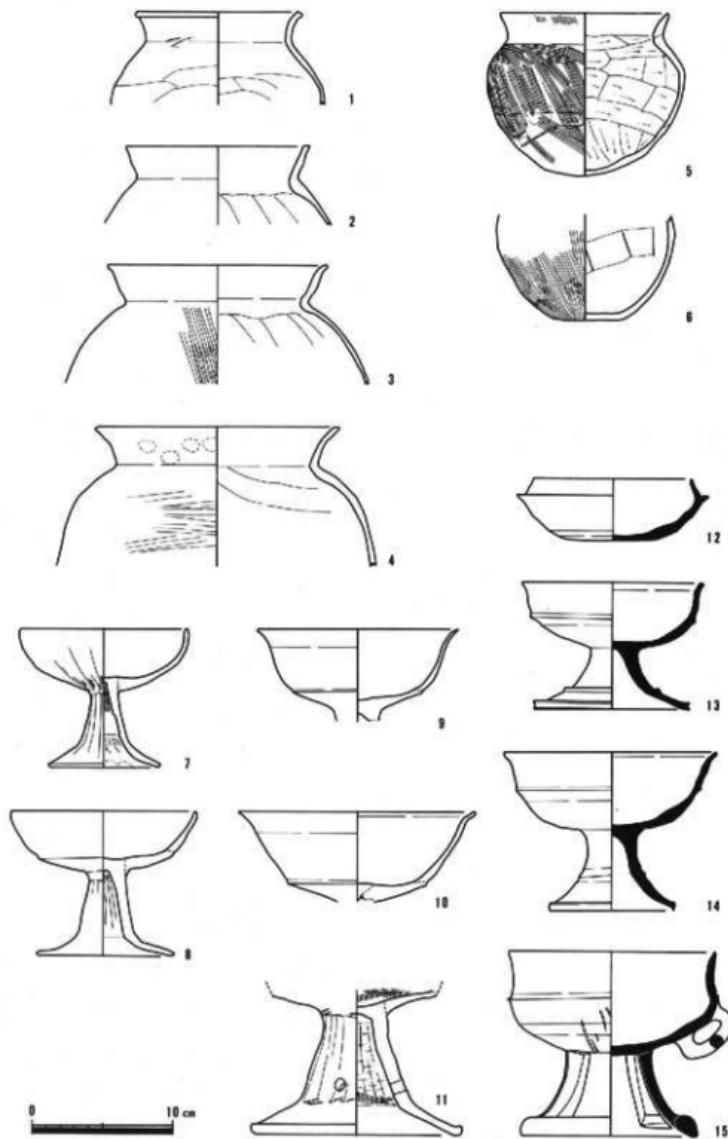
調査区の東部で検出した。第9層淡灰色粗砂層上面を構築面とするもので、SP-51～SP-59で構成されている。東西2間(5.0m)×南北2間(4.0m)の規模で、中央に束柱を有する。主軸方向はN-8°-Eで、床面積は20m²を測る。掘立柱建物を構成する柱穴は、径30～70cm・深さ10～32cmを測り、内部には黒灰色粘質土が堆積している。なお、SP-51およびSP-58には柱根が遺存しており、SP-56からは須恵器杯の細片が出土している。



第4図 SB-1平面図(1:80)



第5図 Aトレンチ平面図(1 : 100)



第6図 SK-1出土遺物実測図

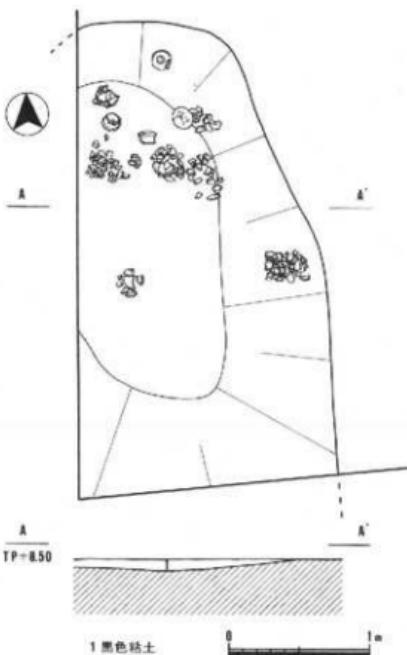
土坑（SK）

SK-1

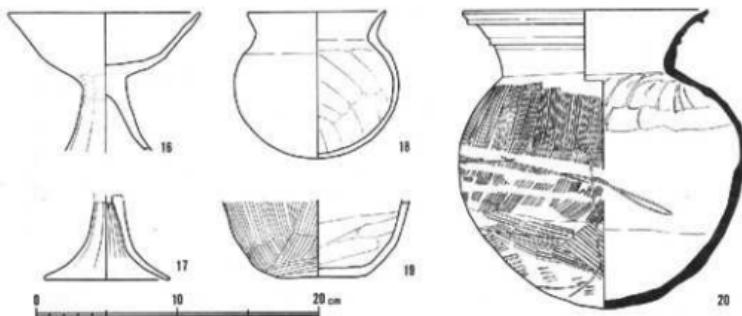
調査区の南西隅で検出した。灰色シルト質粘土を構築面とする土坑で、断面皿状を呈する。検出部で東西1.7m・南北3.3m・深さ2~12cmを測る。内部には黒色粘土1層が堆積しており、層中から土師器甕（1~6）・鉢・高杯（7~11）、須恵器甕・杯身（12）・杯蓋・無蓋高杯（13~15）等が出土している。

SK-2

調査区の南端部で検出した土坑で、南部は調査区外のために全容は不明である。SK-1同様灰色シルト質粘土を構築面としており、検出部の数値で東西1.3m・南北0.5m・深さ10cm前後を測る。内部堆積土は黒灰色粗砂1層で、層中から土師器甕（18・19）・壺・高杯（16・17）、須恵器甕（20）が比較的良好な形で出土している。



第7図 SK-1 平断面図(1:40)

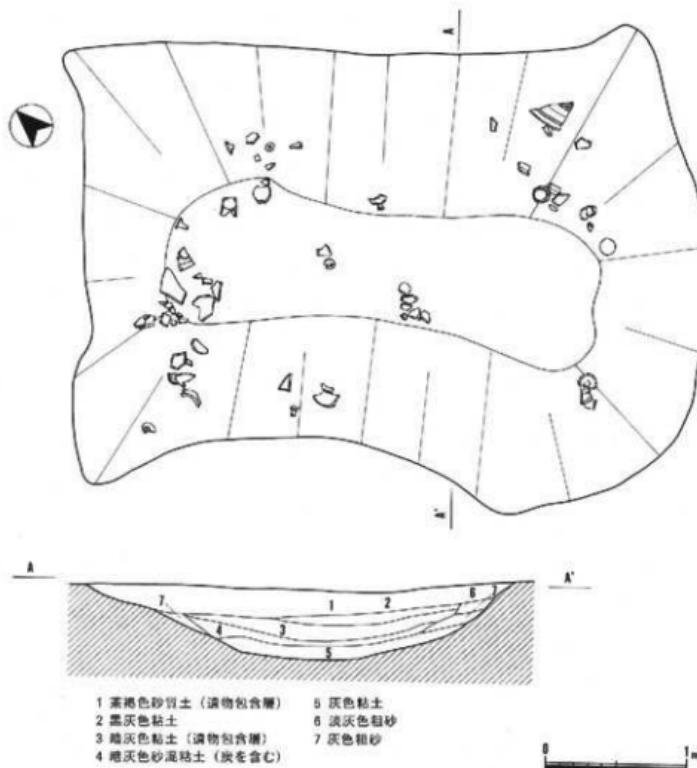


第8図 SK-2 出土遺物実測図

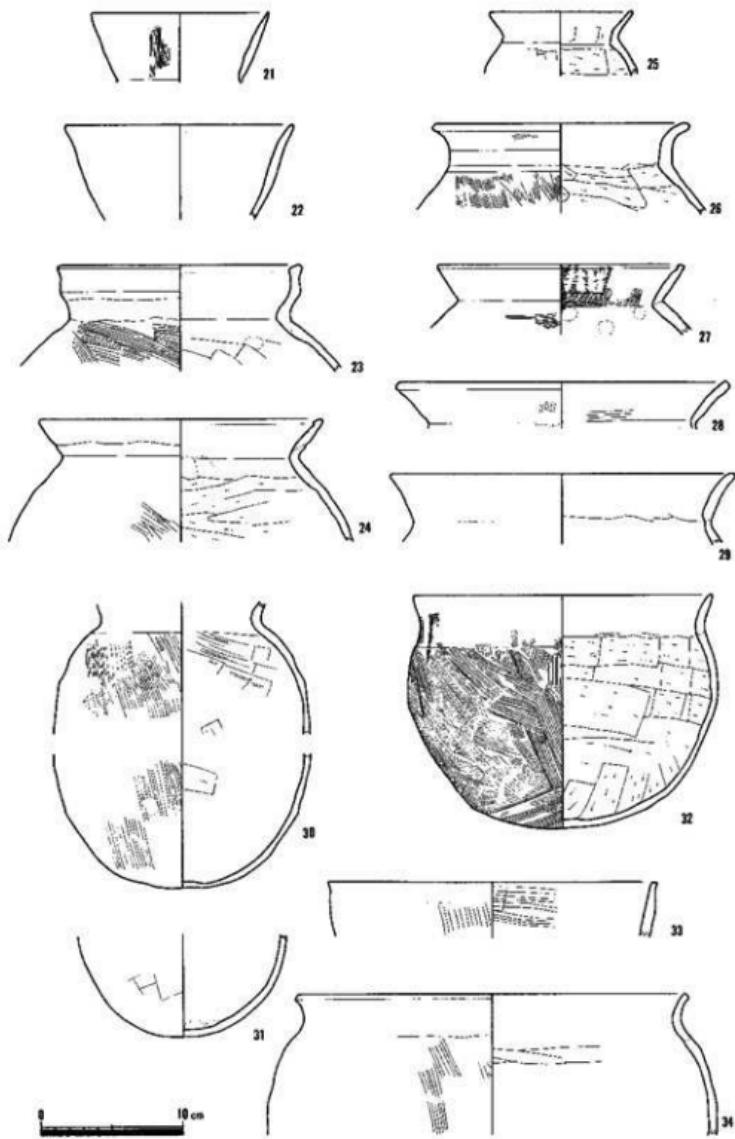
SK-3

上面長方形を呈する大型の土坑で、長辺4.2m・短辺3.2m・深さ28~54cmを測る。断面の形状は擂鉢状で、坑底は湧水層である粗砂層に達している。内部堆積土は、上層より第1層茶褐色砂質土・第2層黒灰色粘土・第3層暗灰色粘土・第4層暗灰色砂混粘土・第5層灰色粘土・第6層淡灰色粗砂・第7層灰色粗砂で構成されている。

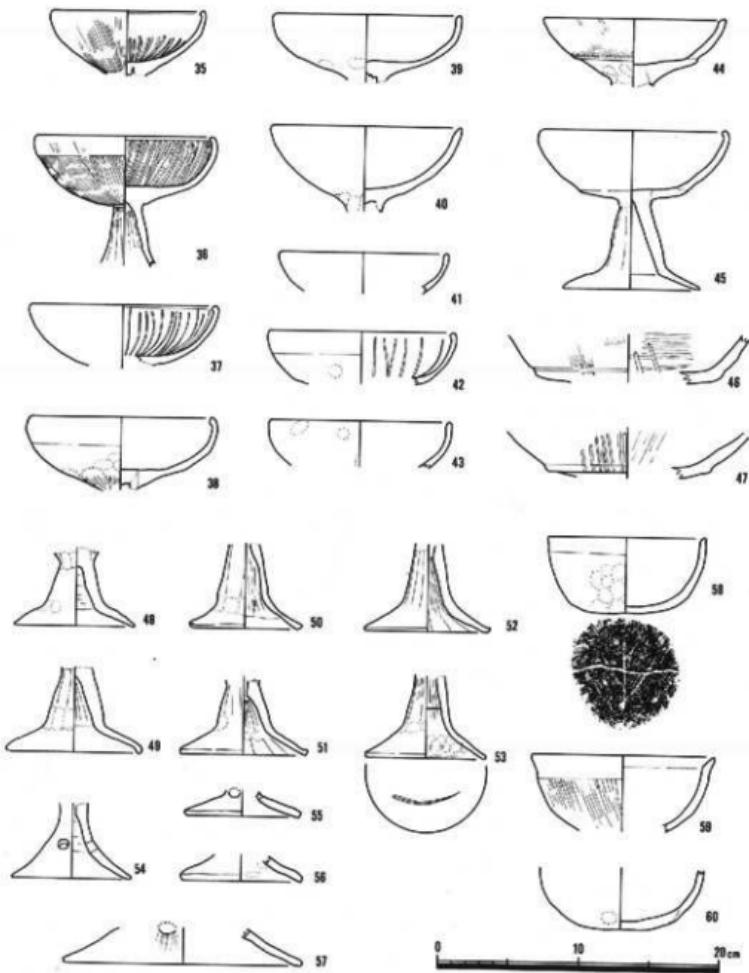
出土遺物は第4層を中心として、土師器壺(21・22)・甕(23~31・34)・高杯(35~57)・鉢(32)・杯(58~60)・甑(33)、須恵器壺(78・79)・杯蓋(61~66)・杯身(67~72)・高杯(73~77)・器台(80・81)、製塙土器(146~169・173~180)、滑石製勾玉(第14図)が出土している。



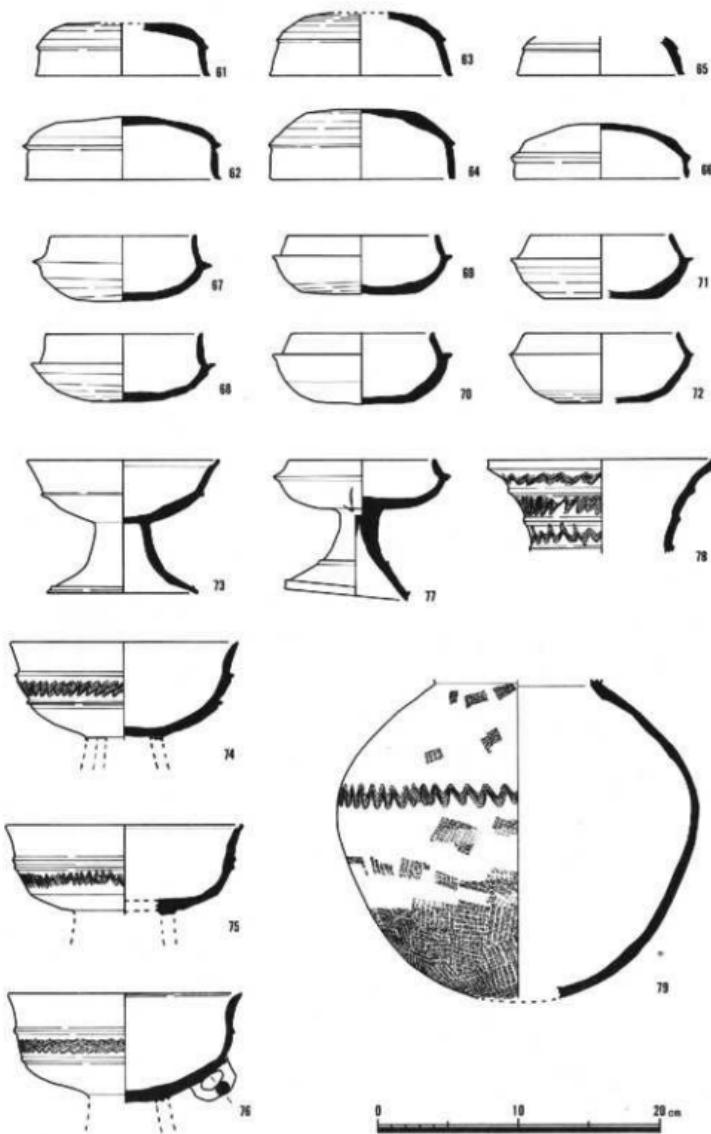
第9図 SK-3 平断面図



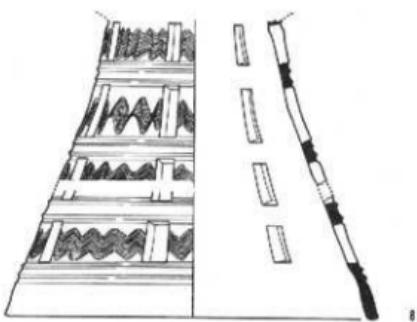
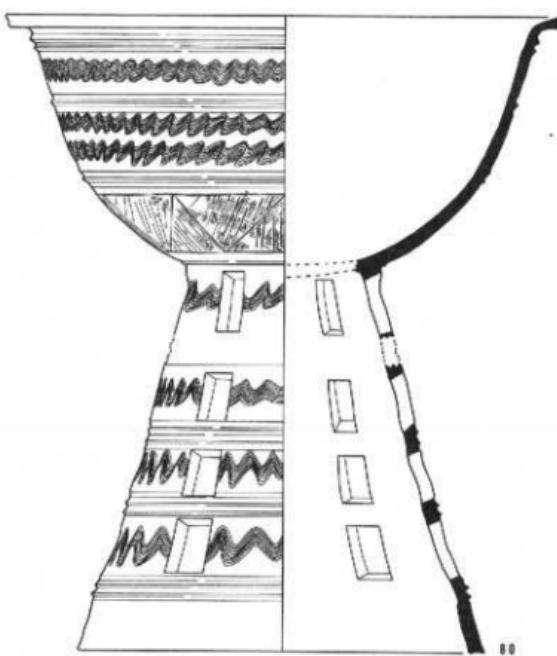
第10図 SK-3 出土遺物実測図1



第11図 SK-3出土遺物実測図2



第12図 SK-3出土遺物実測図3



0 10 20 cm

第13図 SK-3出土遺物実測図4

勾玉は、第4層暗灰色混粘土から出土した。半月形を呈する滑石製のもので、全長4.0cm・最大幅1.5cm・厚さ0.35~0.4cmを測る。全体に丁寧な作りで、表面は2~3方向に研磨され、平滑にされている。頭部には、径2mmを測る孔が背部寄りに穿たれている。

SK-4

SK-3のさらに東で検出した上面不定形を呈する土坑で、北東隅から溝SD-1が伸びている。東西1.25m・南北2.95m・深さ15cm前後を測る。内部堆積土は黒灰色粘土1層で、層中から土師器甕(83)・高杯(82)・小型鉢・須恵器杯蓋(84)・杯身(85)・高杯(86)・製塙土器(172)等が少量出土している。

SK-5

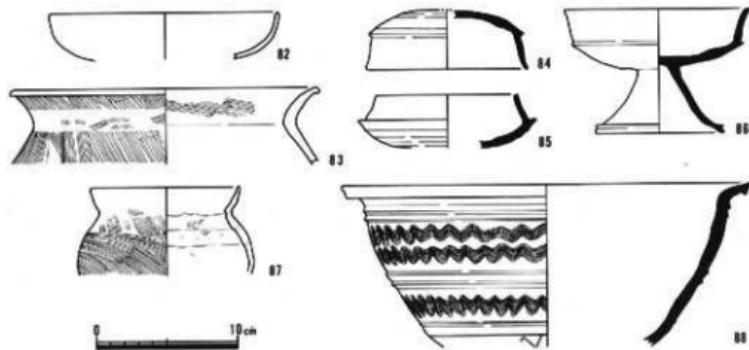
調査区の中央東寄りで検出した。上面は南北に長い楕円形を呈するもので、長径1.2m・短径1.0m・深さ16cmを測る。内部堆積土は黒灰色粗砂1層で、層中より土師器甕(87)・壺・須恵器器台(88)の破片が少量出土している。

SK-6

SK-5の北で検出した。南西から北東方向に長い不定形の土坑で、途中で枝状に広がっている。長辺2.5m・短辺0.7m・深さ3cm前後を測る。内部には黒灰色粗砂1層が堆積するが、遺物は出土しなかった。

SK-7

SK-6の北側の調査区北端で検出した不定形の土坑である。検出部で東西1.5m・南北0.8m・深さ8cm前後を測る。内部には黒灰色粗砂が堆積しているが、遺物は出土しなかった。



第15図 SK-4 (82~86) + SK-5 (87・88)出土遺物実測図

SK-8

調査区南東で検出した上坑で、上面は長い楕円形を呈する。長径1.6m・短径0.4m・深さ9cm前後を測る。内部堆積土は黒灰色粗砂で、層中から土師器壺(89)の破片が出土している。

SK-9

調査区の南東端で検出した。検出部で東西1.1m、南北1.55m、深さ8cm前後を測る。内部堆積土は黒灰色粗砂で、層中から土師器壺・鉢・高杯(90)の破片が少量出土している。

溝(SD)

SD-1

SK-4の北東部から、北東方向に伸びてSD-2に合流する。全長2.4m・幅0.38m・深さ8~15cmを測る。溝内には、SK-4同様黒灰色粘砂1層が堆積しており、層中から土師器壺(91)・壺・甌・高杯の細片が少量出土している。

SD-2

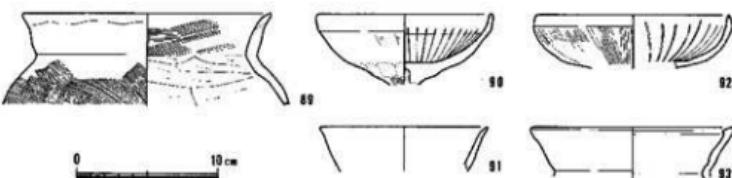
南東から北西方向に弓状に伸びるもので、一部はSD-3によって切られている。検出部長15.0m・幅0.6m・深さ15cm前後を測る。溝底のレベル高は、北西端に比して南東端が20cm程度高いことから、北西方向の流路を持っていたものと推定される。溝内には、上層から茶褐色砂混粘土と青灰色砂質土が堆積しており、層中から土師器高杯(92)の破片が出土している。

SD-3

南東から北西方向に弓状に伸びる。一部はSD-4に切られているが、北部では、SD-2を切る関係にある。検出長16.8m、幅0.3m・深さ8~12cmを測る。溝内堆積土は茶褐色砂混粘土1層で、層中から土師器・須恵器の細片が少量出土している。

SD-4

SD-2・SD-3同様、南東から北西方向に弓状に伸び、途中でSD-3を切り込む。検出長12.8m、幅60~80cm・深さ8~20cmを測る。溝内には、上層より茶褐色砂混粘土・青灰色砂質土・青灰色粘土が堆積しており、内部から土師器壺(93)・甌・高杯等が出土している。



第16図 SK-8(89)・SK-9(90)・SD-1(91)・SD-2(92)・SD-4(93)出土遺物実測図

SD-5

南北方向に伸びるもので、検出長7.3m・幅60~80cm・深さ20cm前後を測る。溝内には上層より、第1層茶褐色砂混粘土・第2層青灰色砂質土・第3層青灰色粘土が堆積しており、そのうち第1層から土師器の細片が少量出土している。

SD-6

南東から北西方向に伸びるもので、検出長3.7m・幅30cm・深さ10cmを測る。溝内堆積土は茶褐色砂混粘土1層で、遺物の出土は認められなかった。

小穴(SP)

SB-1を構成する柱穴以外で、87個の小穴を検出している。これらの小穴の中には、柱根が遺存していたSP-83や柱痕が確認できるものも多く含まれていたが、調査地域が限定されていたため、SB-1以外の掘立柱建物を復元するまでは至らなかった。

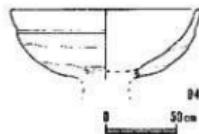
なお、これらのうちで出土遺物が認められたものは、SP-7土師器高杯(94)・SP-8・SP-43・SP-80・SP-81である。ただ、全て細片が主で、しかも出土量も少いことから、遺構の性格も判然としない。

2) 出土遺物

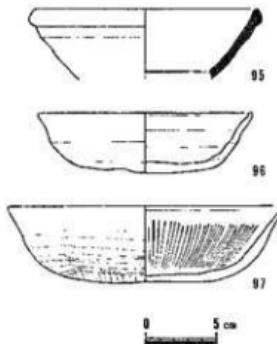
遺物は各遺構および第8層黒灰色砂質土から出土し、総量はコンテナ箱に5箱程度である。遺物の中には奈良時代以降のもの(95~97)もわずかに認められるが、これらは後世の搅乱に伴うものであり、その他の遺物は全て古墳時代中期に比定することができる。

中でも特にSK-3からは、多器種に及ぶ土師器・初期須恵器・滑石製勾玉(第9図~第13図)の他、多量の製塙土器(第21図144~169・173~180)が出土している。これらは古墳時代の土器の器種構成の両期である須恵器出現期に符号するものであり、八尾南遺跡のみならず、隣接する長原遺跡の動向をも小窓する内容を包括した資料といえよう。

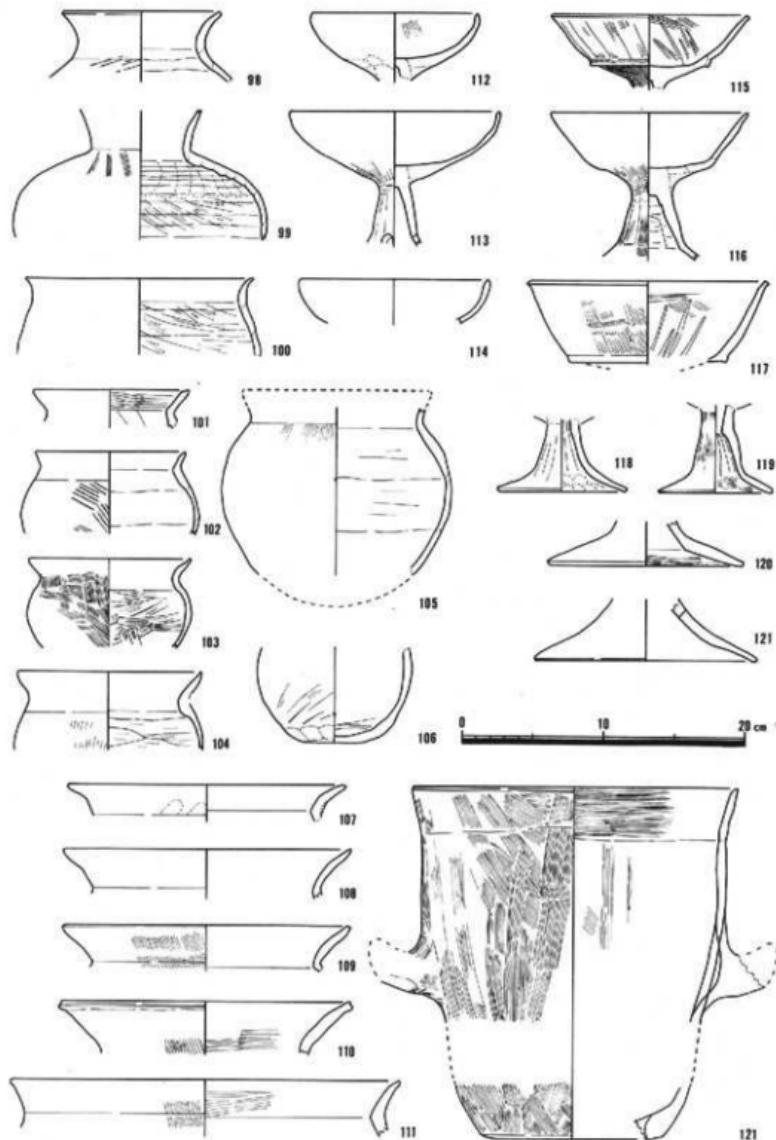
なお本稿では、出土遺物について概略の記載のみにとどめ、遺物個々の特徴は第4章出土遺物観察表に委ねる。但し、比較的良好な資料を伴出したSK-1・SK-2・SK-3の出土遺物については、第5章まとめに所見を記載する。



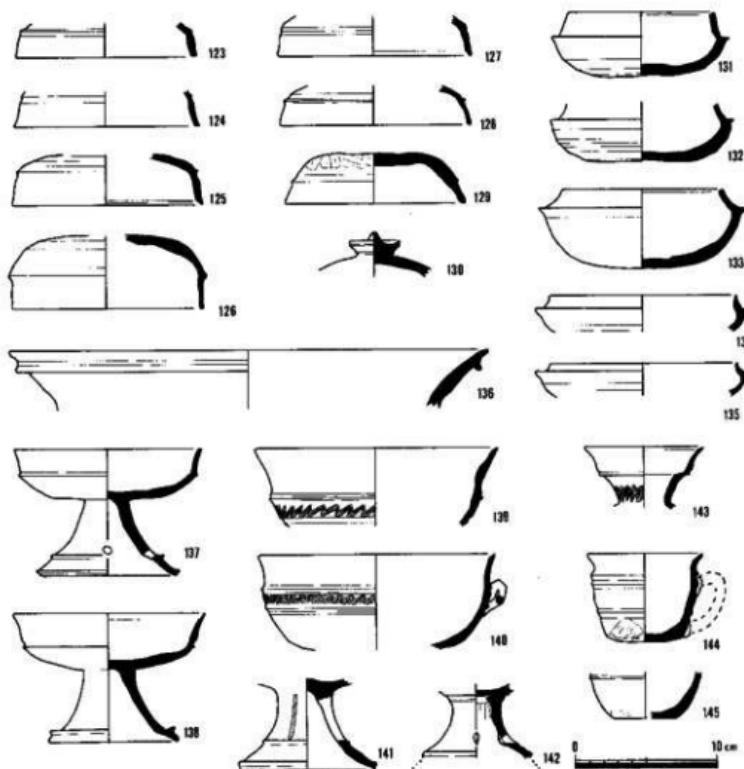
第17図 SP-7 出土遺物実測図



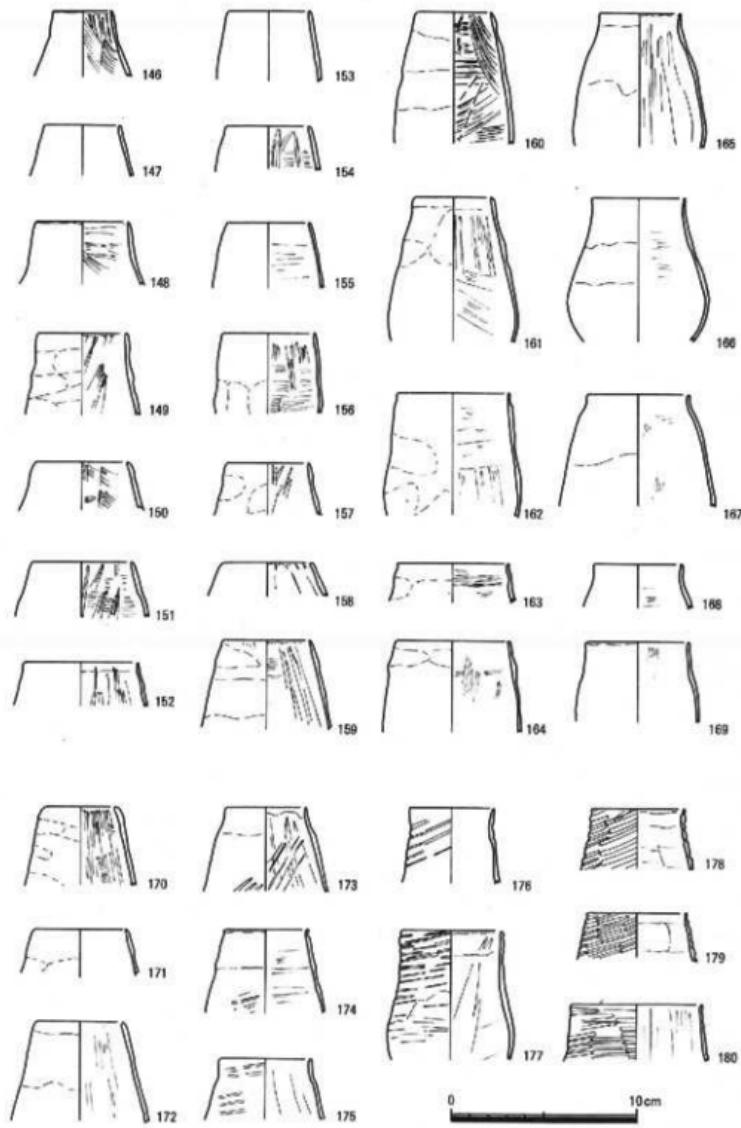
第18図 Aトレンチ包含層出土遺物実測図



第19図 Aトレンチ包含層出土遺物実測図2



第205図 Aトレンチ包含層出土遺物実測図3



第21図 Aトレンチ出土製塙土器実測図(1:3) SK-4(172)・包含層(170,171)・他はSK-3

2 B トレンチ

調査対象地の中央部に設定したトレンチで、 $30\text{m} \times 10\text{m}$ の規模を有する。

調査の結果、平安時代後期の水田遺構・古墳時代中期の集落遺構・古墳時代中期初頭の水田遺構を検出し、上方から第1調査面・第2調査面・第3調査面と付称した。

<第1調査面>

表土下 2.0m ($\text{TP} + 8.70\text{m}$) 付近で、第6層灰色～茶灰色シルト粘土を耕土とする水田遺構（水田a～水田c・畦畔I～III）を検出した。

1) 検出遺構

水田

水田a

畦畔IIの西側全体を水田遺構として捉えたが、東西幅は 19m 以上広がることが推定され、一筆耕地としては、やや広い感がある。検出部で東西 19.0m ・南北 7.4m を測る。床面のレベル高は南側で $\text{TP} + 8.42\text{m}$ ・北側で $\text{TP} + 8.31\text{m}$ を測る。足跡は全域で多数検出されたが、無秩序な遺存状態で、單一歩行の明確な例は認められなかった。

水田b

調査区の東部で検出した。北側に位置する畦畔Iと西側の畦畔IIで区割されている。検出部で東西 7.5m ・南北 6.6m ・面積 49.5m^2 を測る。床面のレベル高は南側で $\text{TP} + 8.36\text{m}$ ・北側で $\text{TP} + 8.28\text{m}$ を測る。足跡状の窪みは、南東部と北西部を除く部分で検出した。これらの窪みには、足形・円形・不定形の3種があるが、水田a同様無秩序で規則性は認められなかった。なお、3種とも内部には水面面を覆う第5層灰色粗砂が堆積していた。

水田c

畦畔Iの北側に広がる。調査区の北端に位置するため、規模・面積等は不明。床面のレベル高は、 $\text{TP} + 8.25\text{m}$ を測る。なお、畦畔Iの西端部が、この水田遺構の水口と推定される。

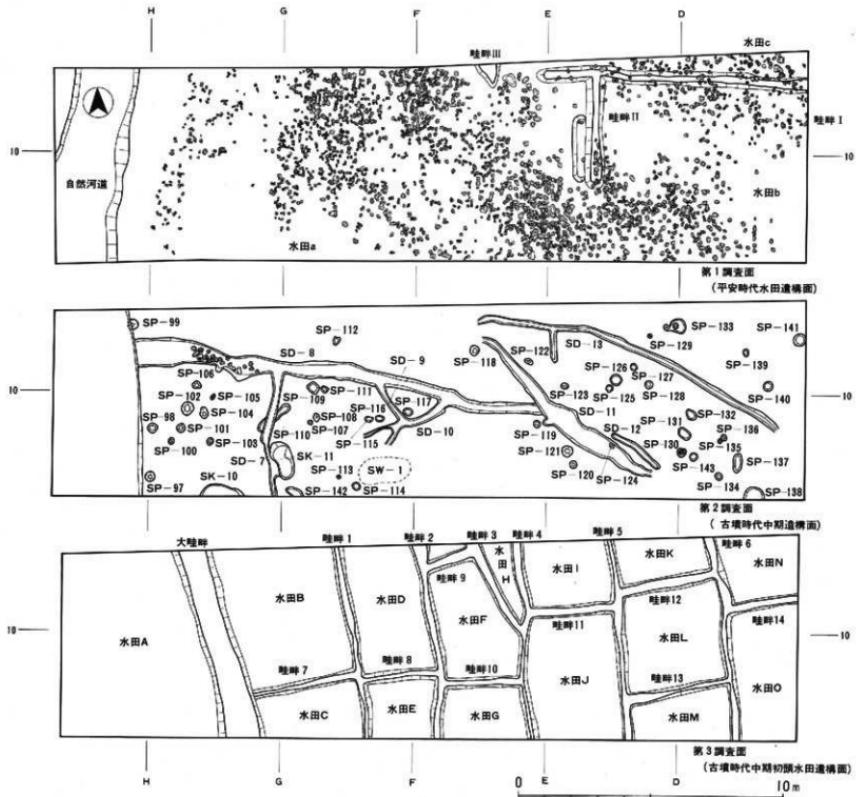
畦畔

畦畔I

調査区の北部で検出した。東西方向に伸びるもので水田bと水田cを区割している。検出長 10.2m ・上面幅 $20\sim 40\text{cm}$ ・基底幅 $40\sim 60\text{cm}$ ・高さ $1\sim 3\text{cm}$ を測る。上面のレベル高は、 $\text{TP} + 8.28\text{m}$ 前後で、東西の比高差は認められない。

畦畔II

南北方向に伸びるもので、水田aと水田bを区割している。全長 4.1m ・上面幅 $20\sim 40\text{cm}$ ・基底幅 $60\sim 75\text{cm}$ ・高さ $4\sim 13\text{cm}$ を測る。なお、畦畔の西側に沿って落込みが認められるが、性格は不明である。



第22図 Bトレンチ平面図(1:150)

畦畔Ⅲ

南北方向に伸びるものと推定されるが、検出長が90cmと短く、詳細は不明である。

<第2調査面>

表上下2.6m (TP +8.10m) 付近に存在する第9層灰色粗砂を構築面としており、土坑2基 (SK-10・SK-11)・溝7条 (SD-7～SD-13)・土器窯1箇所 (SW-1)・柱穴45個 (SP-97～SP-141)を検出した。

1) 検出遺構

土坑 (SK)

SK-10

調査区の南端部で検出したが、南部は調査区外のため全容は不明である。検出長東西1.6m・深さ10cm前後を測る。内部堆積土は黒灰色砂質土で土師器の細片が少量出土している。

SK-11

南北方向に長い格円形を呈する土坑で、西側はSD-7の一部を切る関係にある。長径1.55m・短径0.60m・深さ32cmを測る。内部は、上層から暗灰青色粘質土と暗灰青色砂混粘土の2層が堆積しており、上層から土師器甕および

び鉢 (181・182・184)・甕 (183)、須恵器壺の破片が少量出土している。

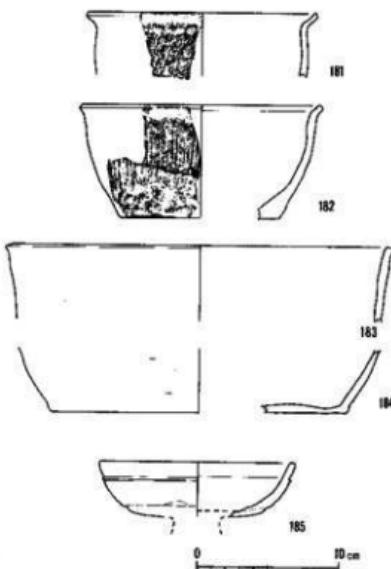
溝 (SD)

SD-7

南北方向に伸びるもので、南部で東肩の一部をSK-11に切られ、北端はSD-8に合流している。検出長4.6m・幅0.18～0.45m・深さ3～6cmを測る。内部には黒灰色砂質土1層が堆積している。

SD-8

東西方向に伸びるもので、東端はSD-11に切られている。検出長15.0m・幅0.4～1.05m・深さ1～11cmを測る。内部堆積土は黒灰色砂質土1層で、土師器高杯 (185)、須恵器等の細片が少量出土している。なお、西側の一部では下層遺構の大畦畔を切っており、溝底に足跡状の痕みが認められた。



第23図 SK-11(181～184)・SD-8(185)出土遺物実測図

SD-9

北西から南東方向に伸びるもので、北西端はSD-8に切られ、南西端はSD-10に合流している。検出長1.5m・幅20~36cm・深さ3cmを測る。内部は黒灰色砂質土1層で充填されており、遺物の出土は認められなかった。

SD-10

南西から北東方向に流路をもつもので、北東端でSD-8に合流している。検出長4.3m・幅10~40cm・深さ5cmを測る。内部は黒灰色砂質土1層で充填されており、遺物の出土は認められなかった。

SD-11

南東から北西方向に流路をもつ土坑状の溝遺構で、途中でSD-8を切る関係にある。断面の形状は台形を呈しており、全長8.3m・幅20~95cm・深さ2~5cm前後を測る。内部には黒灰色砂質土1層が堆積しており、層中より土師器壺・壺・須恵器壺・杯等の細片が少量出土している。

SD-12

SD-11に沿って伸びる構造遺構で、全長2.2m・幅22cm・深さ5cm前後を測る。内部堆積土は黒灰色砂質土1層で、出土遺物は皆無であった。

SD-13

調査区の東部で検出した。南東から北西方向に弓状に伸びるもので、全長12.1m・幅25~30cm・深さ8cmを測る。内部堆積土は黒灰色砂質土1層で、層中より土師器・須恵器の細片が少量出土している。

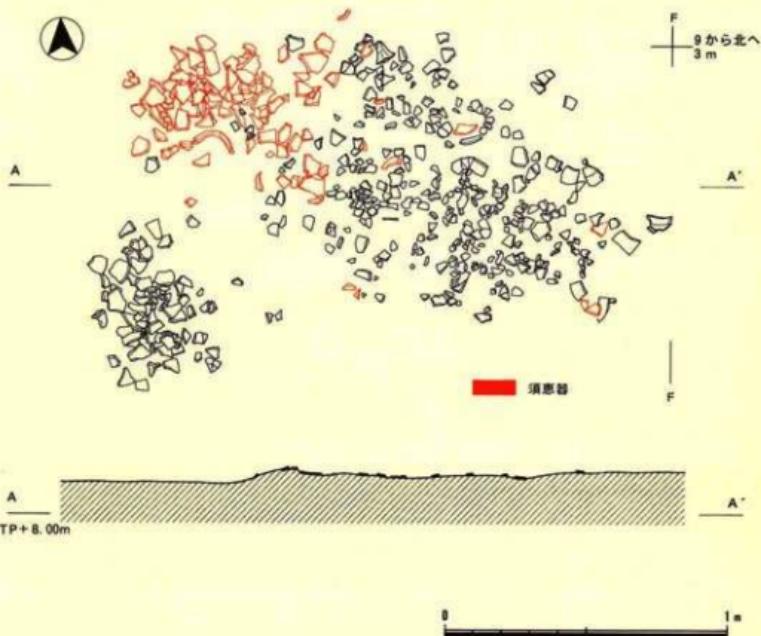
小穴(SP)

調査区全体で、45個の小穴(SP-97~SP-141)を検出した。ただ、当トレンチで検出した古墳時代中期の遺構は、根砂層の上面を構築面としていることから、遺構の遺存状態も良好とは言い難い。これらの小穴は、上面の形状が円形または橢円形を呈するものが大半で、径15~40cm・深さ5~25cmを測る。これらは、調査区西部の一部で、まとまりの認められるものもあったが、それ以外は全て不規則に散在しており、遺構の性格も判然としない。

これらのうち、SP-102・SP-103の2箇所からは、土師器壺・壺・鉢・須恵器壺・壺等の細片がごくわずかに出土しているが、全て磨耗を受けている。このうちで図化できたものは、SP-102出土の小型鉢(186)のみである。この鉢は二次焼成を受けたためか表皮剥離が著しいが、外面に縦位のタタキが施されている。



第24図 SP-102
出土遺物実測図



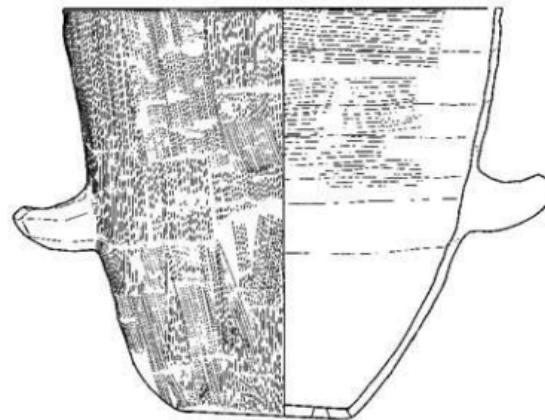
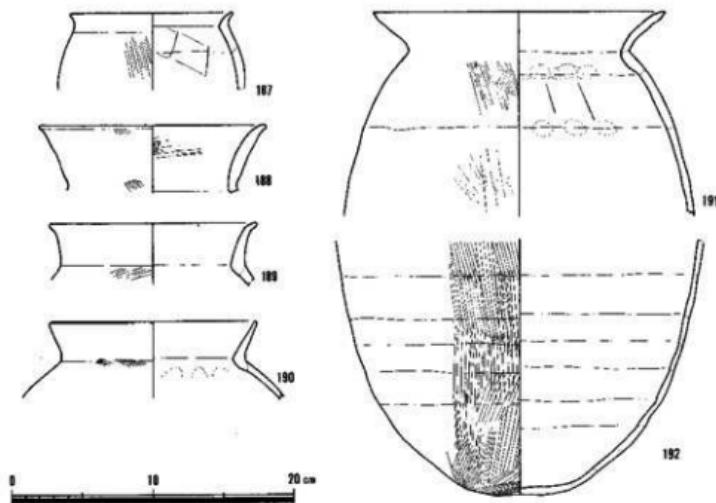
第25図 SW-1 平断面図(1:20)

土器窯 (SW)

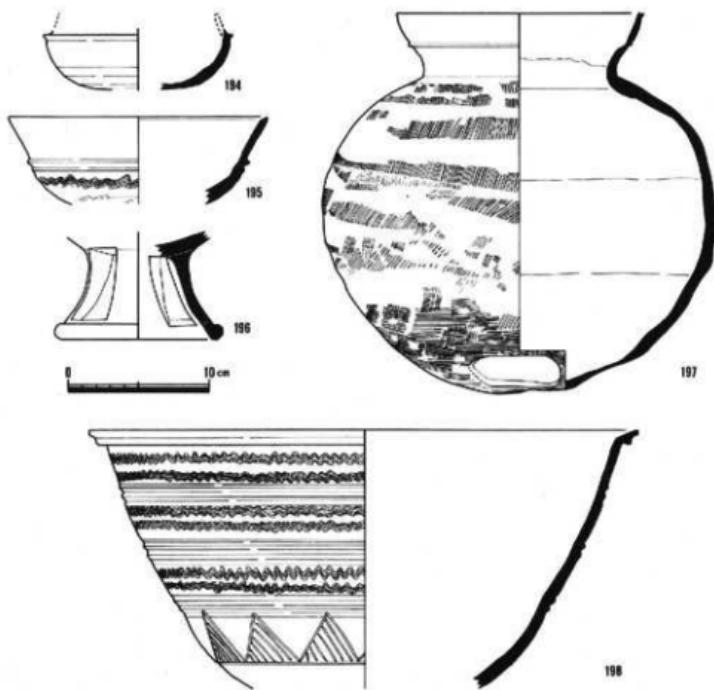
SW-1

9F地区の第9層灰色粗砂の上面 (TP + 8.15m) で検出した。東西2.0m・南北1.3mに渡って土器片が広がっており、明瞭な掘形は存在しない。土器片は大半が細片で、個体ごとに一定の広がりを持って散布することが看取されることから、全て当地点において破碎されたことが窺われる。土器窯を構成する土器群は、土師器壺5個(189~192)・壺1個(188)・鉢1個(187)・瓶2個(193)・高杯1個・須恵器壺1個(197)・杯身1個(194)・高杯2個(195・196)・器台1個(198)で、1個体分ないしはそれに近い状態で出土している。これらの器種構成でも明らかなように、器種はバラエティに富んだ内容であり、量的にも壺以外は大差がない。

なお、出土状況からこれらの遺物は、全て何らかの意図を持って破碎され、廃棄された状態であることが推定できる。さらに遺物の中には、須恵器壺(197)のように底部に焼成後の穿孔を有するものが存在することや、当遺構周辺(特に東側一帯)に遺構が希薄なことからも、祭祀的な要素の強い遺構であることが推察できる。



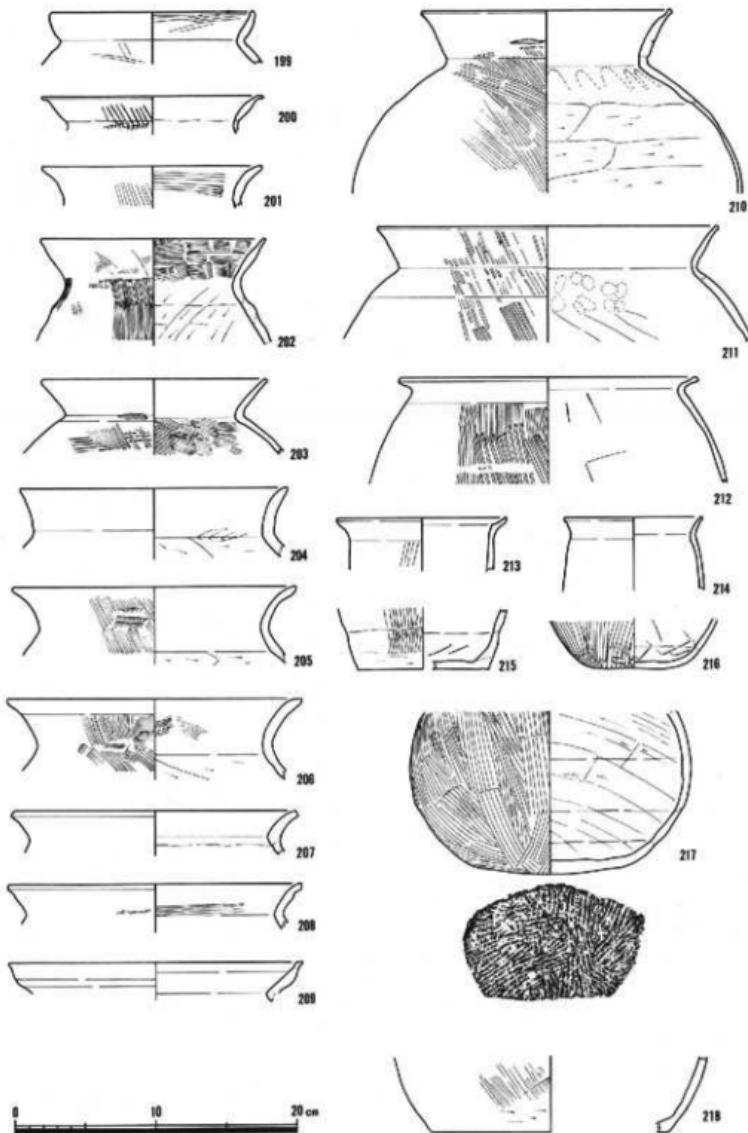
第26图 SW—1出土遗物实测图1



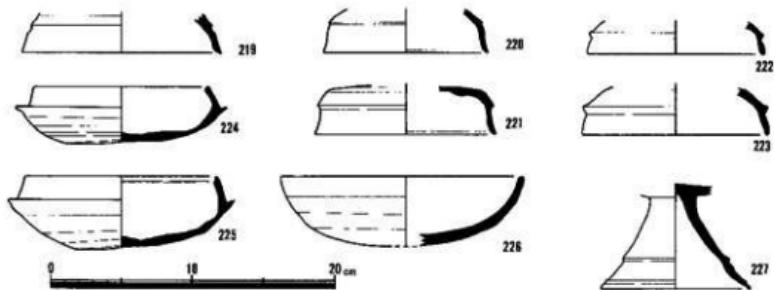
第27図 SW-1出土遺物実測図2

2) 出土遺物

遺物は各遺構および第8層黒灰色砂質土層から出土し、総量はコンテナ箱3箱程度である。出土した遺物は、土師器甕(189~192・199~211)・鉢(181~184・186・187・212~218)・壺(188)・瓶(193)・高杯(185)、須恵器壺(197)・杯蓋(219~223)・杯身(194・224~226)・高杯(195・196・227)・器台(198)等で、概ね古墳時代中期に比定することができる。なかでも、外面に縦位のタキを施す平底鉢(182・215)や須恵器の高杯を模倣したと考えられる土師器高杯(185)、さらに長脚傾向の壺の存在は、須恵器の出現期に符号する器種構成の変化を示唆する資料である。一方、SW-1の一括遺物も量的には少いものの、一時期の器種構成を一通り備えた資料として捉えることができる。さらにこれらの資料と、今日までに蓄積された所見を比較することで、八尾南遺跡・長原遺跡内での古墳時代中期における開発の進捗状況を地点ごとに検証することも可能になろう。なお、本稿ではAトレーニと同様、遺物については遺構説明内の記載のみにとどめ、遺物個々の特徴は第4章の出土遺物観察表に委ねた。



第28図 Bトレンチ包含層出土遺物実測図1



第29図 Bトレンチ包含層出土遺物実測図2

<第3調査面>

表土下2.7m (TP +8.00m)付近に存在する第10層灰黒色粘土層上面で、水田15筆（水田A～水田O）・畦畔14本（畦畔1～畦畔14）と大畦畔1本を検出した。

水田遺構は、南北方向に伸びる大畦畔を基準として一筆が区割されており、水田Fを除けば上面長方形を呈するものが大半を占める。そのうち、田植を求め得たものは水田F (9.5 m²)・水田L (13.3 m²)で全体に小規模なものが多いが、なかには水田Bの様に20m以上以上のものも認められた。床面は、わずかではあるが北側へ傾斜しており、微地形に符号した土地利用が窺われる。畦畔は、水田遺構の耕土である第10層灰黒色粘土を盛り上げて構築されている。ただ、大畦畔を除いては畦畔高が0.1～4.6cmと低く、一筆耕地内での一時的な水量確保も困難なものと推定できるが、土圧による地盤沈下等の外的要因も充分に考えられ、水田機能時の形状をとどめていない可能性も考えられる。従って、水口施設も不明瞭であるが、水田床面の傾斜が示すように南側から北側への灌漑水利の経路が推定できる。

なお、水田遺構上面には第9層淡灰色シルト～粗砂が堆積しており、洪水を起因とする土砂の流入によりその機能が停止したものと推定される。

1) 検出遺構

水田

水田A

大畦畔の西側に位置し、東西5.4m・南北7.0m以上を測る。床面レベル高の平均はTP + 7.96mで、南側から北側に向ってわずかに傾斜している。

水田B

水田Aの東に位置し、東側を畦畔1・西側を大畦畔・南側を畦畔7で区割されている。北側が調査区外へ至るもの、東西3.9m・南北5.0m以上の長方形を呈する一筆耕地を復元することができる。床面のレベル高は南側でTP + 8.01m・北側でTP 7.96mを測る。

水田C

水田Bの南に位置し、東側を畦畔1・西側を大畦畔・北側を畦畔7で区割されている。検出部で東西3.9m・南北2.0mを測る。床面のレベル高はTP+8.01mを測る。

水田D

水田Bの東側に位置し、東側を畦畔7・西側を畦畔1・南側を畦畔8で区割されている。水田B同様、長方形を呈する一耕地と推定され、検出部で東西2.8m・南北4.6mを測る。床面はほぼ水平で、レベル高はTP+7.98mを測る。

水田E

水田Dの南側に位置し、東側を畦畔7・西側を畦畔1・北側を畦畔8で区割されている。検出部で東西2.8m・南北2.2mを測る。床面は水平で、レベル高はTP+8.02mを測る。

水田F

水田Dの東側に位置する。上面五角形を呈しており、畦畔3・畦畔4・畦畔7・畦畔9・畦畔10で区割されている。東西2.8m・南北4.5mで、面積は9.5m²を測る。床面のレベル高はTP+8.00mで、ほぼ水平である。

水田G

水田Fの南側に位置する。東側は畦畔4・西側は畦畔7・北側は畦畔10で区割されており、検出部で東西2.8m・南北1.9mを測る。床面のレベル高はTP+8.04mを測る。

水田H

上面三角形を呈する水田造構で畦畔3と畦畔4で区割されている。検出部で東西1.0m・南北2.9mを測る程度で、詳細は不明である。

水田I

水田Hの東側に位置し、東側を畦畔5・西側を畦畔4・南側を畦畔11で区割されている。検出部で東西3.0m・南北2.3mを測る。床面のレベル高はTP+8.00mを測る。

水田J

南側は調査区外のため判然としないが、上面形が長方形を呈するものと推定される。東側は畦畔5・西側は畦畔4・北側は畦畔11に区割られており、検出部で東西3.0m・南北4.5mを測る。なお、検出部で面積13.5m²を測ることから、今回検出した水田造構のなかでも比較的大きな部類に属するものと考えられる。床面のレベル高は、南側でTP+8.03m・北側でTP+8.01mで、わずかに北側へ傾斜している。

水田K

水田Iの東側に位置し、東側を畦畔6・西側を畦畔5・南側を畦畔2に区割されている。検出部で東西3.4m・南北1.4mを測る。床面のレベル高はTP+8.01mを測る。

水田 L

水田 K の南側に位置する。上面は正方形に近く、東西3.6m・南北3.7mの規模で、一筆面積は13.3m²を測る。床面のレベル高は南側でTP + 8.03m・北側でTP + 7.99mを測る。

水田 M

水田 L の南側に位置する。畦畔 5・畦畔 6・畦畔 13 で区割されており、検出部で東西3.6m・南北1.7mを測る。床面のレベル高はTP + 8.03mを測る。

水田 N

調査区の北東隅で検出した。畦畔 6・畦畔 4 で水田造構の南西部が区割されている。検出部で東西2.5m・南北2.4mで、床面のレベル高はTP + 7.99mを測る。

水田 O

水田 N の南側に位置する。畦畔 4・畦畔 6 で水田造構の北西部が区割されている。検出部で東西2.5m・南北2.4mを測る。床面のレベル高は南側でTP + 8.02m・北側でTP + 8.01mとほぼ水平である。

畦畔

大畦畔

調査区の西部で検出したもので、南東から北西方向に伸びる。他の畦畔と同様水田耕作土である灰黒色粘土を盛り上げて構築しており、上面幅0.9~1.3m・基底幅1.3~1.8m・畦畔高2.7~10.8cmを測る。なお、畦畔 1~畦畔 6 がこの大畦畔に平行して伸びることが確認でき、水田構築時の区割基準としての役割も果したものと推定される。

畦畔 1

大畦畔にはほぼ平行に伸びる畦畔で、検出長は6.7mを測る。上面幅10~25cm・基底幅30~40cm・畦畔高0.3~3.9cmを測り、断面は半円形を呈する。畦畔上面のレベル高は、南側でTP + 8.03m・北側でTP + 7.99mを測り、北側へわずかに下っている。

畦畔 2

南北方向に弓状を呈して伸びるもので、上面幅20~50cm・基底幅38~60cm・畦畔高0.9~3.8cmを測り、断面形状は半円状を呈する。畦畔 1 と同様、北側へ向って下っており、その比高差は7cmを測る。

畦畔 3

畦畔 4 から枝分れして北西方向に伸びるもので、検出長3.4mを測る。上面幅20~34cm・基底幅40~50cm・畦畔高1.2~2.7cmで、断面形状は半円形を呈する。

畦畔 4

南北方向にわずかに蛇行して伸びるもので、検出長7.2mを測る。上面幅8~32cm・基底幅

34~44cm・畦畔高0.1~4.6cmを測る。

畦畔5

南北方向に伸びるもので、検出長は7.4mを測る。上面幅12~34cm・基底幅32~44cm・畦畔高1.2~4.2cmを測る。畦畔上面の南北の比高差は2cm程度を測り、北側へ向ってわずかに下っている。

畦畔6

南北方向に伸びるもので、検出長7.6mを測る。上面幅10~34cm・基底幅32~48cm・畦畔高0.2~3.1cmを測る。

畦畔7

東西方向に伸びるもので、大畦畔と畦畔1にT字形に接続する。全長3.8m・上面幅10~24cm・基底幅34~44cm・畦畔高0.3~1.3cmを測る。

畦畔8

東西方向に伸びるもので、畦畔1と畦畔2にT字形に接続する。全長2.7m・上面幅12~20cm・基底幅42~44cm・畦畔高0.4~2.1cmを測る。

畦畔9

東西方向に伸びるもので、畦畔2と畦畔3に接続する。全長1.8m・上面幅23~36cm・基底幅46~52cm・畦畔高0.6~1.3cmを測る。

畦畔10

東西方向に伸びるもので、畦畔2と畦畔4にT字形に接続する。全長2.7m・上面幅16~23cm・基底幅38~40cm・畦畔高0.5~2.4cmを測る。

畦畔11

東西方向に伸びるもので、畦畔4と畦畔5にT字形に接続する。全長3.1m・上面幅26~31cm・基底幅44~46cm・畦畔高0.1~2.8cmを測る。

畦畔12

東西方向に伸びるもので、畦畔5と畦畔6にT字形に接続する。全長3.5m・上面幅28~33cm・基底幅40~52cm・畦畔高0.2~3.8cmを測る。

畦畔13

東西方向に伸びるもので、畦畔5と畦畔6にT字形に接続する。全長3.7m・上面幅10~38cm・基底幅30~46cm・畦畔高0.3~1.4cmを測る。

畦畔14

東西方向に伸びるもので、西側は畦畔6にT字形に接続する。検出長3.6m・上面幅22~28cm・基底幅30~38cm・畦畔高0.2~1.4cmを測る。

第1表 水田法盤表

	(m) 東 西	(m) 南 北	(m) 面 積	(m) レベル高 (TP)	(m) 平均レベル(TP)
A	5.4以上	7 以上	37 以上	南 7.98 北 7.94	7.96
B	3.9	5 以上	20 以上	南 8.01 北 7.96	7.98
C	3.9	2 以上	8 以上	南 - 北 8.01	8.01
D	2.8	4.6以上	13 以上	南 7.98 北 7.98	7.98
E	2.8	2.2以上	6.1以上	南 - 北 8.01	8.02
F	2.8	4.5	9.5	南 8.01 北 8.00	8.00
G	2.8	1.9以上	5.3以上	南 - 北 8.03	8.03
H	1	2.9以上	2.9以上	南 8.00 北 8.03	8.02
I	3	2.3以上	6.9以上	南 8.00 北 -	8.00
J	3	4.5以上	13.5以上	南 8.03 北 8.01	8.02
K	3.4	1.4以上	4.8以上	南 8.00 北 -	8.01
L	3.6	3.7	13.3	南 8.03 北 7.99	8.02
M	3.6	1.7以上	6.1以上	南 - 北 8.03	8.03
N	2.5以上	2.4以上	6 以上	南 8.00 北 7.99	7.99
O	2.5以上	4.9以上	12.2以上	南 8.02 北 8.01	8.01

第2表 磁磚法盤表

	方 向	(cm) 上 面 幅	(cm) 底 幅	(cm) 磁 磚 高	(m) 全長・棟長	(m) レベル高 (TP)
1	南 北	10~25	30~40	0.3~3.9	6.7	南 8.03 → 北 7.99
2	南 北	20~50	38~60	0.9~3.8	7.0	南 8.06 → 北 7.99
3	南 東 北 西	20~34	40~50	1.5~2.7	3.4	南北 8.01 → 西 8.01
4	南 北	8~32	34~44	0.1~4.6	7.2	南 8.06 → 北 8.04
5	南 北	12~34	32~44	1.2~4.2	7.4	南 8.04 → 北 8.02
6	南 北	10~34	32~48	0.2~3.1	7.6	南 8.06 → 北 7.97
7	東 西	10~24	34~44	0.3~1.3	3.8	西 8.02 → 東 8.00
8	東 西	12~20	42~44	0.4~2.1	2.7	西 8.01 ← 東 8.04
9	東 西	23~36	46~52	0.5~1.3	1.8	西 8.02 ← 東 8.04
10	東 西	16~23	38~40	0.5~2.4	2.7	西 8.04 ← 東 8.06
11	東 西	26~31	44~46	0.1~2.8	3.1	西 8.02 → 東 8.01
12	東 西	28~33	40~52	0.2~3.8	3.5	西 8.03 ↔ 東 8.03
13	東 西	10~38	30~46	0.3~1.4	3.7	西 8.02 ← 東 8.05
14	東 西	22~28	30~38	0.2~1.4	2.6	西 8.04 → 東 8.01

3 C トレンチ

調査対象地の北部に設定したトレンチで、 $20\text{m} \times 10\text{m}$ の規模を有する。

調査の結果、平安時代後期の水田遺構・古墳時代中期初頭の水田遺構の2時期に渡る遺構面を検出し、前者を第1調査面・後者を第2調査面と付称した。

<第1調査面>

表土下 2.0m ($\text{TP} + 8.50\text{m}$) 附近に存在する第6層茶灰色粘土を構築面としており、水田一筆（水田d）・畦畔1本（畦畔IV）と溝遺構1条（SD-15）を検出した。

1) 検出遺構

水田

水田d

畦畔IVの東側に広がるもので、茶灰色粘土を構築面としている。但し北側は橋脚の構築時に搅乱を受けており、一筆単位は判然としない。検出部で東西 6.5m ・南北 5.0m 、床面レベル高は $\text{TP} + 8.58\text{m}$ を測る。足跡は全面に遺存しており、内部には水田上面を覆う第5層灰青色粗砂が堆積している。

畦畔

畦畔IV

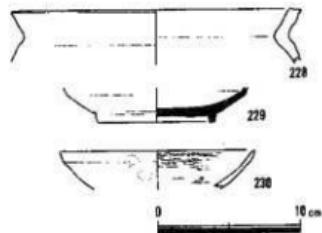
水田dの西側を南北に伸びるもので、北側の搅乱部を除いて検出長約 5.0m を測る。断面の形状は台形を呈し、上面幅 $20\sim 50\text{cm}$ ・基底幅 $50\sim 80\text{cm}$ ・畦畔高 5cm を測る。なお、この畦畔の西斜面は、西側に平行して伸びる溝SD-15の東肩をも構成しており、2つの機能を備えている。

溝 (SD)

SD-15

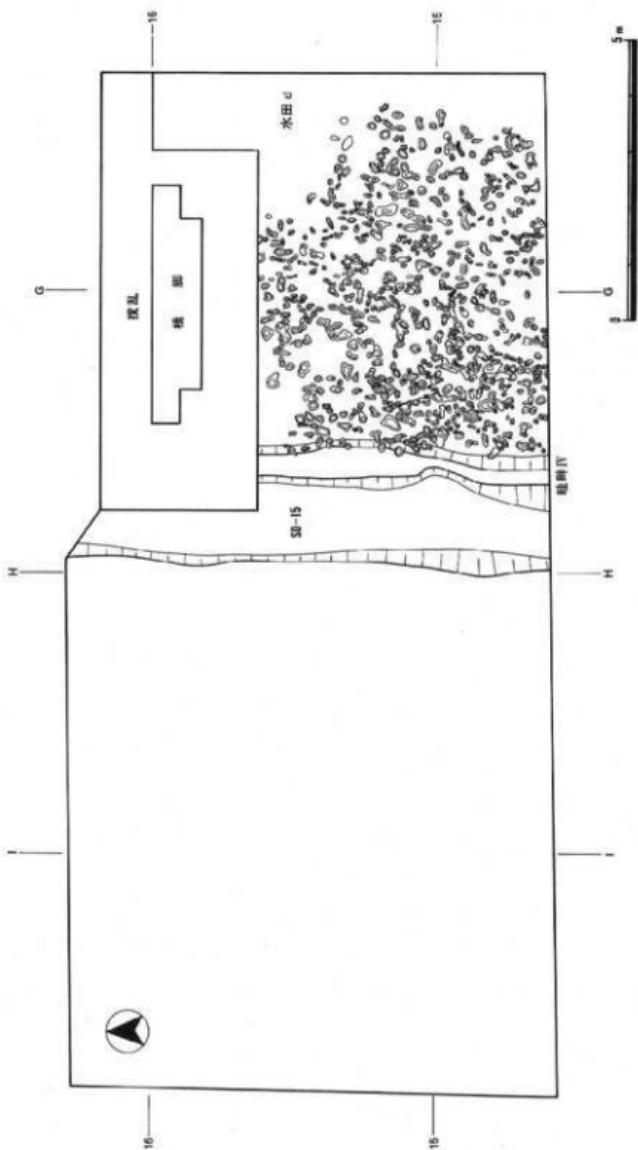
畦畔IVの西側に平行して南北方向に伸びる。検出長 8.5m ・幅 $1.5\sim 1.8\text{m}$ ・深さ $8\sim 17\text{cm}$ を測り、南から北への流路を持つ。内部には青灰色砂が堆積し、層中より瓦器甕(220)・土師器小皿等の破片が出土している。一方、SD-15より西では水田を確認していないことから、この溝が水田と未耕地を区画していたものと考えられる。

なお、SD-15の内部堆積土は水田・未耕地を覆う粗砂と同一のもので、水田が河川の氾濫によって埋没したこと示している。また、土師器甕(228)・縦軸陶器甕(229)は未耕地上面の青灰色粗砂中の出土であり、SD-15出土の瓦器甕(230)とともに、水田埋没の時期を示唆する資料といえよう。



第30図 C トレンチ出土遺物実測図

第31図 Cトレーン子原1号古面平図(平安時代水田遺構 1 : 100)



<第2調査面>

表土下2.7m (TP + 8.00m) 付近に存在する第10層灰黒色粘土を構築面とするもので、水田4筆（水田P～水田S）・畦畔2本（畦畔15・畦畔16）・大畦畔1本・溝遺構1条（SD-14）を検出した。この面は、Bトレンチの第3調査面に対応する。

1) 検出遺構

水田

水田P

畦畔15の西部に位置する。TP + 8.00m付近に存在する灰黒色粘土上面を水田面としている。検出長東西4.9m、南北7.4m、床面レベル高は南側でTP + 7.95m・北側でTP + 7.92mを測る。

水田Q

畦畔15と大畦畔で区割されている。検出長東西7.7m・南北8.1m・床面レベル高は南側でTP + 8.00m・北側でTP + 7.94mを測る。

水田R

畦畔16と大畦畔で区割られている。検出長東西3.2m・南北3.0mで、床面レベル高はTP + 7.96mを測る。

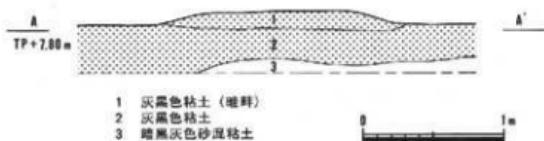
水田S

水田Rと同様、畦畔16と大畦畔で区割されている。検出長東西3.0m・南北3.4mで、床面レベル高はTP + 7.97mを測る。

畦畔

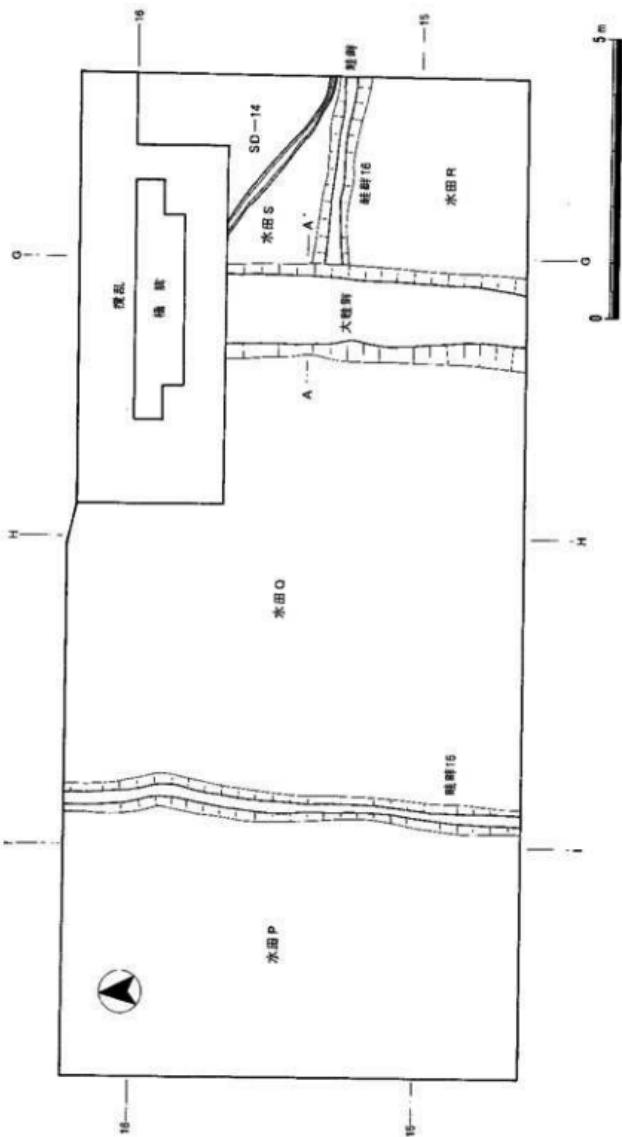
大畦畔

調査区の東部で検出した。南北方向に伸びるもので、Bトレンチで確認した大畦畔の北に続くものと考えられる。上面幅1.1～1.2m・基底幅1.6m・畦畔高7cm前後を測り、断面の形状は台形を呈する。他の畦畔と同様、灰黒色粘土を盛り上げて構築しているが、下部には多量の砂粒が混入されており、強度を高めていることが窺われる。さらに、上面が平坦で足跡の痕跡が認められないことから、畦畔と生活道路の2面の機能を備えていたものと推定される。



第32図 大畦畔断面図(1:40)

第33回 Cトレーンチ第2調査面平面図(古墳時代中期の田水田遺跡面) : 100)



畦畔15

調査区西部で検出した。大畦畔にはば平行して伸びるもので、北側で屈曲する部分を認める。

検出長8.0m・上面幅15cm・基底幅40~60cm・畔高2cm前後を測る。

畦畔16

大畦畔にT字形に接続する畦畔で、上面幅15~30cm・基底幅40~60cm・畔高2cm前後を測る。畦畔15同様構築に際しては、水田耕作土である灰黒色粘土を使用している。

溝（SD）

SD-14

調査区の北東部で検出した溝遺構で、検出長3.3m・幅10~20cm・深さ5cmを測る。内部堆積土は黒灰色粘砂で、工具器の細片が少量出土した。構築面は水田遺構上面を被う灰青色粗砂の上面で、Bトレンチで確認した第2調査面の遺構面と符号している。

第4章 出土遺物観察表

SK-1

* 1cmあたりのハケ目の条線の数 * * 脚部最大径

遺物番号 測定番号	器種	口径 法量 高さ	形態・調査等の特徴	色 青 赤 白 黒	胎 土	焼成 度	備考
1	土器 甕	11.2 —	上内方へ直線的に伸びる体部から丸く彎曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。底部は下方へわずかに肥厚し、外傾する腹を持つ。 内外面とも体部などで、口縁部ヨコナデ。	淡黄色～ 淡赤色	良 石英・長石等の微粒を含む	良好	黒斑あり
2	土器 甕	13.0	口部からよく字形に屈曲し、口縁部に至る。底部水平な底を持つ。 外側表皮剥離のため不明、内面底部に指頭压痕・ヘラジ痕。	外系灰黑色 内面赤褐色 中核淡褐色	やや粗 2mm程度の 石英・長石等多く含む	良	
3	土器 甕	15.4 —	半球形の体部から丸く彎曲し、上外方へ内側して伸びる口縁部に至る。口縁部の上部は如く外反し、端部は丸く終る。 外側体部横ハケ(4本)、内面体部ヘラケズリ痕、口縁部ヨコナデ。	外系乳黃色 内面淡赤褐色 中核淡褐色	やや粗 2mm程度の 石英・長石等多く含む	良	黒斑あり
4	土器 甕	16.8 —	半球形の体部からくち字形に屈曲し、斜上方へ外反きみに伸びる口縁部に至る。端部はわずかに底内を増し、外傾する腹を持つ。 外側体部横方向のハケ(4本)、内面体部ヘラケズリ痕(右下→左上)、口縁部ヨコナデ。	黃赤色	精良 微砂粒	良	焼付着
5	土器 小型甕	11.8 11.6 底径 13.9	扁平な倒卵形の体部から丸いくち字形に屈曲し、上外方に伸びる口縁部に至る。端部はつよい上上がりに終る。 体部中央の粘土接合部を指おさえでヒザ後外側体部斜ハケ(10本)、内面体部ヘラケズリ下半(F・上)・上半(右下・左上)、口縁部ヨコナデ。	黃赤色	良 1mm以下の チャート・ 石英・長石等多く含む	良好	黒斑あり 焼付着
—	—	—	—	—	—	—	—
6	土器 甕	— 底径 5.0	ほぼ球形を呈する体部に、面積の狭い平底を有する。 外側壁ハケ(4本)、内面ヘラナデ。	黃赤色	良 チャート・ 石英・長石等の微粒	良好 やや硬質	焼付着
—	—	—	—	—	—	—	—
7	土器 高杯	11.8 9.9 底径 7.6	深い半球形の杯部。口縁部は直角から丸く屈曲し、端部丸く終る。脚部部は柱状部から丸く屈曲し、斜外方に開く。底部外傾する腹を持つ。 外側表面ハケ、柱状部にヘラナデの痕跡、内面柱状部そり目、底部に指頭止痕。	淡褐色～ 明褐色	精良	良好	
—	—	—	—	—	—	—	—

商品名	器種	(cm) 口径 注量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
8 土師器 高杯		12.9 10.3 9.4 幅径	丸みのある円錐状の杯底部から丸い模を作った後、内溝して伸びる口縁部。端部丸く終る。脚部部は柱状部から腰く膨らむ、外下方へ大きく開く。底部丸く終る。 口縁部・杯底部・脚部の接合部近着後、全体をヨコナゲ、内面柱状部にはしおり目ぼる。	明褐色～ 乳黄色	精良 赤色酸化粒 わずかに含む	良好	
—							
9 土師器 高杯		14.1 —	8 の杯底に、外反する口縁部がさらに行く形態。端部は器肉を減じて尖りぎみになる。口縁部付近のヨコナゲの他不明。	淡褐色～ 乳黄色	良 チャート・ 石英等の微 粒多く含む	良	表皮剥離
—							
10 上筋器 高杯		16.6 —	円錐状の杯底部から模を作って直立し、上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は上外方へ屈折した後丸く終る。 口縁部付近のヨコナゲの他不明。	淡褐色	良好 2 mm程度 チャートわ ずかに含む	良	墨紙あり 表皮剥離
—							
11 土師器 高杯		— 14.5 幅径	円錐状の杯底部以下直存。柱状部は下外方へ下り、丸く屈曲した後斜下方に伸びて底部に至る。底部上方に把耳し、手を持つ。屈曲部上位に3孔を有する。 杯底部ハケ（1本）、脚部ヨコナゲ。柱状部は外側へラナダ。内面しおりの後ヘラケズリ（右→左）。	淡褐色	やや粗 2 mm以下の チャート・ 赤色酸化粒 石英等多く 含む	良好	
—							
12 須恵器 杯身		11.2 4.4 受脚径13.6	平盤で広い底部から斜上方へ直線的に伸び、断面一角形の短い突起部に至る。立ち上がりは内傾した後直立し、丸く終る。 受脚底下まで回転ヘラケズリの後受部下約2.5 cm回転ナダ、内面底部静止ナダ。体側出転ナダ。	淡灰色～ 灰褐色	精良	良好 堅硬	ロクロ回転 左まわり
—							
13 須恵器 無蓋高杯		12.8 9.0 9.0 幅径	深い半球形の杯部で、高い凸縁を残させて口縁部に至る。端部は内側に短い模を作って外反し、丸く終る。脚部は外下方へ外反して伸び、下方に断面三角形の凸縁が残る。底部は垂直な凹面となる。 外面杯底部回転ヘラケズリの後回転ナダ、内面柱状部静止ナダ・他は回転ナダ。	灰色	精良 黒色粒含む	良好 堅硬	外面部 内面杯部に 灰かぶり
—							
14 須恵器 無蓋高杯	(長) (短)	17.0 14.6 11.2 幅径	半球形の杯底部に高い凸縁を作り、外傾する口縁部に至る。端部は13 cmなる。脚部は斜下方に外反して伸び、中位に高い模が残る。 脚部は下につまんで終る。 調整13と同じ。	青灰色	精良	良	ロクロ回転 左まわり 焼きぶくれ あり
—							
15 須恵器 無蓋高杯		14.5 13.0 12.3 幅径	半球形の杯底部に高い凸縁を残らせ、直立する口縁部に至る。端部は内に凹縫を持ち尖る。脚部は下外方へ外反して伸び、端部上方へ肥厚する。把手は粘土通を破壊的に貼付する。脚部4方に台形の透し。 調整13と同じ。	灰色	精良	良好	ロクロ回転 左まわり 二次火熱を うける。
—							

SK-2

* * * 1 cmあたりのタタキの条線数

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 口径 基盤	形態・調整等の特徴	色調	計上	焼成	備考
16	土師器 高杯	13.6 —	丸みのある平坦な底部から斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。底面近くでは内に浅い凹を作り、器内を被じた後尖って終る。柱状部は斜下方に伸びる。 杯部と柱状部の接合部指おさえ、外面柱状部ヘラナデ、内面柱状部・杯底部ナデ。他はヨコナデ。	淡褐色	やや粗 2 mm以下の 石英・長石 チャート等 含む	良好	
—							
17	上部器 高杯	— 幅径 8.0	杯部との接合部以下済存。斜下方へ外反がみに伸び、底部に至る。端部は先細となり、丸く終る。 外面ヘラナデ・内面しづらの後端部付近をヨコナデ。	淡褐色	良	良好	
—							
18	上部器 小型甕	9.8 10.4 最大径11.6	球形の体部から「く」字形に屈曲し、上外方へ外反がみに伸びる口縁部に至る。端部尖りきみに終る。 体部ナデ・口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	粗 5 mm以下の 石英等含む	良好	
—							
19	土師器 鉢	— 底径 6.0	面積の狭い平底から丸く膨出した後立ち上がり、体部に至る。 外向縦ハケ(4本)、内面ヨビナデ。	黄茶色	やや粗 2 mm以下の チャート含む	良好	二次火熱をうける
—							
20	頸壺器 壺	17.3 21.3 最大径20.2	扁平な倒卵形の体部、口縁部は直立した後凸縁を造りして外反する。端部は外下方に凸縁を削らせて後内凹がみに終る。体部中位にヘラ描き花模様あり。 外面体部下位左右上タタキ(3, 5本)、中位右上タタキ(5本)、上位縦タタキ(5本)・体部中位・口縁部回転ナデ・内面体部下半指おさえ。上半にヘラの圧痕、口縁部回転ナデ。	青灰色 中性灰褐色	やや粗 5 mm以下の 石英多い	良好	
—							

SK-3

物語番号 測定番号	種類	(cm) 口径 寸法	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
21	土師器 直口壺	12.5 —	体部から丸く屈曲し、上外方へ直線的に伸びる口縁部。端部は薄くなり、尖って終る。 ヨコナデ。外面に横ハケ線。	明褐色	良好 赤色酸化粒、 長石・石英等の微粒を含む	良	
22	土加盃 直口壺	16.0 —	上外方へ直線的に伸びる口縁部。上位で極くわずか外反ぎみとなり、端部丸く終る。 調整不明。	乳褐色	稍 1mm程度の チャート・ 石英、1mm 以下の長石等を含めて 多く含む	良	表皮剥離
23	土師器 甕	17.0 —	体部から「く」字形近くに屈曲した瘤立する口縁部。端部は内外に肥厚して内傾する面を持つ。 外面体部横ハケ(4本)、口縁部ヨコナデ。 内面体部押さえ後ナダ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	良 長石・石英の細粒を含めて多く含む	良	表皮わざか に剥離する
—	—	—	—	—	—	—	—
24	土師器 甕	19.8 —	体部から「く」字形に屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部内に肥厚し、内傾する面となる。 外面体部左上ハケ(5本)、肩部までヨコナデ。 内面体部ヘラケズリ(左→右・左下→右上)、後口縁部ヨコナデ。	外面灰褐色 内面乳褐色	粘質 良好	良好	保付器
25	土師器 小型甕	10.0 —	体部から丸みのある「く」字形に屈曲し、斜・外側～内面へ上方へ外反して伸びる口縁部。瘤立が終る。 外面体部ナダ、口縁部ヨコナデ。内面ヘラケズリ(右→左)、口縁部ヨコナデ。	良好 無砂粒多量	良好	良好	二次火炎をうける
26	土師器 甕	17.8 —	体部から一旦直立した後、外上方へ外反する口縁部に至る。瘤立丸く終る。 外面体部横ハケ(10本)の後口縁部ヨコナデ。 内面体部ヘラケズリ(右→左)、口縁部ヨコナデ。	外面黄褐色 内面灰褐色 中核灰黑色	良好 1mm以下の 赤色酸化粒 石英・長石 含む	良好	
27	土師器 甕	16.8 —	体部から、中に稜を持ち輻いしく、字形に屈曲し、口縁部に至る。端部は内外に肥厚し、外傾する面となる。 外面体部横ハケ(3本)、口縁部ヨコナデ。 内面体部押さえ後ナダ、口縁部横ハケ(8本)後ヨコナデ。	乳白色	良好	良好	体部の破片 に黒斑あり
28	土師器 甕	23.0 —	体部から丸く、字形近くに屈曲する口縁部。端部は外傾する面となる。 外面横ハケ(7~8本)後ヨコナデ。内面横ハケ(3本)後ヨコナデ。	乳灰褐色	良好 石英・長石等の微粒を多く含む	良	

造物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 高さ	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
29	土師容器	22.0 —	体部からく字形近くに屈曲し、上外方へ外反きみに伸びる口縁部。端部丸く終る。 ヨコナデ。	乳褐色	良 2 mm以下の 長石・石英 チャート多 量に含む	良好	
30	土師容器	— 最大径 18.0	長い球形を示すと考えられる。体部から丸く屈曲して上外方へ伸びる口縁部に至るが、端部欠損する。 外面体縁ハケ(4本)、口縁部ヨコナデ。 内面底部に指壓圧痕、体部ヘラケズリ、細かいハケ残るが不明瞭。	乳褐色～ 明褐色	やや粗 2 mm程度の 石英・長石 チャート等 含む	良	外面に焼付 着
31	土師容器	— —	深い半球形の底体部のみ遺存。 外面ナデ、内面ヘラケズリの後ナデ。	淡褐色～ 明褐色	良	良好	内外に焼付 着
32	土師容器 鉢?	21.0 16.6 最大径 22.0	深い半球形の底部から内側して立ち上がる体部に至る。口縁部は体部から上外方へ外反して伸び、端部尖りきみに丸く終る。 外面体縁左上ハケ(5本)、後口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラケズリ、底部(下→上)、体部(右→左)、口縁部ヨコナデ。	黄褐色	良好 2 mm前後の チャート・ 石英含む	良好	外面の相対 する位置に 斑斑あり。
—	—	—	—	—	—	—	—
33	土師容器	23.2	わずかに外傾して伸び、口縁部に至る。口縁部は裏面を被じた後、端部水平な面となる。 外面横ハケ(3本)、後口縁部ヨコナデ、内面横ハケ(3本)。	乳褐色～ 黑色	良好 2 mm以下の チャート・ 石英を含む	良	外面に焼付 着
34	土師容器 鉢?	27.4	体部から丸く屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部。端部丸く終る。 外面体縁放射状ハケ(5本)、口縁部ヨコナデ。内面体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡褐色 内面灰褐色	やや粗 2 mm以下の チャート・ 石英・長石 多く含む	良	表皮剥離
35	土師器 高杯	10.7 —	深い半球形の杯部。口縁部内側し、端部巻き込みきみに丸く終る。 外面体縁放射状ハケ(5本)、後口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ後放射状ハミガキ。	乳褐色	結晶 長石・石英 チャート・ 赤色鐵化鉄 等の磁性を わずかに含む	良好 堅強	焼付着
36	土師器 高杯	125 —	浅めの半球形の杯部。口縁部巻き込みきみとなり、端部丸く終る。 外面柱状部ヘラナデの後杯部に放射状ハケ(5本)、口縁部ヨコナデ。柱状部と杯部の境にヘラ撒き沈殿によって区別する。内面杯部横ヘラハケ(5本)の後放射状ヘミガキ。柱状部にはしばり日焼。	淡灰褐色	良好 長石・石英 雲母等の細 粒を含む	良好	
—	—	—	—	—	—	—	—

測定番号 開拓番号	器種 高杯	(cm) 口径 器高	形態・調査等の特徴	色調	地土	焼成	備考
37	土師器 高杯	13.0 —	半球形の杯部、口縁部丸く終る。 ヨコナデ、内面に放射状ハミガキ。	乳褐色	良好	良	表皮剥離
一四							
38	土師器 高杯	12.9 —	36に似る杯部。 外面下半に指痕压痕・放射状ハケ（9本） の痕跡、口縁部ヨコナデ。内面口縁部のヨコ ナデの他不明。	乳茶褐色	良好 2mm以下の 石英・長石 チャート・ 赤色酸化鉄 等多く含む	良	二次火熱を うける。
一四							
39	土師器 高杯	13.2 —	浅い半球形の杯部。口縁部直立し、端部丸 く終る。 外面杯底部の指痕压痕の他不明。	灰緑色～ 淡褐色	やや粗 2mm以下の 長石・石英 チャート等 多く含む	良	表皮剥離
40	土師器 高杯	13.3 —	直線的に伸びる深めの杯部。口縁端部は尖 りぎりに終る。 杯部と脚部の接合部外間に粘土貼付後指お さえ後ヨコナデ。	明橙色～ 乳褐色	粗良	良好	内外の相対 する位置に 黒斑あり
一四							
41	土師器 高杯	11.8 —	37に似る杯部。 ヨコナデ。	乳褐色	粗良 赤色酸化鉄 石英・長石 の微粒含む	良好	
42	土師器 高杯	13.1 —	37に似る杯部。 外面指おさえ後ヨコナデ、内面ヨコナデの 後放射状ハミガキ。	乳褐色	粗良	良好	
43	土師器 高杯	12.7 —	半球形の杯部。口縁部直立し、内に向作 った後尖て終る。 外面指おさえ内外ともヨコナデ。	乳白黄色	粗良 長石等の微 粒を含む	良好	
44	土師器 高杯	13.7 —	扁平な逆三角形の杯底部から屈曲し、上外 方へ内側して伸びる口縁部に至る。端部は尖 りぎりに終る。 杯底部と口縁部を接合後、外面杯底部指お さえ、外面口縁部ハケ（6本）後ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	淡褐色～ 明褐色	良好 1mm以下の 石英・長石 チャート等 多量に含む	良好	
一四							

遺物番号 田原市号	器種	(cm) 法縫 直径	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
45	土師器 高杯	13.0 11.3 9.6	平坦な杯底部から屈曲し、斜上方へ内窓して伸びる口縁部。端部は内に巻き込む。柱状部は下外方へ直線的に伸び、周曲して外下方へ伸びる腹部に至る。端部丸く終る。 口縁部・杯底部・腹部の各接合部圧着後、外面柱状部ヘラナデ、杯部・底部ヨコナデ、内面柱状部ケズリの後杯部・底部ヨコナデ。	乳白色	良好 1mm前後の 長石・石英 赤色酸化粒 含む	良好	内面屈部に 黒斑あり
46	土師器 高杯	—	平坦な杯底部から一旦直立し、上外方へ直線的に伸びる。 外面放村状ハケ(3本)後ヨコナデ。内面ナデの後横ハケ(3本)、部分的に傾位のヘラミガキ。	乳白色～ 明褐色	精良 石英・長石 の微粒含む	良好 堅致	
47	土師器 高杯	— —	46に似るが、全体に丸みをおびる。 外面ヨコナデの後放射状ヘラミガキ、杯底部ヨコナデ。内面傾位のハケ後ヨコナデ。	乳白色	良好 3mm程度の 花崗岩・長 石・赤色酸 化粒等の細 粒含む	良好	
48	土師器 高杯	— — 8.5	外下方へ直線的に伸びる柱状部から、内に棘を作つて内窓し、下外方へ直線的に伸びる腹部に至る。端部尖りぎみに終る。 杯部・柱状部・腹部の各接合部に拘おさえ。 外面柱状部ナデ。底部ヨコナデ。内面柱状部ケズリ(左一右)、底部ヨコナデ。	乳白色～ 乳褐色 中核灰白色	精良	良好 電極	外面屈部に 焼付苔
49	土師器 高杯	— — 9.3	外下方へ内窓して伸びる柱状部から、内に棘を作つて内窓し、下外方へ直線的に伸びる腹部に至る。端部は内に巻き込み、丸く終る。 端部壓接おさえの後、外面柱状部ヘラナデ、底部ヨコナデ。内面柱状部しほり目、底部ヨコナデ。	乳褐色 (鮮紅色の 部分もあり)	精良 5mmの花崗 岩・1mm以 下のチート・赤色 酸化粒わずか に含む	良好	
50	土師器 高杯	— — 7.5	外下方へ内窓して伸びる柱状部から、斜下方へ外反して伸びる複数部に至る。端部は外側する面となる。 柱状部と複数部の心地に拘おさえ。外面柱状部ヘラナデ、底部ヨコナデ。内面柱状部しほり目、底部ヨコナデ。	乳褐色	精良 長石の微粒 を含む	良好	
51	土師器 高杯	— — 9.0	下外方へ直線的に伸びる柱状部から、斜下方へ直線的に伸びる複数部に至る。端部は外側する面となる。 柱状部と複数部の心地に拘おさえ。外面柱状部ヘラナデ、底部ヨコナデ。内面柱状部しほり目、底部ヨコナデ。	黄褐色	良好 長石の微粒 を含む	良好	
52	土師器 高杯	— — 8.8	柱状部から複数まで、連続して斜下方へ外反して伸びる。器内は先細となり、端部内側する面を持つ。 外面柱状部ヘラナデ、底部ヨコナデ。内面柱状部しほり目、底部ヨコナデ。	乳褐色	精良 長石・赤色 酸化粒の微 粒含む	良好	

虚物番号 回取番号	器種	(cm) 口径 底面 直径	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
53	土師器 高杯	— 底径 8.5	外下方へ直線的に伸びる柱状部から丸く細 曲し、斜下方へ螺旋的に伸びる螺旋部による。 螺旋部のある面を作る。内面底部にヘタ描 き跡。 内面柱状部しづり目、底部ヨコナデ。	乳褐色 微粉粒含む	精良 精良	良好	—
54	土師器 高杯	— 底径 8.2	柱状部から底部まで、連続して斜下方へ外 反して伸びる。底部器内を成して尖りぎみに 丸く終る。中位に3孔を有する。 柱状部内面にしづり目・ケズリの痕跡	乳灰色 中核灰褐色	良好 1mm以下の 赤色酸化鉄 チャート・ 石英含む	良	表皮剥離
一四	—	—	—	—	—	—	—
55	土師器 高杯	— 底径 8.0	外下方へ直線的に伸びる螺旋。端部は外縁 する面を持つ。円孔を有する(1孔のみ残存)。 調整不明。	淡褐色 長石・石英 赤色酸化鉄 多く含む	良	良	表皮剥離
56	土師器 高杯	— 底径 8.4	斜下方へ内向きに伸びる螺旋。端部は外 縁する面となる。 外縁のヨコナデの他調整不明。	乳黄色～ 明褐色	良 長石・石英 等の相混を 含む	良好	—
57	土師器 高杯	— 直径 10.8	外下方へ直線的に伸びる螺旋。底部内に3 孔を有する(1孔のみ残存)。 ヨコナデ。外縁にヘタミガキの痕跡。	乳褐色 —	良 1mm以下の チャート・ 石英・長石 多く含む	良好	—
58	土師器 杯	11.1 5.5	平坦な底部から丸みを持って立ち上がる体 部。口縁部は斜く外反し、端部尖って終る。 外縁部に墨痕あり。指觸圧成形後口縁 部ヨコナデ。	淡褐色～ 淡褐色	良 1mm以下の 石英・長石 赤色酸化鉄 等多量に含 む。	良	表皮剥離
一四	—	—	—	—	—	—	—
59	土師器 杯	12.8 —	斜上方へ内向きに伸びる体部から外反し、 上外方へ伸びる口縁部に至る。端部尖りぎみ に終る。 外縁体部縫ハケ(3本)、口縁部ヨコナデ。 内面体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳黃褐色 ～褐色	良 2mm以下の チャート・ 石英・長石 多量に含む	良好	風化あり
一四	—	—	—	—	—	—	—
60	土師器 杯	— —	半球形の底体部のみ残存。底部や口縁。 内面上方のヨコナデの他不明。	褐色	良好 長石・チャ ートの粗粒 含む	良	二次火熱を うける

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 口径 法盤 基部	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
61	須恵器 杯蓋	12.4 3.7	平坦な天井部から斜下方へ下り、鋸い縁に至る。 口縁部は外傾しており、外反して水平な端部に至る。 外山後端より 0.6 cm 以上回転ヘラケズリ、 他の回転ナダ。	灰色	精良	良好 堅密	外面天井部 灰かぶり
一五							
62	須恵器 杯蓋	13.9 4.5	わざかに丸みを帯びる平坦な天井部から、 鋸く外反して縁に至る。縁の下は凹輪状に 凹み、蓋縁が下る口縁部に至る。端部外反し、 内傾する山を持つ。 外面後端より 0.5 cm 以上回転ヘラケズリ、 その他回転ナダ。	灰色	精良	良好 堅密	外面の一部 に灰かぶり
一五							
63	須恵器 杯蓋	13.0	丸い天井部からわずかに外反して縁に至る。 口縁部は下外方へ内窪して伸び、端部鋸く外 反し、水平な山となる。 外面後端より 0.6 cm 以上回転ヘラケズリ、 その他回転ナダ。	外面灰色 内山・中核 灰茶色	精良	良	
一五							
64	須恵器 杯蓋	13.1 4.9	半周で狭い天井部から斜下方へ直線的に伸 び、縁に至る。口縁部わずかに外傾して下り、 端部水平な山となる。 外面後端より 0.5 cm 以上回転ヘラケズリ、 その他回転ナダ。	灰色～ 淡灰色	精良	良好 堅密	外面天井部 灰かぶり
一五							
65	須恵器 杯蓋	11.8	縁はあまり突出しない。口縁部は外傾して 伸びる。端部は鋸く外反し、水平な山を持つ。 中核灰褐色 外面後端より 0.4 cm 以上回転ヘラケズリ、 その他回転ナダ。	灰色	精良	良 気泡あり	
一五							
66	須恵器 杯蓋	12.2 3.9 破損 12.7	低めの丸い天井部から斜下方へ直線的に伸 び、縁に至る。縁は丸みを持ち、端部からわ ずかに突出する。口縁部は垂直に下り、端部 尖りざみに終る。 外面天井部ヘラケズリの後全体を回転ナダ。	外面・中核 紫褐色 内山紫青色	精良	良	
一五							
67	須恵器 杯身	10.4 4.6 受部径 12.8	扁平な半球形の体部。受部は断面三角形で、 水平に突出する。立ち上がりは内傾し、端部 丸く終る。 外面受部端より 1.2 cm 以下単位幅の狭い回 転ヘラケズリ、内山底部静止ナダ。その他の回 転ナダ。	灰色～ 淡灰色	精良	良好 堅密	
一五							
68	須恵器 杯身	11.1 4.8 受部径 13.1	扁平な半球形の体部から斜上方へ外反して 受部に至る。受部上面は水平。立ち上がりは 内傾して伸びた後直立し、端部丸く終る。 外面受部端より 0.6 ～ 0.8 cm 以下回転ヘラ ケズリ、その他回転ナダ。	暗灰色 中核紫青色	精良	良好 堅密	
一五							

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 口徑 底盤 高さ	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
69	須恵器 杯身	10.8 4.2 受部径12.8	平坦で広い底盤から斜上方へ直線的に伸びる。受部に至る。受部の器肉は薄く、上辺は水平。立ち上がりは直線的に内傾し、端部は内傾する面を持つ。 外腹受部端より1.7~2.0cm以下単位幅の狭い凹縫へラケズリ、その他の回転ナデ。外腹底に指頭圧痕認められる。	暗青灰色 中核朱褐色	精良	良好 堅緻	
一五							
70	須恵器 杯身	10.1 5.1 受部径12.7	平坦で広い底盤から斜上方へ丸みを持って伸びる深い体部。受部ははざかに突出し、上辺は水平。立ち上がりは器肉を縮しながら内傾して伸びる。端部は内傾する面となる。 外腹受部端より2.0cmまで回転へラケズリ、内腹底部静止ナデ、その他の回転ナデ。	灰白色	良好 2mm以下の 石英含む	やや不 均質	
一五							
71	須恵器 杯身	10.0 4.5 受部径13.0	70に似るが角ばった形態を呈し、受部・立ち上がりはシャープである。 外腹受部端より0.6cmまで回転へラケズリ、その他の回転ナデ。	灰色	精良	良好 堅緻	
72	須恵器 杯身	10.8 4.9 受部径13.0	平坦で狭い底盤から丸みを持って立ち上がった後、斜上方へ直線的に伸びる体部。受部ははざかに突出する。立ち上がりは内傾し、端部丸く終る。 外腹受部端より2.6cmまで回転へラケズリ、その他の回転ナデ。	灰色	精良 長石の微粒 を多く含む	良好	
73	須恵器 無蓋高杯	13.7 9.4 側径 10.6	平坦な杯底盤から外上方へ内傾して伸び、内傾する。口縫部は外方へ外反ぎみに伸び、底部は内に凹縫状の凹みが現れる。脚部は斜下方へ外反して下り、端部に凸縫を削らせて後器肉を縮めて丸く終る。 外腹杯底盤回転へラケズリの後全体を回転ナデ。	暗灰色 中核朱灰色	精良	良好 外腹脚部下 平・内腹杯 部膨かぶり	
一六							
74	須恵器 無蓋高杯	16.1	平坦な杯底盤から斜上方へ内傾して伸び、2条の凸縫を削らせた後、器肉を縮めて外反して伸びる口縫部に至る。端部は内に丸い段を作った後丸く終る。凸縫間に7条1組の波状文1帯、杯底盤に透しの痕跡あり。 回転ナデ。	黒灰色	精良	良好 内面に灰か ぶり	
一六							
75	須恵器 無蓋高杯	16.8	74に似るが、やや標準的な器形。凸縫は間隔を狭めめて2条配置させる。底盤内面の段は74より浅い。凸縫下に7条1組の波状文1帯、杯底盤に透しの痕跡あり。 外腹杯底盤回転へラケズリの後全体を回転ナデ。	暗灰色	良好 2mm以下の 石英・長石 等含む	良好 内面に灰か ぶり	
76	須恵器 無蓋高杯	16.5	平坦な杯底盤から斜上方へ直線的に伸び、2条の凸縫を削らせて直立した後外板の口縫部。端部は内傾する凹縫を作った後上方へ尖る。凸縫間に6条1組の波状文1帯、杯底盤の4方に透しの痕跡あり。 外腹杯底盤静止へラケズリの後静止ナデ、内腹杯底盤静止ナデ、他の回転ナデ。	青灰色	精良	良好 堅緻	
一六							

遺物番号 同様名	器種	口径 法量 基高	形態・調整等の特徴	色調	精良	焼成	備考
77	須恵器 有蓋高杯	10.4 10.0 愛部基 12.6 基高 9.7	きわめて扁平な杯底全体に断面三角形の愛部が突出する。立ち上がりは内傾し、邊部丸く終る。脚部は斜下方へ外反して下り、中位に凸板を設け、垂直な凹面を持つ端部に至る。外向底部にヘラ描き記号あり。 外向底部周縁ヘラケツリの後全体を回転ナデ。	灰化	精良 1mm程度の 長石・石英 含む	良好	焼きひずみ
一六	78	須恵器 蓋	16.0 —	外面上に3条の凸線を施し、外反して伸びる口縁部。底部は直立する凹面となる。突線間に12条1組の波状文3帯。 回転ナデ。	淡灰色	精良	良好 堅緻
一六	79	須恵器 蓋	— 最大径 25.6	上位に最大径を持つ球形に近い体部。上位約2分近い7条1組の波状文1帶施す。 外向格子状タキの後上半を回転ナデ。内面タキの後上位約3分を回転ナデ。下半静止ナデ。	淡灰色	精良	良好 内面下半に 模様物付着
80	須恵器 器片	39.7 45.3 板径 78.4	脚部との境に凸線を施せた後、深い半球形の内部に通る。台体部外側には2条の凸線が施された後外上方へ外反して口縁部に至る。始部は上に肥厚し、凹面となる。脚部は下外方へ直線的に伸びた後一帯内彌みとなり、端部へ至る。端部は水平な凹面となる。外周には2条1組の凸線を4組施せる。 各凸線間に、台部は波状文1帶・波状文2帯、ヘラ描き花瓶による複合輪衡文、脚部は波状文1帶および長方形の通し(6方)を持つ。各波状文は10条1組。 外面上底部にタキの痕跡、他は回転ナデ。	淡灰色～ 暗青灰色 中核紫褐色	良好 石英・長石 の微粒含む	良好	内面台部に 緑色系の自然釉付着
一六	81	須恵器 器片	— — 板径 23.0	下方へ外反しきみに伸びた後、下位で内彌みとなる底部のみ焼成。底部は水平で丸みのある山を持つ。外面上に2条1組の凸線が4帶焼成する。各凸線間に12条1組の波状文1帶および長方形の通し(7方)を持つ。 外面上底部にタキの痕跡、他は回転ナデ。	—	—	—

SK-4

遺物番号 区分番号	器 様	(cm) 口径 法量	形 態・調 整 等 の 特 徵	色 調	胎 土	焼 成	備 考
82	土師器 高杯	16.1 —	半球形の杯部上下造存。 調整不明	淡赤褐色	粗糞	良好	表皮剥離
83	土師器 甕	21.4 —	体部から「く」字形に削出し、斜上方へ外反して伸びる口縁部。端部は器内を感じ、外へ丸くつまんで終る。 外面縦ハケ(5本)の後端部、端部ヨコナデ。内面口縁部横ハケの後全体ヨコナデ。	淡黄褐色	白 石英の後粒 多く含む	良好	
84	須志器 杯身	13.4 縦径 11.0	やや丸みのある天井部から外下方へ直線的に伸び、わずかに突出する様に平ら。口縁部は外下方へ外反して伸び、端部尖る。 外面縦槽より0.4cm以上内輪へラケズリ、その他の回転ナデ。	灰色	良	良好	堅密
一八							
85	須志器 杯身	10.0 受取径 12.6	浅い半球形の体部からわざかに外反して受部端に平ら。受部上面は水平で、器内を減じて内傾する立ち上がりに至る。端部はほぼ水平な面を作る。 外面受部端より0.8cm以下内輪へラケズリ、その他の回転ナデ。	青灰色	粗糞	良好	堅密
86	須志器 無蓋高杯	10.4 最大径 12.6	さくまで縦半球形の杯底部から、わずかに突出する凸線に平ら。「U」字形部は上外方へ外反して伸び、端部は内方に鋸い段を持つ。端部は外下方へ直線的に伸びた後、端部近くで外反し、端部内折し、凹線を露らせて終る。 外面杯底部回転ヘラケズリの後全体を回転ナデ。	灰青色	粗糞	良好	外面部・ 内面部に 灰かぶり
一八							

SK-5

遺物番号 区分番号	器 様	(cm) 口径 法量	形 態・調 整 等 の 特 徵	色 調	胎 土	焼 成	備 考
87	土師器 小型瓶	10.4 — 最大径 12.6	体部から「く」字形近くに削出し、上外方へ外反して伸び、端部尖り立ちに至る。端部尖り立ちに終る。 外面縦縫ハケ(9本)の後側部左上ハケ(9本)、口縁部ヨコナデ。内面林部へラケズリの後ナデ、口縁部ヨコナデ。	暗赤褐色	良好	良好 やや軟質	二次火熱を うける
一八							
88	須志器 器台	29.0 —	上外方へ内凹して伸びる台部上位のみ造存。口縁部は外上方へ外反し、端部上下に凹にして凹面を作成。2条1組の凸縫を3組割らせる。各突起間に9条1組の波状文2帯。1帯および、最下にはヘラ描き沈線による輪文の痕跡あり。 回転ナデ。	外面暗沃色 内面青灰色 中核部灰色	良	内外面とも 灰かぶり	
一八							

SK-8

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
89	十郎器 葵	17.4 —	内に鍵を作って、体部から「く」字形近くに露出し、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。口縁部は先端となり、端部尖りぎみに近く終る。 外面左上ハケ(9本)後、阿那までヨコナデ、内面全体部ハラケズリ(右→左)、口縁部ハケ(9本)後ヨコナデ。	外面～内面 口縁部 明褐色 内面全体部 灰褐色	良紅 2mm以下の チャート 長石・石英 含む	良好 硬質	
一八							

SK-9

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
90	十郎器 高杯	12.4 —	半球形の杯部。内底面は水平で、口縁部は淡赤色立ち、端部丸く終る。 外面脚部との接合部に粘土を付加し、指おさえ、放射状ハケ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデの後放射状ヘラミガキ。	精良 赤色酸化粧 長石・石英 散見される	良好		
一八							

SD-1

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
91	上郎器 金	11.8	上外方へ直線的に伸びた後、わずかに外反する口縁部。端部は器内を減じて尖りぎみに終る。 調整不明。	黄灰色	やや粗	良	表皮剥離

SD-2

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
92	七郎器 高杯	13.6 —	浅い半球形の杯部。口縁部はわずかに内折し、端部尖りぎみに終る。 外面放射状ハケの後口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデの後放射状ヘラミガキ。	黄褐色～赤褐色	稍良	良好	外面下半表皮剥離 外面上半に 焼付着

SD-4

遺物番号 回収番号	器種 形	(cm) 口径 法量 容積	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
93	土師器 甕	14.0 —	体部から丸みのある「く」字形に屈曲し、上外方へ直線的に伸びる口縁部。底部は内に肥厚し、内傾する面を持つ。 ヨコナデ。	茶褐色	良 3mm以下のチャート・長石等多く含む	良	表皮剥離 煤付着

SP-7

遺物番号 回収番号	器種 形	(cm) 口径 法量 容積	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
94	土師器 高杯	15.3	半球形の杯部、口縁部は段を作った後器肉を減じ、直線的に伸びる。底部は丸みのある面となる。 粘土絞巻き上げ後指おさえで压着、外面へラケズリ成形後底部ハケ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	明褐色～淡褐色	良好	良好	SD-8 185に類似 わずかに煤付着、表皮剥離部あり

A トレンチ包含層

遺物番号 採取番号	出 土 地 区	標 高 (m) 法量 口徑 深さ	形 態 ・ 調 整 等 の 特 徴	色 調	胎 土 燒 成 度 考
95	白磁器	15.6	上方へ内窓があり伸びた後、断面三角形の軸広の長窓状口縁部に生る。内面体部下位に沈線が現る。 外間にカッタ割りの段様る。	輪 灰白色 不透明 細かい目入	白灰色 黑色粒含む 良好
	(側溝)				
96	土瓶器 杯	15.0 4.2	平坦な底部から丸く屈曲し、斜上方へ直線的に伸び、口縁部に至る。端部は器内を減じてつまみ上げきりに丸く終る。 外面部指おさえの後ナデ、口縁部ヨコナナ。内面底部一方向のナデ、口縁部ヨコナナ。	黄赤色 中性系褐色	精良
	(3 B)				良 やや軟質
97	土瓶器 杯	19.4 5.4	平坦で広い底部から上方へ内凹して開いた後上方へ直線的に伸び、器内を減じて口縁部に至る。端部は上方へ丸くつまむ。 外面部一方向・体部4~5方向に分割ヘタミガキ。口縁部ヨコナナ。内面ナデの後体部に放射状ヘタミガキ。口縁部ヨコナナ。	乳黄色	精良
	(4 D)				良 表面剥離
98	土瓶器 壺	11.0	脣部から丸く屈曲して、斜上方に伸びる口縁部に至る。端部は器内を減じて丸く終る。 タキ出しき上縁。外面部上タキオの痕跡、口縁部ヨコナナ。内面ヨビナナ後口縁部ヨコナナ。	乳黄色~ 明褐色	良 1mm前後の チャート+ 石英・長石 多く含む
	(側溝)				
99	土瓶器 壺	— 最大径 18.0	扁平な球形の体部から丸く屈曲し、上方へ外反する口縁部に至る。 粘土結晶き上げ。外面部ナデの後放射状ハケの痕跡、口縁部ヨコナナ。内面指おさえ後ド半ナデ。口縁部ヨコナナ。	乳黄色~ 淡褐色	良 2mm前後の 赤色陶化粒+ 石英等散見 される。
	(3 H) (3 I)				
100	土瓶器 杯	16.0	内傾する体部から一旦直立し、わずかに外反する口縁部に至る。端部尖って終る。 外面部ヨコナナの痕不明。内面体部ナデ、口縁部ヨコナナ。	乳灰色~ 黃褐色	やや粗 石英・チャート 細粒多く 含む
	(側溝)				良好 外面部の 表皮剥離 焼付着
101	土瓶器 壺	11.0	体部から「く」字形に屈曲する口縁部。端部は水平な面を持つ。 外面部ヨコナナ。内面肩部ナデ、口縁部横ハケ(3本)。	外面 淡黃灰色 内面 灰褐色	やや粗 石英・長石 の細粒含む
	(3 G)				
102	土瓶器 壺	10.5 最大径 12.6	トブくれの体部から、丸みのある「く」字、灰褐色 形に屈曲し、外上方へ伸びる口縁部に至る。 端部尖りざみに終る。 外面部跡に左上タキオ(3本)の痕跡、口 縁部ヨコナナ。内面口縁部ヨコナナの痕不明。	やや粗	良
	(3 H)				

遺物番号 四角番号	出土地名 (土地区)	種類 法量 高さ	形態・調整等の特徴	色調	釉土	焼成	備考
103	土師器 甕	11.3 最大径 11.6	扁平な球形の体部から丸く縮曲し、斜上方へ内凹きみに伸びる口縁部に至る。底部尖り、ぎみに移る。 外面部上位部ハケ(11本)・下位部上ハケ(11本)・口縁部ヨコナデ。内面部上半右上～横ハケ(5本)・下半横ハケ(6本)。	淡赤褐色	やや粗 2mm以下の 長石・石英 多く含む	良	
	(3 G)						
104	土師器 甕	13.0 —	体部から丸く屈曲し、上方へ内凹して伸びる口縁部に至る。端底つまみ上げぎみに丸く終る。 外面部底部ハケもしくはタキ(7本)、口縁部ヨコナデ。内面部ヘラケズリ(石・ん)、口縁部ヨコナデ。	暗褐色	やや粗 石英の粗粒 多く含む	良	
	(3 I)						
105	土師器 甕	— 最大径 16.2	扁平な倒卵形の体部から丸く屈曲し、上方へ内凹して伸びる口縁部に至る。口縁部・底部を欠損する。 粘土組接合。外面部底部ハケの痕跡、口縁部ヨコナデ。内面部ナガの痕跡、口縁部ヨコナデ。	黄褐色～ 明褐色	粗 5mm以下の ナット・ 石英等含む	良	
	(3 E)						
106	土師器 甕	— 最大径 11.0	平坦な底部から、内凹して立ち上がる体部に至る。 外面部周縁ヘラで面取り後内外ともナデ。	乳白色	やや粗 3mm以下の 石英・長石 多く含む	良好 硬質	
一九	(例説)						
107	土師器 甕	10.6	体部から「く」字形に屈曲し、斜上方へ外反して伸びる口縁部。端底の芯肉薄くなり、丸く終る。 外面部屈曲部指おさえ後内外ヨコナデ。	淡赤褐色	やや粗 2mm以下の 石英・長石 多く含む	良	表皮剥離 内面部縁部に焼付石
	(3 G) (4 C)						
108	土師器 甕	20.2	体部から丸みのある「く」字形に屈曲し、斜上方へ外反して伸びる口縁部。端部わずかに内凹ぎみとなつて丸く終る。 内外ともヨコナデ。	淡黃褐色	粗 2mm以下の 石英・長石 チャート・ 赤色酸化粒 含む	良 やや軟 質	表皮剥離
	(3 G)						
109	土師器 甕	19.8	内に筋を持ち、体部から突いて「く」字形に屈曲し、斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部わずかに内凹し、外板する長い面を持つ。 外面部ハケ(5本)後ヨコナデ。内面部ヘラケズリの痕跡、口縁部ヨコナデ。	淡黃褐色	粗 2mm以下の 石英・長石 チャート・ 等含む	良好	
	(3 G)						
110	土師器 甕	20.2 —	斜上方へ外反して伸びる口縁部。端部上下にわざかに肥厚し、外板する面を持つ。 外面部ハケ(4本)後ヨコナデ。内面部横ハケ(4本)後ヨコナデ。	淡黃褐色～ 灰褐色	やや粗 5mm以下の ナット・ 石英・長石 多量に含む	良	
	(3 II)						

遺物番号 登録番号	原 産 地 (山・上・地区)	(cm) 口幅 法量 高さ	形態・調整等の特徴	色調	納 土	焼成	備考
111	土師器 甕	27.4 —	内に縁を持ち、鋭い「く」字形に屈曲し、上方へ直線的に伸びる口縁部。端面近くで外反し、端部尖りがみに丸く終る。 外面部ハケ（5本）後ヨコナデ。内面部ヘラケズリ、口縁部横ハケ（5本）後ヨコナデ。	淡青褐色	良 2mm以下の チャート含む	良好 硬質	
	(3 H)						
112	土師器 高杯	11.7 —	下球形の杯部。口縁部は直立し、端部尖り、明暗色 がみに丸く終る。 脚部との接合部周囲に片手を付加し、指おさえて圧着。内面部化ハケの痕跡。	明 3mm以下の 長石・石英・ 花崗岩等含む	良	表皮剥離	
一九	(側面)						
113	土師器 高杯	14.6 —	底底部から外上方へ内凹して伸びた後、直立する口縁部に丸る。端部丸く終る。脚部は外方へ直線的に伸び、3方に円孔を持つ。 外面部底部に放射状ハケの痕跡、柱状部ヘラナデの痕跡。内面部柱状部にヨコナデの痕跡。	明褐色～ 赤褐色	良 長石・石英の 細粒含む	良	表皮剥離
	(3 F)						
114	土師器 高杯	13.2 —	半球形の杯部上のみ直立。 口縁部尖り、明暗色 がみに丸く終る。 内外ともヨコナデ。	明褐色	良 1mm以下の 石英・長石等含む	良	表皮剥離
	(3 H)						
115	土師器 高杯	13.7 —	平坦な移底部から一旦屈曲して直立した後、斜上方へ内凹して伸び、端部近くで外反がみとなる。口縁部に丸る。脚部外輪ある面となる。 外面部放射状ハケ（13本）後ヨコナデ。 内面部上ハケ（13本）、ところどころにヘラナデ見られる。	良 長石・石英 赤褐色化粒の 細粒多く含む	良	表皮剥離	
一九	(3 E)						
116	土師器 高杯	13.8 —	平坦な移底部から丸く屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる。口縁部丸く終る。柱状部は外方へ直線的に伸びた後、内に縫を作つて斜外方へ直線的に伸びる脚部に丸る。 外面部接合部付近にハケ（9本）、柱状部ヘラナデ面取り後縁ハケ。 内面部底部ヨコナデの後ヨコナデ、柱状部側面にヘラケズリ（右・左）。	乳白色 内面部柱状部 灰褐色	良 良好 柔軟		
一九	(側面)						
117	土師器 高杯	16.6 —	移底部から一旦屈曲して直立した後、上外へ内凹がみに伸びる口縁部。端部近くで外反がみとなつた後外折する脚部に丸る。 外面部ハケ（5本）後ヨコナデ。内面部ヨコナデ（5本）後縁ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。	乳白色～ 黄灰色	中や粗 1mm以下の チャート・ 石英・長石等多く含む	良	表皮剥離
	(3 H)						
118	土師器 高杯	— 8.9 根径	接続部から根端部まで延びて斜下方へ外反して伸びる。端部は外折する面を持つ。 外面部ヘラナデ面取り後縁部ヨコナデ。内面しぼり後脚部2段に指おさえ。	明褐色	良 石英・長石の 細粒 2mmのチャート含む	良	
一九	(3 H)						

試験番号	器種 (出土地)	(cm) 底径 高さ	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
119	土器器 高杯	— 8.1	縦続部から一柱し、下外方へ内側に伸びた後丸く屈曲し、外下方へ直線的に伸びる部位に至る。端部を丸く終る。 外向柱状部へテラで山取りの波ハケ、底部ヨコナデ、内面柱状部しばりの後抱頭擦おさえ・ハケの痕跡。	明褐色	良	良	表皮剥離
一九	(倒壊)						
120	土器器 高杯	— 幅径 13.5	斜下方へ直線的に伸びる柱状部から、内に横を作った後器内を増して外下方へ直線的に伸びる部位に至る。端部唇肉を彎じ丸く終る。 外向柱状部にハケの痕跡、底部ヨコナデ。 内面柱状部にケズリの痕跡、底部指おさえ・横ハケ(9本)。	淡赤褐色	良好	良好	堅焼
	(倒壊)						
121	土器器 高杯	— 幅径 15.6	斜下方へ外反ざみに伸びた後、内凹する部。端部は内に丸く終る。内孔1孔のみ残存。 調整不良。	明褐色	良 2mm以下の 長石含む	良	表皮剥離
	(倒壊)						
122	土器器 瓶	— 22.7	底部から上外方に伸びた後直立し、わずかに屈曲して外袖する口縁部に至る。端部は外へつまざみに丸く終る。底部の墨面はない。 把手は牛角状であるが、端部を欠損する。 外面縫～左上ハケ(10本)、把手は指おさえで正着後放射状のハケ。内面底部底位のハケの痕跡、口縁部横・ハケ(10本)。	明褐色	やや粗 3mm以下の チャート・ 石英、多量 に含む	良	外画広範囲 に黒斑あり
一九	(倒壊)						
123	須恵器 杯蓋	— 12.7	天井部から外反して枝に至る。枝以下に凹凸状の凹みが一列し、口縁部は外傾して下る。 端部水平な面となる。 外面縫端より0.5cm以上回転ヘラケズリ、 その他の回転ナデ。	外面暗灰色 内面淡灰色 中核素青色	精良	良好	
	(4 H)						
124	須恵器 杯蓋	— 13.0 幅径 12.0	純い縫の底に、輪広の凹凸状の凹みが図った後外反ざみに外傾する口縁部に至る。端部水平な面となる。 回転ナデ。	外面暗灰色 内面淡灰色 中核素青色	精良	良好	
	(倒壊)						
125	須恵器 杯蓋	— 13.4 幅径 12.9	天井部から外下方へ直線的に伸び、わずかに外反する様に至る。枝はや上方に突出する。口縁部は丸みを持って外傾する。端部は内に突き出る所を持つ。 外面縫端より0.5cm以上回転ヘラケズリ、 その他の回転ナデ。	青灰色	精良 石英・長石 の微粒含む	良好	
	(3 G)						
126	須恵器 杯蓋	— 13.6 幅径 14.0	平坦な天井部から斜下方へ内削して伸び、枝に至る。枝の底で器内を彎し、口縁部は垂直に下る。端部わずかに外反し、水平な面を持つ。 外面縫端より0.6cm以上回転ヘラケズリ、 その他の回転ナデ。	外面淡灰色 内面淡青色	やや粗	良好	外画灰かぶり
	(4 H)						

測定番号 試験番号	器 皿	器 皿	(cm) 高さ 直径	口 幅 底面	形 態 ・ 調 整 等 の 特 徴	色	調 理	粉 土	焼 成	備 考
127	須恵器 杯皿		13.6 — 種径 13.1	斜下方へ伸びる天井部から丸く屈曲し、幅広の凹縁を燃らせて、外傾する口縁部に至る。 端部は内傾する凹面となる。 内外とも回転ナデ。		淡灰色	精良	良		
	(側面)									
128	須恵器 杯皿		13.5 — 種径 12.8	半球形の杯皿。核は断面三角形で上方へわざかに突出する。口縁部は丸く終る。 内外とも回転ナデ。	外面淡灰色 内面青灰色	やや粗 2mm以下の 長石含む		良好		
	(側面)									
129	須恵器 杯皿		12.6 3.6 種径 11.8	半端な天井部から斜下方へ内傾して伸び、ぐくわざかに突出する核に至る。口縁部は斜下方へ直線的に伸び、器内を彌じて丸く終る。端部あわめて厚い。 外面天井部に指廻跡が見られる。種径より0.5cm以上静止ヘラケズリの他回転ナデ。内面スピナデ。	淡灰色	やや粗 3mm以下の 石英含む		やや不 良 状質		
二〇	(側面)									
130	須恵器 杯皿 (高杯)		— — —	逆台形のつまろ、中央部は円錐形に突出する。 内外回転ナデ。	青灰色 中核紫青色	良	良好	内面に灰か ぶり		
	(側面)									
131	須恵器 杯身		10.2 4.6 受部径 12.5	浅い半球形の体部から外反して受部に至る。 受部上面は水平。口縁部は器内を彌じて内傾して伸び、端部内傾する狭い凹面となる。 外面受部端より1.6cm以下回転ヘラケズリ、その他の回転ナデ。	灰色	精良	良好	表皮剥離		
二〇	(31)									
132	須恵器 杯身		— — 受部径 13.0	平坦な底部から斜上方へ内傾して伸び、ねじれ外反して受部に至る。受部上面は水平。 口縁部は器内を彌じて斜内方へ伸びるが、端部を尖らせる。 外面の部端より0.6cm以下単位幅の狭い回転ヘラケズリ、その他の回転ナデ。	外面暗灰色 —灰色 内面淡青灰色	良	良好	表皮剥離 やや軟質		
	(4H)									
133	須恵器 杯身		11.2 5.6 受部径 12.7	半球形の体部から外反して、長く突出する受部に至る。受部から斜内方へ丸いカーブで過渡し、立ち上がりに至る。端部は内傾する面となる。 外面受部端より0.6cmまで静止ヘラケズリの後静止ナデ。他の回転ナデ。	白灰色～ 灰色	良 長石の礫 多く含む	不良 状質	表皮剥離		
二〇	(側面)									
134	須恵器 杯身		13.2 — 受部径 15.4	受部は上方へ内凹みに伸びる。立ち上がりは内傾し、端部尖りぎみに終る。 外面受部端より1.2cm以下回転ヘラケズリ、その他の回転ナデ。	淡青灰色	やや粗 長石・石英 の微粒含む				
	(3G) (4G)									

遺物番号 回収番号	器種 (出土・地区)	(cm) 口径 底径	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
135	須恵器 杯身	13.0 — 受部径 15.4	斜上方へ直線的に伸びる。立ち上がりは内傾し、端部尖りざらに終る。 外而受部端より 1.5 cm 以下回転へラケズリ、 その回転ナダ。	外而緑灰色 内面淡青灰色	やや粗	良好	外而灰か ぶり
	(側溝)						
136	須恵器 鏡	33.8 — (4 日)	斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は先 端で丸く終り、下端に内側が創る。 内外とも回転ナダ。	白灰色～ 淡青灰色	精良	良好	
137	須恵器 無蓋高杯	13.2 9.0 9.6 粗径	さわめて扁平な杯底部からわずかに突出する 口縁部は外傾し、端部水平な面となる。脚部 は斜下方へ外反し、断面方形の凸模を創らせ た後さらに伸び、端部は外傾する面を持つ。 凸模上位に円孔(4孔)。 外而杯底部静止へラケズリの痕跡。その後 全体を回転ナダ。	暗青灰色	粗皮	良好 堅致	
二〇	(3 I)						
138	須恵器 無蓋高杯	13.4 10.2 9.0 粗径	137 と同様の杯底部。内側の底には回轉 状の凹みが創った後、外傾する口縁部に至る。 端部は丸く終る。脚部は斜下方へ外反して伸び、 端部上方に突起を創させた後、内側をみとまつて丸く 終る。 調整 137 と同じ。	青灰色 中核紫青色	精良	良好 堅致	
二〇	(3 G)						
139	須恵器 無蓋高杯	17.0 — (3 G) (4 G)	斜上方へ直線的に伸びる体部に回轉と凸模 が現り、一旦立ちした後上方へ外反して伸び る口縁部に至る。端部丸く終る。回轉・凸 模間に 5 条 1 線の波状文を帯びる。 内外とも回転ナダ。	青灰色 中核紫青色	灰 石英・長石 の微粒含む	良好	
140	須恵器 無蓋高杯	16.8 — (3 H)	深い半球形の体部に 2 条の凸模を現させた 後直立し、上外方へわずかに外反して伸び、 口縁部に至る。端部は内に斜めを帯び、2 条の内傾間に 6 条 1 線の波状文を帯びる。 文様部部分に粘土層を貼付して小型の把手を作 る。 内外とも回転ナダ。	外面青灰色 内面淡灰色	やや粗 1 cm 程度の 長石含む	良好	内而灰か ぶり
141	須恵器 高杯	— 粗径 9.5	杯部との接合部から斜下方へ外反して伸び、 端部を鋸歯状に現させた後さらに外反して脚部に 至る。端部は上下につまみ、垂直な切面を持 つ。確位の線状の造りを 3 方に穿つ。 内外とも回転ナダ。	暗青色～深 紫色 中核白灰色	やや粗	やや不 規	焼きぶくれ
二〇	(側溝)						
142	須恵器 高杯	— — (側溝)	杯部との接合部に凸筋・段を現させた後に 外反し、凸筋を削除した後さらに外反して脚部に 至るが、端部を欠損する。脚部の 凸模上位にヘラ光の削痕によって 4 孔を穿つ。 外而回転ナダ。内側しづり・ユビナダの後 下半を回転ナダ。	外面暗灰色 ～赤褐色 内面淡灰色 中核赤褐色	精良	良 やや軟 質	
二〇	(側溝)						

標本番号 部品名	基 地 上 部 点 名 (上地区)	高 (cm) 法 算	口 絶 部 高 度	形 態 ・ 調 整 等 の 特 徴	色 調	筋 土	焼 成	備 考
143	須恵器 鉢	—	8.3	体部から屈曲し、上外方へ外反して伸びた後、内側を作つてさらに外反して伸びる口絶部。底部は内に段を作り、丸く終る。底部に9条1組の波状文を一帯施す。 回転ナデ。	灰青色 中核紫灰色	精良	良好	
144	(3F) 須恵器 鉢	6.1 6.3 底径	5.4	平坦な底部から上外方へ西線的に伸びる体部。体部下位に1条、上位に2条の内縫を留めた後、内縫を據じて斜上方へ外反して伸びる口絶部に至る。底部の把手の痕跡。 外面底部静止ヘラケズリの他回転ナデ。把手の結合は指おさえ。	灰青色 紫灰色の部分もあり。	良 長石の微粒 多く含む	良好	
二〇	(倒溝)	—	—					
145	須恵器 鉢	— 底径	4.4	平坦な底部から斜上方へ内湾して伸びる体部。上位に凸部が現る。 外面底部静止ヘラケズリの他回転ナデ。	青灰色	やや粗	良好	内面に灰か ぶり
	(4F)	—	—					

SK-11

標本番号 部品名	基 地 上 部 点 名 (上地区)	高 (cm) 法 算	口 絶 部 高 度	形 態 ・ 調 整 等 の 特 徴	色 調	筋 土	焼 成	備 考
181	土器 鉢	—	15.9	直立する体部から屈曲し、斜上方へ内湾するに伸びる口絶部に至る。端部は外傾するのみのある面を持つ。 外面の体部タタキの痕跡(鐵器文)。口絶部ヨコナデ。内面体部ナデ、口絶部ヨコナデ。	淡褐色～ 明褐色	良 2mm以下の チャート・ 石英・長石 赤色酸化粒 等含む	良好	
182	土器 鉢	—	16.6 8.0 11.0	平坦で広い底部から上外方へ西線的に伸びた後直立し、上外方へ屈く外反する口絶部に至る。端部外傾する面を持つ。 外面体部横タタキ(3本)、底面・底部周縁ナデ。口絶部ヨコナデ。内面体部ナデ。口絶部ヨコナデ。	明褐色～ 淡褐色	やや粗	良好	外面底面に 黒斑 内面に炭化 物付着
二一	土器 鉢	—	23.2	わずかに外傾する口絶部のみ遺存。端部は外傾する面を作り、外につまんで終る。 内外ともヨコナデ。	乳白色	良好	良	表皮剥離
184	土器 鉢	—	20.8	平坦な底部から外に傾を持って屈曲した後、上外方へ西線的に伸びる体部に至る。 外面体部ヘラケズリ(右→左)、底面・底部周縁ナデ。内面ナデ。	乳黄色	やや粗 2mm以下の 石英多く含 む	良好 やや硬	

SD-8

遺物番号 回収番号	出土地点	(cm) 口縁 法量 高さ	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
185	土師器 高杯	13.8 —	浅い半球形を呈する杯部、口縁部は段を作り淡黄色 った後内部を減じて斜上方へ直線的に伸びる。 粘土細きき上げ後指おさえで圧着、外面へ ラケスリ成形後口縁部ヨコナギ。内面体部ナ ギ、口縁部ヨコナギ。	灰 —	良好	SP-7 94IC類似	
二一							

SP-102

遺物番号 回収番号	出土地点	(cm) 口縁 法量 高さ	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
186	土師器 杯	10.0 —	直立する体部から斜上方へ外反して伸びる 口縁部、端部尖りぎみに終る。 外面体部横タタキの施跡、口縁部ヨコナギ。 内面口縁部のヨコナギの他不明。	暗褐色～ 赤褐色	長 —	良	二次火燃の ためか表皮 剥離

SW-1

遺物番号 回収番号	出土地点	(cm) 口縁 法量 高さ	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
187	土師器 杯	11.3 — 最大径 13.2	内傾する体部から、上外方へ外反する短い 口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終る。 外面体部横ハケかタタキの後口縁部ヨコナ ギ。内面体部横ハケかナギの後口縁部ヨコナ ギ。	淡黄褐色	良 2 cm以下の チャート・ 石英・長石 等含む	良好	表皮や小剥 離する
188	土師器 盃	16.0	体部から屈曲した後、上外方へ外反ぎみに 伸びる口縁部。端部は凹面を絞じて丸みのある 尖りぎみを作る。 外面横ハケ（5本）後ヨコナギ。内面横ハ ケ（5本）後ヨコナギ。	黃褐色	良	良	表皮剥離
189	土師器 盃	14.5	体部から弧く「く」字形に開出し、上外方へ直線 的に伸びる口縁部。端部近くで凹面を絞じて 外反し、端部丸く終る。 外面体部にタタキの施跡、口縁部ヨコナギ。 内面体部にヘラケズリ。口縁部ヨコナギ。	外側黄灰色 内側乳白色	良 3 mm以下の チャート・ 石英多く含 む	良	表皮剥離
190	土師器 盃	14.4 —	体部から丸みのある「く」字形に開出し、 上外方へ直線的に伸びる口縁部。端部は凹面 を絞じて外斜する面を作る。 外面左上ハケ後ヨコナギ。内面体部の折線 仕面の他不明。	乳白色～ 乳褐色	良 1 mm以下の 長石・石英 チャート・ 等多く含む	良	表皮剥離 外面口縁部 に墨迹あり

遺物名	出 山 地 点	(cm) 口縁 法量	形態・調査等の特徴	色 調	胎 土	焼成	備考	
191	土師器 甕	20.5 —	体部から「く」字形に屈出し、斜上方へ外反して伸びる口縁部。端部外へつまんで終わる。体部の張りは弱く、なだらかに聞く。 外周体部縦ハケ(6本)、口縁部ヨコナナ。	外面・内面・良好 口縁部 明褐色～ 淡茶色 内面体部乳 灰色	良	表皮剝離		
192	土師器 甕	—	体部の張りは弱く、やや平坦な底部を持つ。外周縦ハケ(3本)。内面調整不明。	外面淡黄色 内面淡褐色 ～黃灰色	良 2mm以下の チャート・ 長石・石英 多量に含む	良	内面表皮剝 離 外面上に煤付 着	
193	土師器 甕	31.2 26.6	上外方へ伸びる鐘形の体部。口縁部はわずかに直立し、端部水平な面となる。底部は丸みのある平底、把手は牛角状。底部の孔は中央に1孔、周囲に6孔(五孔残存)。 外周口縁ハケ(4.5本)、把手はヘラで面取りの上指おさえて接合。周開を放射状ハケ。内面上半に横ハケ(4.5本)。	乳褐色～ 明褐色	良 2mm前後の 長石・石英 多く含む	良	外面上に黒斑 あり	
二一	194	須恵器 杯身	— 受部径 13.4	半球形の体部に断面三角形の受部が突出する。立ち上がりは内縮すると考えられるが、欠損する。 外周部より2.5cm以下側面へ斜線ハケアリ、他は円軌ナナ。	白灰色	やや粗 2mm以下の チャート含 む	やや不 良 軟質	
195	須恵器 舞臺高杯	(長径) 9.2 (短径) 6.8	浅い半球形の体部に2条の凸縁を認められた後、端部を截じて上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は内に段を作つて丸く終る。凸縁下に6孔1組の波状文を1帯施す。 外周杯底部鋸歯～ラケズリの後全体を回転ナナ。	外面暗灰青 ～灰色 内面灰白色	良好 1mm以下の 長石・黒色 整合む	良好	内面上に灰か ぶり	
二一	196	須恵器 高杯	— — 杯径 11.0	杯部との接合部から、下外方へ外反して伸び、端部に至る。端部肥厚し、外へ丸く終る。長方形の溝を4方に穿つ。 回転ナナ。	暗青灰色	良 5mm前後の チャート・ 長石等わざ かに含む	良	外周部。 内面杯底部 灰かぶり
二一	197	須恵器 甕	17.5 22.5 最大径 27.8	錐形の体部から屈出し、斜上方へ外反した後凸縁を境として上外方へ内收する口縁部。端部水平な面を持つ。底部に焼成後の穿孔。 外周体部下横縫タキ(4.5本)。中位右上タキキ・下位縫タキキ、口縁部・体部上半部縫状の回転ナナ。内面体部ナナ、口縁部ヨコナナ。	淡青灰色 ～灰色 中位に淡茶 色の部分あ り	やや粗 5mm前後の 花崗岩含む	良	
二一	198	須恵器 器台	38.5 —	深い半球形の台部のみ遺存。口縁部は斜上方へ斜削し、上端は丸く下端は凸縫を施させて終る。外面に2条ずつの深い凸縫が3条通り、凸縫間に5条1組の波状文、最下にへり搖き比拡による駆抜文を施す。	青灰色 中位暗赤 茶色	良好 白色の砂粒 を含む	良好 堅緻	

B トレンチ包含層

遺物番号 図版番号	基 地 (出 土地 区)	標 高 (m) 法量	口 器 高 (cm)	形 態 ・ 調 整 等 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
199	上部器 盤	—	14.2	体部から「く」字形に屈曲し、上外方へ内 面して伸びる口縫部に至る。端部は巻き込み ぎみに丸く終る。 外面体部横ハケ（3本）、内面口縫部横ハ ケ（3本）の他不明瞭。	乳白色	良 チャート・ 石英わずか に含む	良	表皮剥離
			(9 D)					
200	上部器 盤	—	13.0	直立ぎみの折曲部から、斜上方へ外反して 伸びる口縫部。端部内を減じて外へつまみ、 丸く終る。 外面縦ハケ（4本）後ヨコナデ。内面不明。	乳白色	良 チャート・ 石英多量に 含む	良	表皮剥離
			(9 H) (10 H)					
201	下部器 盤	—	15.6	斜上方へ外反して伸びる口縫部。端部丸く 終る。 外面縦ハケ（3本）後ヨコナデ。内面横ハ ケ後ヨコナデ。	黄褐色	良 1 mm前後の 石英・チャ ート含む	良	
			(9 D)					
202	下部器 盤	—	15.8	体部から「く」字形に屈曲し、口縫部に至 る。端部は尖りぎみに終る。 外面体部縦ハケ（11本）後口縫部ヨコナデ。 内面粘土層接合部おさえ後ヘラケズリ（左 下→右上）、口縫部横ハケ（7本）	乳白色	良好 石英・長石 等の微粒を 含む	良好	外面に保 持
			(9 D)					
203	下部器 盤	—	15.6	体部から尖り、「く」字形に屈曲し、斜上方 へ外反ぎみに伸びる口縫部に至る。端部丸く 終る。 外面体部横タキ（3本）後左上ハケ（7 本）、口縫部ヨコナデ。内面体部横ハケ（6 本）、口縫部ヨコナデ。	淡赤褐色	良 2~3 mmの 石英・長石 わずかに含 む	良	表皮剥離
			(9 D)					
204	土師器 盤	—	19.0	体部から屈曲し、外傾する口縫部に至る。 端部尖って終る。 外面体部にハケの痕跡（12本）、口縫部ヨ コナデ。内面体部ヘラケズリ（右→左・右下 →左上）、口縫部ヨコナデ。	黄褐色	良	良好	
			(9 F) (9 G)					
205	上部器 盤	—	20.0	体部から丸く屈曲し、斜上方へ外反する口 縫部。端部丸く終る。 外面縦ハケ（7本）後端部ヨコナデ。内面 体部ヘラケズリ（右→左）、口縫部ヨコナデ。	乳白色	良	良好	
			(9 E) (9 G)					
206	下部器 盤	—	21.0	205に似た形態 外面縦→左上ハケ（7本）後端部・屈曲部 ヨコナデ。内面体部ヘラケズリ（右→左・右 下→左上）、口縫部ヨコハケ後ヨコナデ。	乳白色	良 3 mm以下の 石英・チャ ート多く含 む	良好	
			(9 G) (9 H)					

植物番号 販賣番号	種 類 (出土地)	(cm) 法規 基準 高さ	形態・調査等の特徴	色 調 粒 上 焼成	香 味
207	土師器 甕	20.0 —	内に縁を持つ長い「く」字形に彎曲し、外反して伸びる口縁部に至る。端部は外傾する面となる。 外面ヨコナギ、内面体部ヘラケメリ(右下→左上)、口縁部ヨコナギ。	乳白色 良	良 表皮剥離
(9 D) (9 F) (9 G)					
208	土師器 甕	20.8 —	体部から「く」字形に彎曲し、外反ぎみに伸びる口縁部。端部丸く終る。 内外とも横→右上ハケの後ヨコナギ。	淡赤褐色 良	良好
(9 D)					
209	土師器 甕	20.8 —	体部から長い彎曲し、斜上方へ内彎ぎみに伸びる口縁部。端部近くで器内を絞じた後再び内外に肥厚し、端部内側する面となる。 内外ともヨコナギ。	乳黄色 やや粗 5mm前後の 花崗岩の地 鐵砂粒含む	良 表皮剥離
(9 G) (9 H)					
210	土師器 甕	17.5 —	珠形を呈する体部から丸く屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部近くでは一旦器肉を絞じた後、丸く終る。 外面上ハケ(5本)の後口縁部ヨコナギ、内面口部指あきナギ、ヘラケメリ(右→左)、口縁部ヨコナギ。	淡赤褐色 やや粗 5mm前後の チャート・ 赤色無化程 等きわめて 多量に含む	良 表皮剥離
(9 F)					
211	土師器 甕	24.0 —	体部から丸いある「く」字形に彎曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外傾する傾いた山を作る。 タキイ出し口縁、外面左上タキイ(3本)の後口縁部ヨコナギ。	黃褐色 良	良好 外面に鐵 骨
(9 D)					
212	土師器 甕	21.0 —	内傾する体部から丸い「く」字形に彎曲し、外上方へ外反する口縁部。端部は外傾する面となる。 外面体部横タキイ(3本)、口縁部ヨコナギ。内面体部ナギ、口縁部ヨコナギ。	乳褐色 良	良好 やや硬 質
213	土師器 甕	11.8 —	直立する体部から屈折し、斜上方へ内彎して伸びる口縁部。端部つまみ上げて終る。 外面体部横タキイの痕跡、口縁部ヨコナギ。内面体部ナギ、口縁部ヨコナギ。	淡赤褐色 良	良 表皮剥離
214	土師器 甕	9.7 —	ごくわずかに内傾する体部からわずかに屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部丸く終る。 内外口縁部ヨコナギの他不明。	淡黄褐色 良好 鐵砂粒を含 む	良好 外面に黒斑 あり
(9 D)					

考古学的 分類番号	出土地 名	(cm) 口径 法身	形態・調査等の特徴	色調	胎上	焼成	備考
215	上端部 鉢	—	平坦な底部分から、外に腰を持って屈折し、外傾する体部に至る。 底部分 9.3	黄褐色 中核は赤褐色	良 3mm程度の 石英含む	良	表皮剝離
		(9 D)					
216	土器部 鉢	—	狭い半円面を持つ底部から斜上方へ内側して伸びる。 外表面ハケ (3本)。内面ナデ。	淡黃褐色	良 2mm以下の 長石、石英	良好	底部に黒斑 あり
		(9 D)					
217	下端部 鉢	— 最大径 20.0	丸みのある扁平な底部分から斜上方へ内側して伸び、椭球形の体部となる。 外表面ハケ (3本)。内面ナデ。	淡黄褐色	良 5mm以下の チャート・ 石英含む	良好	底部に黒斑 あり
二二		(9 G) (9 H)					
218	土器部 鉢	— 底部分 16.8	平坦な底部分から屈曲し、上外方へ内側に伸びる。 外表面側面ハケ (右→左) の後方に上 のハケ詰められる。内面ナデ。	淡灰褐色～ 黑色	良 2mm以下の チャート・ 石英・長石 等多く含む	良	黒斑あり
		(9 H) (10 H)					
219	須恵器 杯盤	14.1 — 底径 12.8	斜下方へ直線的に伸び、後に至る。腰は突出せず、直下に凹窓が現る。口縁部は外傾し、端部外反して尖って終る。 回転ナデ。	灰色	良	良	
		(9 P)					
220	須恵器 杯盤	11.4 — 底径 10.7	斜下方へ直線的に伸び、後に至る。腰はあまり突出せず、直下に凹窓が現る。口縁部は外傾して下り、端部外反して内に段を作る。 回転ナデ。	淡灰色	良好 石英・長石 等多く含む	良好	外面に灰か ぶり
		(9 E)					
221	須恵器 杯盤	12.6 — 底径 12.2	平坦で広い大井部分から斜下方へ伸び、後に至る。腰は突出せず、直下で器内を減じ、下方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は内に段を作る。 外表面より 1.0 cm以上回転ハケ (右→左)、 その他回転ナデ。	青灰色	良 石英・長石 等多く含む	良好	
		(9 F) (9 G)					
222	須恵器 杯盤	12.4 — 底径 12.1	半球形を呈し、丸みのある腰が現る。口縁部は器内を増して丸く終る。 回転ナデ。	青紫色 中核紫灰色	稍良	良	
		(9 F)					

遺物番号 標記番号	名 種 (出土地区)	(cm) 口径 法量	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
223	須恵器 杯蓋	13.0 — 縦径 12.8	222 同様の形態。口縁部は器肉を減じて内凹し、端部丸く終る。 外面上位にカナ日認められる他は回転ナデ。	青灰色 中後業青色	精良	良	
		(9 D)					
224	須恵器 杯身	12.4 4.0 受部径 15.0	平坦で広い底部から外上方へ内窪して伸びた後、外傾して受部に至る。受部上面は水平、立ち上がりは斜上方へ直線的に伸び、端部は器肉を削して丸く終る。 外面上部より 0.9cm 以下回転ヘラケズリ、その他回転ナデ。	外面白縁部 青灰色 笠部以下赤茶色 内面素青色	良 長石の小粒 多く含む	良	焼きぶくれ あり
二二	(9 H) (9 G)						
225	須恵器 杯身	13.6 5.2 受部径 16.0	浅い半球形の底部から、斜上方へ直線的に伸びて受部に至る。受部は斜上方へ尖る。口縁部は内傾し、端部は内に段を作る。 外面上部より 2.3~3.3cm 以下回転ヘラケズリ、その他回転ナデ。	外面全体の み青灰色 他は淡灰色	良	良	
二二	(10 F)						
226	須恵器 杯身	17.0 4.9	浅い半球形を示す。口縁部は直線的に伸び、端部水平な面を持つ。 外面上部より 2.3~3.3cm 以下回転ヘラケズリの後回転ナデ。	外面紫褐色 内面暗青色	精良	良好	
二二	(9 D)						
227	須恵器 高杯	— — 縦径 10.3	杯底部から斜下方へ外反きみに伸び、凸線を削らせた後、さらに外反する裾部。端部は内凹し、器肉を減じて丸く終る。 内外ともに回転ナデ。	灰白色~ 銀灰色	良	良	外面上に灰か ぶり
二二	(9 E) (9 G) (9 H)						

C トレント

出物番号 登録番号	高さ (出土地名)	幅 (法量)	口縁 基部	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
228	十輪器 東	18.8	—	外表面と口縁部との間に縫を持ち、丸み・淡赤褐色のある「く」字形に彎曲し、口縁部に至る。口縁部は水平な凹面となる。 内外とも全体へラグゼリ、口縁部ヨコナダ。	やや粗 5mm以下の 石英・長石 散見される	良好		
	(14H) (第5層)							
229	縦輪器 東	—	高台径 8.2 高台高 0.6	平坦で広い底盤を持つ。体部は高台盤から斜上方へ直線的に伸び、内外に縫を作った後角度を変えて上向外へ伸びる。高台は断面方形で輪底に下り、水平な縫を持つ。 内外とも縫以下にカンナ削り、高台は貼付けによる。	釉 疊経色 細かい質入	乳白色 やや灰質	良好	
二二	(15H) (第5層)							
230	瓦器 東	13.6	—	斜上方へ内湾さみに伸びる体部から、縫を作った後、尖って終る口縁端部に至る。 指頭圧成形後外側縫部ヨコナダ。内面体部ナダの後削い痕ヘラミガキ。	灰白色～ 黒灰色	精良	良	表皮剥離
	(SD-15)							

第5章 まとめ

今回の調査では、古墳時代中期初頭の水田遺構・古墳時代中期の集落遺構・平安時代の水田遺構を検出した。なかでも古墳時代中期の集落遺構の存在は、八尾南遺跡内のみならず、長原古墳群を中心とする長原遺跡とも有機的な関係を示す資料として注目できる。

以上のことからまとめでは、古墳時代中期の集落遺構から出土している初期須恵器・韓式系土器を中心に、既往調査（大阪市高速電気軌道2号線に伴う発掘調査、以下【八尾南遺跡調査会1981】と付称）・（防衛庁宿舎に伴う発掘調査、以下【（財）八尾市文化財調査研究会1983】と付称）の出土例を含めて概括したい。

八尾南遺跡出土の韓式系土器について

八尾南遺跡推定範囲内で、古墳時代中期に比定される韓式系土器を出土した遺構は、当調査地を含めて15箇所を数える。これらの資料は言うまでもなく、朝鮮半島から渡来した人々およびその強い影響下にいた人々が、在地で製作した土器と考えられる。八尾南遺跡・長原遺跡を含めた地域は、これらの資料が比較的良好な形で出土することが知られており、これらの資料を精査することによって、在地集落との関係を明確にすることが可能である。

しかし、畿内を中心とした他遺跡の韓式系土器の出土例を概観し、この地域の韓式系土器と

を比較するとき、他遺跡の出土例との差異が比較できる。その一つは、器種構成の違いである。他遺跡の出土例が比較的限定された器種であるのに対して、当遺跡の出土例は壺・壺・高杯・鉢・盤で、ほとんどの口常雜器に及んでいる。もう一つは、外面調整の違いである。他遺跡の出土例が繩文タタキ・格子タタキを施す例が大半を占めるのに対して、当遺跡の出土例は平行タタキ・ハケを施すものが多い。このことは、渡米系氏族の流入時期の問題、ないしは渡来系氏族の出自の差異等の要因が反映したものと考えられる。

これらの諸問題を残すものの、現実には韓式系土器の名称そのものの概念が先行しており、基礎的な作業である韓式系土器の形態認定の範囲を明記する行為が等閑にされてきた。たとえば、外面に繩文タタキ・格子タタキ・平行タタキを施す器種は、その調整技法から拘泥することなく、韓式系土器の範疇と考えられている。しかし盤については、調整技法にかかわらず、その形態から韓式系土器と考えられている。盤の場合は新器種であることから、調整技法にとらわれず韓式系土器と認定される理由も理解できる。そう考えれば、盤とセットで使用される壺（長胴形を呈し口縁部が外反するもので、外面に縦位のハケ調整が施されている）も当然韓式系土器の範疇と考えられる。事実、〔八尾南遺跡調査会1981〕のSE-5の出土例に認められるように、縦位のハケを施す盤・平行タタキの下底鉢・縦位のハケを施す長胴壺が共伴して出土しており、外面調整の差異が時間差を反映したものとは考えられない。

なお、こうした遺物の出土状況は、長原遺跡（長吉川辺3丁目）でも認められることから、^{正6}当遺跡周辺の韓式系土器の特徴としてタタキ技法（繩文文・格子・平行）から、ハケ目技法への早急な変移が認められる。したがって、ここではこれらの遺物も韓式系土器の範疇（ただし初期須恵器を共伴する時期に限定）と認識したうえで各器種を概観し、さらに今日までに八尾南遺跡内で出土した韓式系土器を一覧表に記載して基礎資料としたい。

壺：長胴形を呈し口縁部は外反して伸びるもので、外面に縦位のハケを施す壺（191・192）・〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-5(13)・SE-16(3)・SE-21(23)・〔（財）八尾市文化財調査研究会1983〕SK-1(16)を韓式系土器の範疇とした。これらの壺は、形態とともに前代の布留式壺の系譜を受け継ぐものとは考え難く、この時期に出現する盤に符合する器種と考えられる。なお、〔製支脚（財）八尾市文化財調査研究会1983〕SK-1(8)は、これらの壺を固定する際に使用したものと考えられる。

壺：韓式系土器に比定したものは、〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-21(7)がある。この壺^{正7}は、球形の体部から上方へ垂直に伸びた後外反し、口縁端部は上方へつまみ上げられるもので、内外面とともに横方向のハケが施されている。なお、胎土の分析結果では、非在地産に位置付けられている。類例として豊中市利倉遺跡出土の壺があるが、この資料は須恵器で外面に繩文文^{正8}が施されている。

高杯：半球形を呈する杯部上位に沈線を有する高杯（94・185）で、同時期の他の高杯に比して柱状部径が大きい。兵庫県姫路市宮山古墳出土の須恵器高杯に類似がある。

註9

鉢：鉢には、丸底ぎみの鉢Aと平底の鉢Bがある。

鉢Aは底部より内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は外反して終るもので、（6・19・32・106・216・217）・〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-2(4)・SE-21(11・12)・〔（財）八尾市文化財調査研究会1983〕SK-1(9・10)がある。外面の調整は、（106）・〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-21(12)がヘラケズリの後ナデを行う以外は、全て縦位のハケを施している。なお、（6・

第3表 八尾南遺跡における遺構出土初期須恵器・韓式系土器一覧表

調査名および所在地	遺構名	初期須恵器					韓式系土器					その他の伴出遺物			
		杯身	杯蓋	柄	裏	書	高杯	器台	盤	裏	書	高杯	鉢	底	鉢
〔八尾南遺跡調査会1981〕 若林町1丁目	SE-2												A1		
	SE-5	■	■						■			■	H ₂ H ₃ E ₅	A1	
	SE-11	※												B ₂	
	SE-14	※												A ₂	
	SE-16		■						■						
	SE-21				■							■	A ₁ B ₁	B4	紺錠車
	SE-27					■									製塩土器 海賊土器
	SK-2	■													
〔（財）八尾市文化財調査研究会1983〕西木の本4丁目1	SK-28		■												
	SK-1								■			■	A ₂		土製支脚
当調査地 西木の本4丁目4	SK-1	■					■						A ₁		
	SK-2				■							■	A ₁		
	SK-3	■	■		■		■					■	A ₁		製塩土器 匂玉
	SK-11												B ₂ B ₃ B ₆		
	SD-8									■					
	SW-1	■				■	■		■		■			B ₁	
	SP-7									■					

* SE-11・SE-14は報文に須恵器出土の記載があるが器種は不明である。

** 鉢・盤は次のように・形態A：丸底・調整1：ハケ 3：平行タタキ（a縦位 b横位）
分類した。
B：平底 2：ケズリの後ナデ 4：格子タタキ 5：輪廻タタキ

216・217)は、底部裏面にまでハケ調整が及んでいる。また、この器種は外面に煤の付着しているものが大半を占めており、明らかに煮沸機能を果したものと考えられることから、小型壺として捉えるのが正しいかも知れない。

鉢Bには、(181・182・184・212・213・215)・〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-5(5~7)・SE-21(10)がある。形態は、(212)・〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-5(5)の二者がわずかに丸みを持つが、他のほとんどは直線的である。外面の調整は、ケズリの後ナデ(184)・〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-21(10)、横位の平行タタキ(八尾南遺跡調査会1981)SE-5(5)、繩彫タタキの可能性のある(181)・〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-5(7)の他は、全て縦位の平行タタキによる。これらの鉢は、法量から大型(184・212)・中型〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-5(6~7)・小型(181・182・213・215)・〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-5(5)に分類できる。

瓶：蒸氣孔を除いた形態の分類では、丸底で砲弾形を呈する瓶Aと、平底で直線的に伸びる瓶Bに分類できる。

瓶Aには〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-5(10)・SE-14(2)があり、前者は縦位のハケ、後者は縦位の平行タタキで調整されている。

瓶Bは(122・193)・〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-11(3)・SE-21(38)で、外側の調整には縦位のハケ(122・193)、縦位の平行タタキ〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-11(3)、格子タタキ〔八尾南遺跡調査会1981〕SE-21(38)の3種類がある。

八尾南遺跡を中心とした初期須恵器出土集落の様相

当調査地を含めて、今日までに八尾南遺跡推定範囲内で初期須恵器を伴出した遺構は、〔八尾南遺跡調査会1981〕および〔(財)八尾市文化財研究会1983〕で15箇所検出されている。

前者は当調査地の南300mに位置し、C-4地区を中心に、井戸6基・土坑2基が検出されている。後者は本調査地の東側に隣接する調査地で、土坑1基が検出されている。これらの集落遺構は、〔八尾南遺跡調査会1981〕で指摘されているように、南北に伸びる同一微高地計10上に位置するものと考えられ、この微高地が八尾南遺跡の古墳時代中期の集落遺構の範囲と推定されている。ただ、〔八尾南遺跡調査会1981〕の集落は、前代から継続する母村的な性格を帶びているのに比して、当調査地および〔(財)八尾市文化財調査研究会1983〕の集落は、この時期に新たに開発されたことが窺われる。これらの事実は、中に内発的な要因に伴う集落の拡大、あるいは分散といった一般的な集落の推移として単純に捉え得ることができない問題を内包している。それは、長原1号墳(塚の本古墳)・長原85号墳(一ヶ塚古墳)に代表される長原古墳群の存在である。したがって、この時期に八尾南遺跡の集落が拡大する傾向も、これらの古墳11

墳造営に符合した現象として位置付けられる。一方、これらの現象は周辺でも顕著で、長原遺跡（長吉川辺3丁目・長吉出戸8丁目・長吉長原西2丁目）、木の本遺跡（南木の本4丁目）^{註12}^{註13}^{註14}^{註15}に集落が出現している。これらの集落も長原古墳群の遺営に関与したことは疑うよしもないが、八尾南遺跡を含めた同時期の集落の突発的な増加は、外的要素を多分に含んだものと考えられる。

その一つは、渡来系氏族との関係である。八尾南遺跡周辺は、奈良・平安時代の文献から物部氏との関係が取りざたされており、その真偽のほどは現時点では推量の域を超えないが、出土遺物の内容から、朝鮮半島との関係は否定し難い。（八尾南遺跡調査会1981）では、前記の事柄を想起させる資料である初期須恵器・韓式系土器の出現以前の時期に集落を構成した堅穴住居が1棟検出されており、この建物を最後に、住居形態が掘立柱建物に移行している。これらの事実から（八尾南遺跡調査会1981）ではこの時期の集落の変化を、在地集落が新しい文化の受容に触発された結果拡大したものと位置付けられているが、初期須恵器・韓式系土器の出現を境とした集落内の変化が顕著であることから、渡来人集団の勢力が在地集団を凌駕した関係であったことが推定される。最近の調査例では、この時期に比定される集落が、八尾南遺跡の周辺に分散して存在することが確認されており、〔八尾南遺跡調査会1981〕の集落とは成立時の形態を異にする集落（渡来人のみで構成された集落）が出現することが判明している。^{註16}

このように、この時期に渡来人集団の集落が出現することは、河内平野の周辺においては普遍的な現象として捉えることができるが、特に八尾南遺跡・長原遺跡を含めたこの地域は、これらの現象が顕著に看取される地域である。この地域では渡来人集落の出現に符合して、堅穴住居から掘立柱建物への移行や、初期須恵器・韓式系土器および製塙土器の使用等による社会生活の変化が認められる。なかでも初期須恵器の出土量は他地域遺跡の出土量に比して膨大であり、これらの資料が渡来系氏族集団の優位を示すばかりでなく、初期須恵器製作集団ないしは製品供給集団との氏族間の有機的な関係をも示唆していると考えられる。一方、外的には龜井遺跡の築堤に代表される一連の土木工事や、造橋としては残らないものの、政務・外交・軍事・手工業等の職掌にも、これらの渡来系氏族集団が重要な役割を果したものと推定される。^{註17}

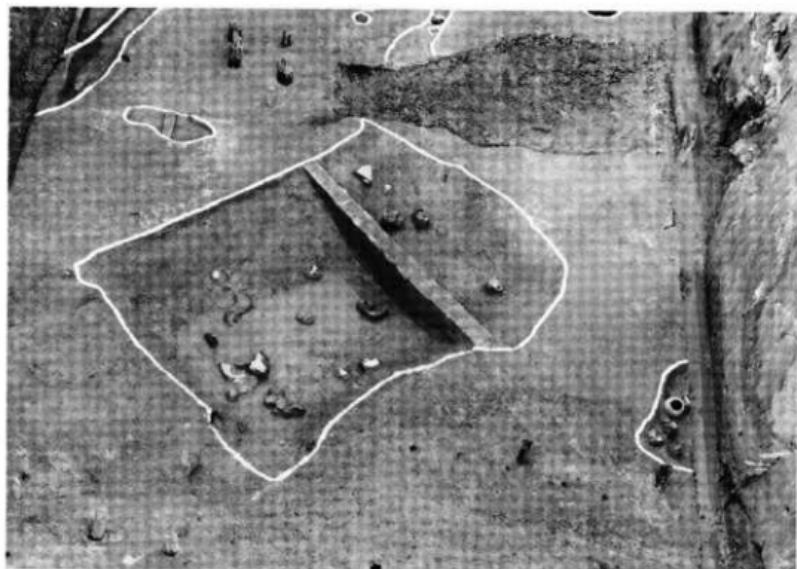
これらの役割を果した渡来系氏族集落の出現においては、内発的な事情による移動や、それとは逆に技術受得の必然性に伴って招きされた技術者の移動等の要因が考えられる。理由はいずれにせよ当時の中央政権および古代氏族の情勢が、これらの現象の背景に漂搖していたことだけは粉れもない事実であろう。なお、これらの現象はこの時期に顕著であるが、瓜破北遺跡・^{註18}加美遺跡・八尾南遺跡（若林1丁目）から出土した鏡片等の出土遺物に代表される卓越した地域性が、新しい文化を受け入れるための下地として培われていたことも見のがせない事実であろう。

- 註1 開色「型式1段階～3段階（小村編年）およびTK73型式・TK216型式（田辺編年）の範疇に含まれる須恵器を指す。
- 註2 朝鮮半島の土器の系譜を引く軟質系上器を指す。これらは説來人あるいはその他の影響下にあった在地人が、日本で製作したものと考えられる。なお、ここでは初期須恵器と共伴する資料に限定した。
- 註3 八尾市遺跡調査会『八尾南遺跡』大阪市高速電気鉄道2号線建設に伴なう発掘調査報告書 1981
- 註4 〔財〕八尾市文化財調査研究会『八尾市遺跡発掘調査概要報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980～1981年度』；〔財〕八尾市文化財調査研究会報告2 1983
但し、現地調査は教育委員会が実施。
- 註5 a 阿部嗣治『東大阪市出土の漢式系土器について』『東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度』東大阪市遺跡保護調査会編 1980
b 竹谷俊夫ほか『布留遺跡出土の初期須恵器と韓式系上師器』；考古学調査研究中間報告8 埋蔵文化財天理教遺在附 1983
c 稲野浩二『韓式系土器についての考察』『奈良大学紀要第12号』奈良大学編 1983
- 註6 大阪市教育委員会・〔財〕大阪市文化財協会『大阪市土地開発公社川辺市居住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査の現地説明会資料』1983
- 註7 前掲註5 cで、稲野氏は韓式系土器とされている。
- 註8 柳本照男「須恵器の源流 各地の初期須恵器をめぐって」農中市周辺『日本陶器の源流』一須恵器出現の謎を探る 瑠璃影一監修 1983
- 註9 姫路市教育委員会『吉山古墳第2次発掘調査報』；姫路市文化財調査報告Ⅳ 1972
- 註10 前掲註5 3 稲文では中央高地と付称されている。
- 註11 〔財〕大阪市文化財協会『帝都された大阪』；〔財〕大阪市文化財協会設立5周年記念 1984
- 註12 前掲書註5
- 註13 前掲書註11
- 註14 前掲書註11
- 註15 〔財〕八尾市文化財調査研究会『木の本遺跡発掘調査概要報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報』；〔財〕八尾市文化財調査研究会報告2 1983
- 註16 前掲書註6 出土遺物の内容から、筆者は説來人のみの來落と理解している。
- 註17 〔財〕大阪文化財センター『鬼井・城山』；岸和田南部淀城下水道事業長吉ポンプ場整備工事関連埋蔵文化財発掘調査報告 1980
- 註18 〔財〕大阪市文化財協会『瓜破北遺跡』共同建設工事に伴う発掘調査報告書 1980
- 註19 〔財〕大阪市文化財協会『加美遺跡（KM84-1次）発掘調査概要』；大阪府下埋蔵文化財担当者研究会（第10回）資料 1984
- 註20 昭和59年1月9日～7月6日、八尾市若林町1丁目49地において〔財〕八尾市文化財調査研究会が発掘調査を実施した。

図 版



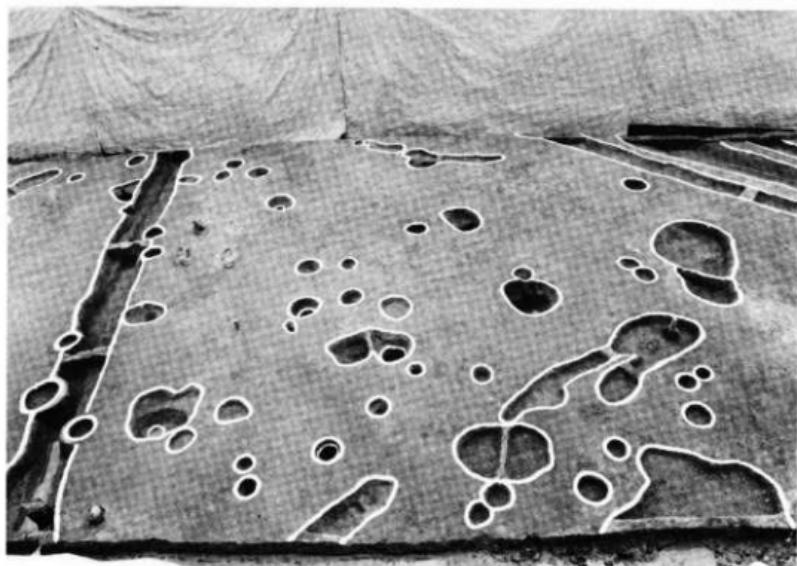
A トレンチ全景 (西から)



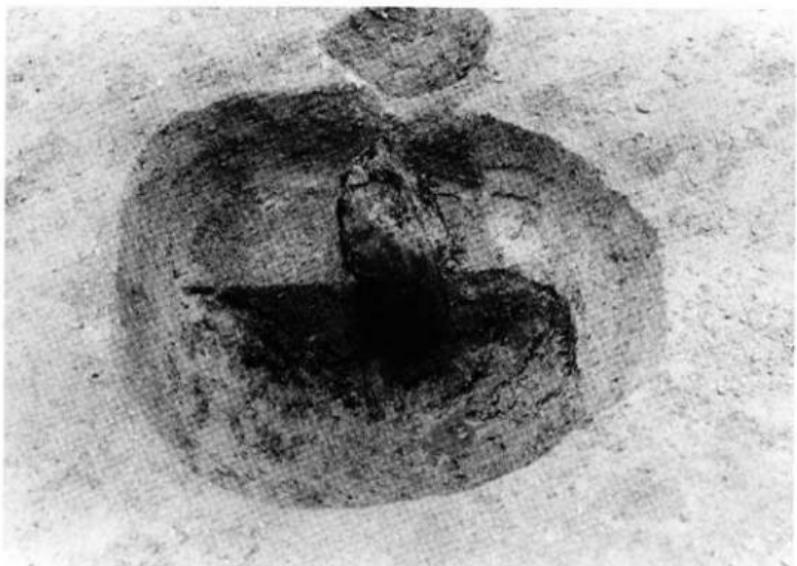
A トレンチSK-3 (西から)



同 断面



A トレンチSB-1 (北から)



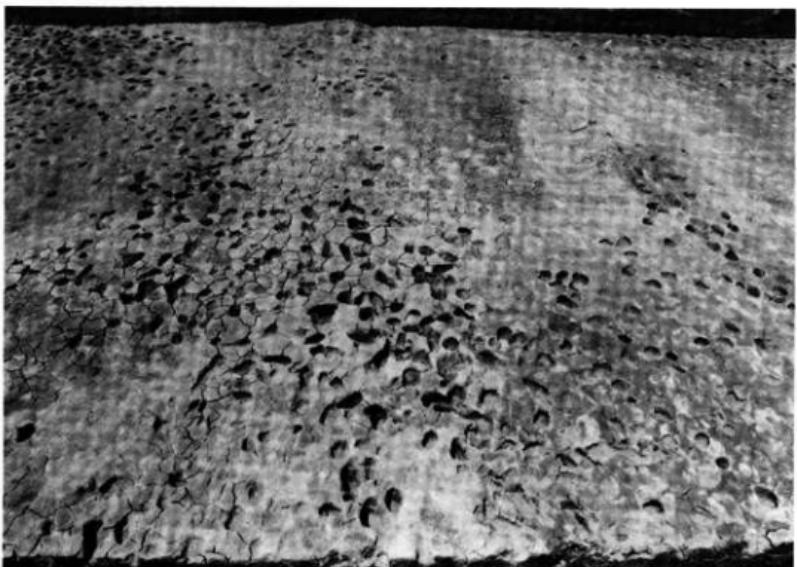
同 柱根検出状況SP-51 (北から)



B トレンチ第1調査面（西から）



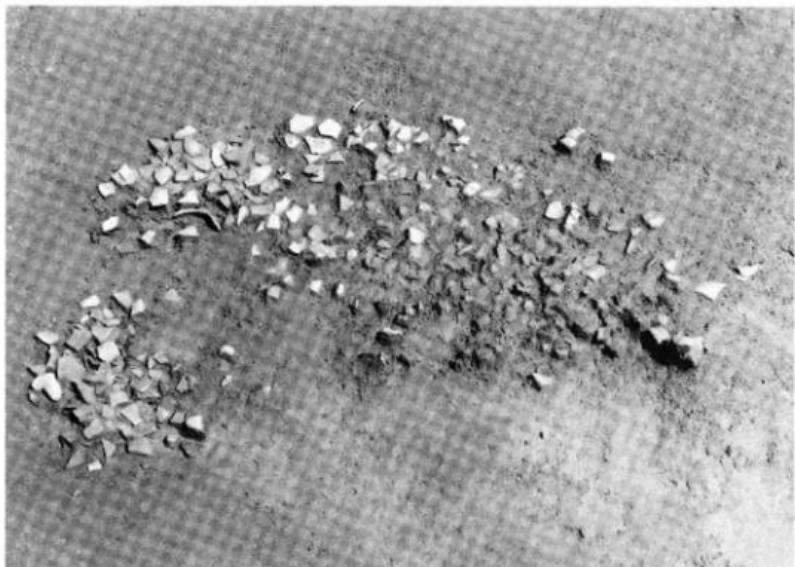
B トレンチ第1調査面畦畔Ⅰ（東から）



同 畦畔Ⅱ（南から）



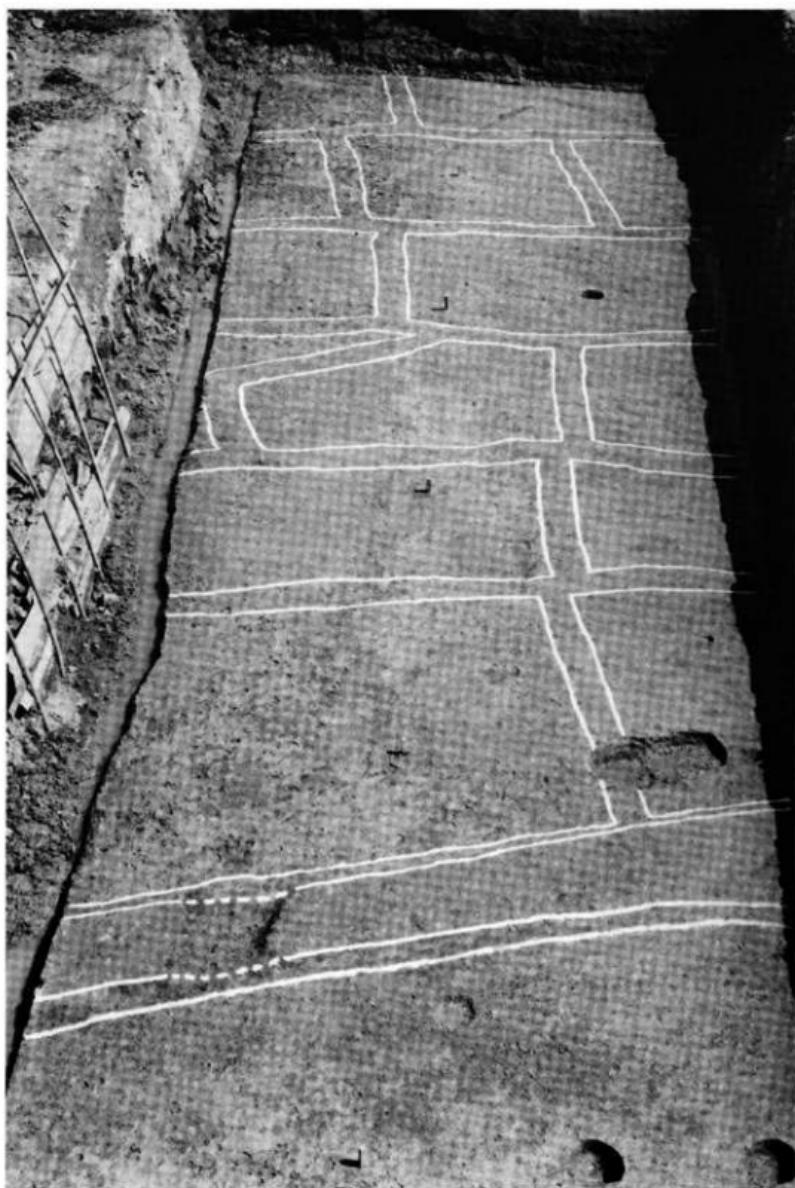
B トレンチ第2調査面（西から）



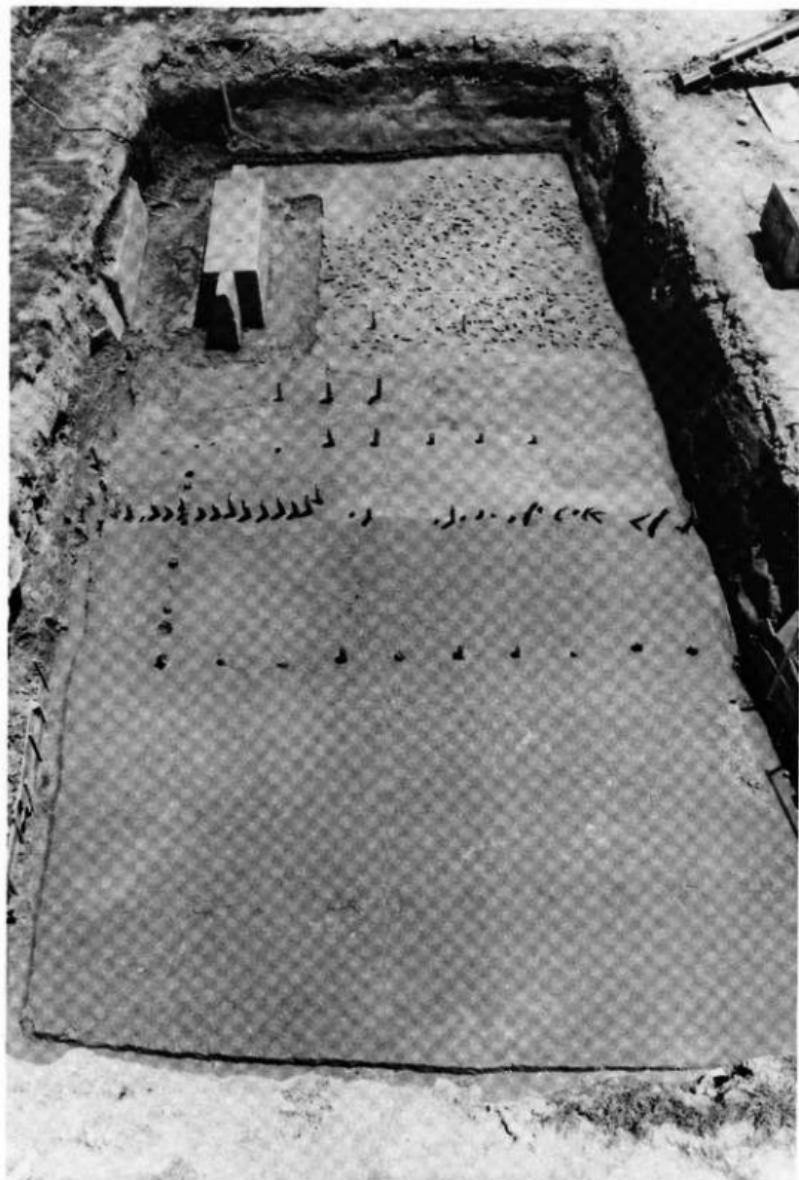
B トレンチ第2 濃査面 SW-1 (南から)



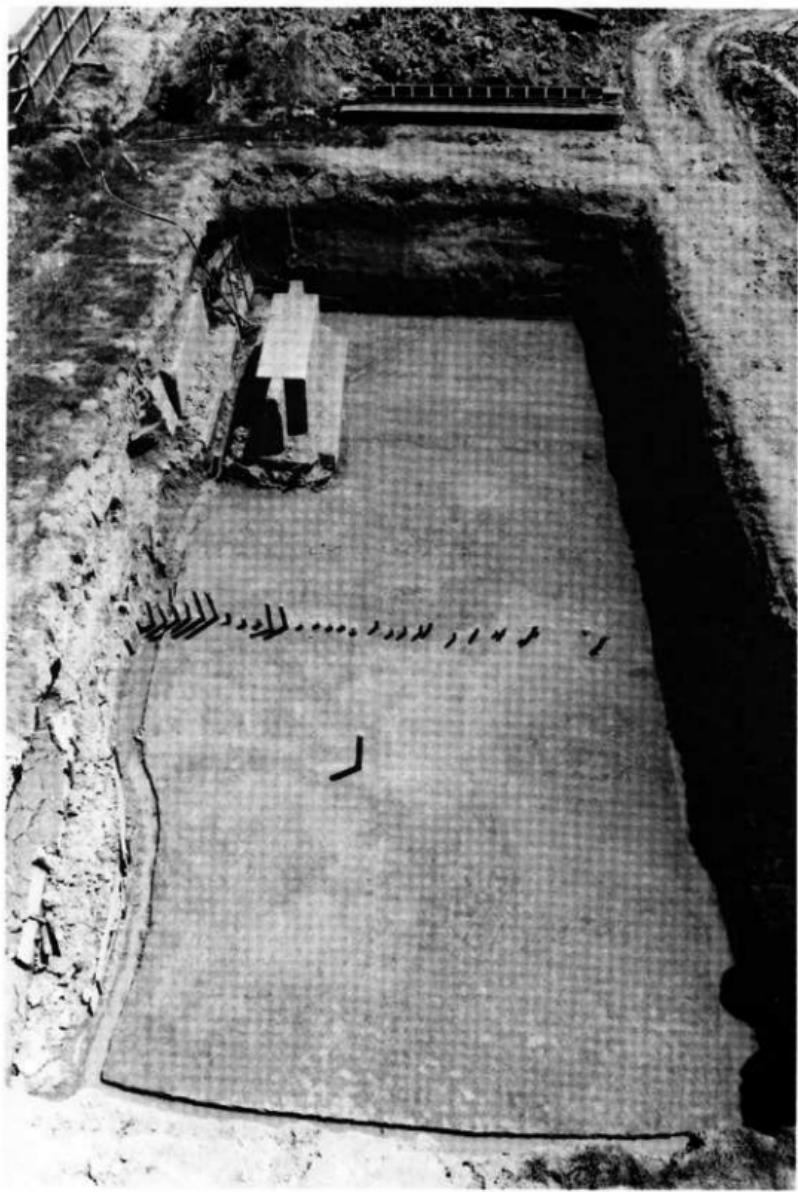
同 10F 地区包含層遺物出土状況 (225—北から)



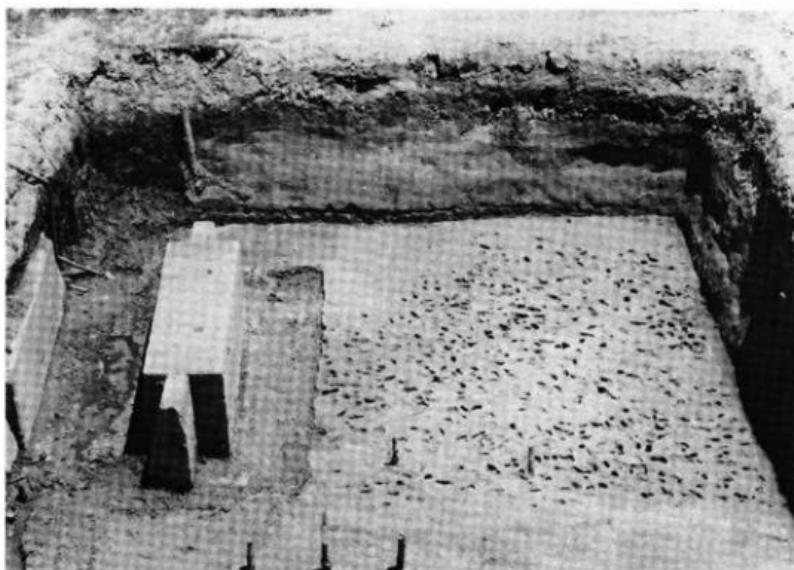
B トレンチ第3調査面（西から）



C トレンチ第1調査面（西から）



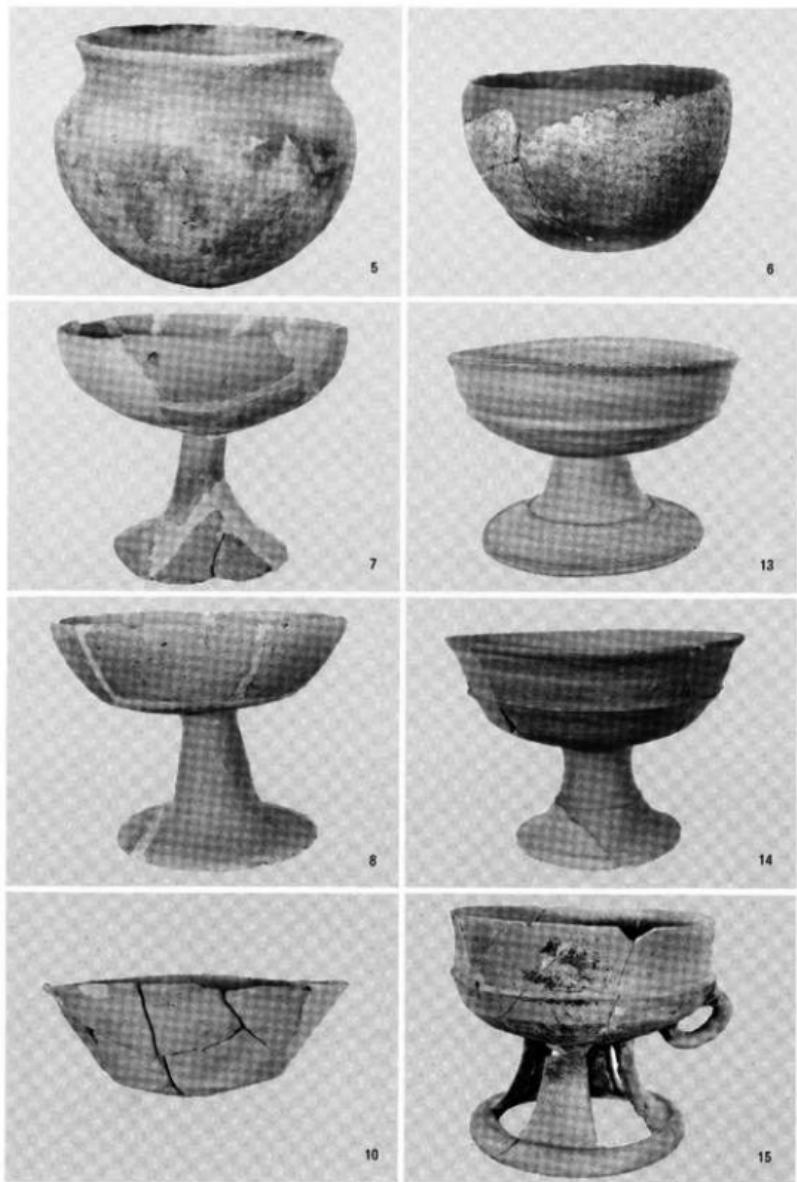
C トレンチ第2調査面（西から）



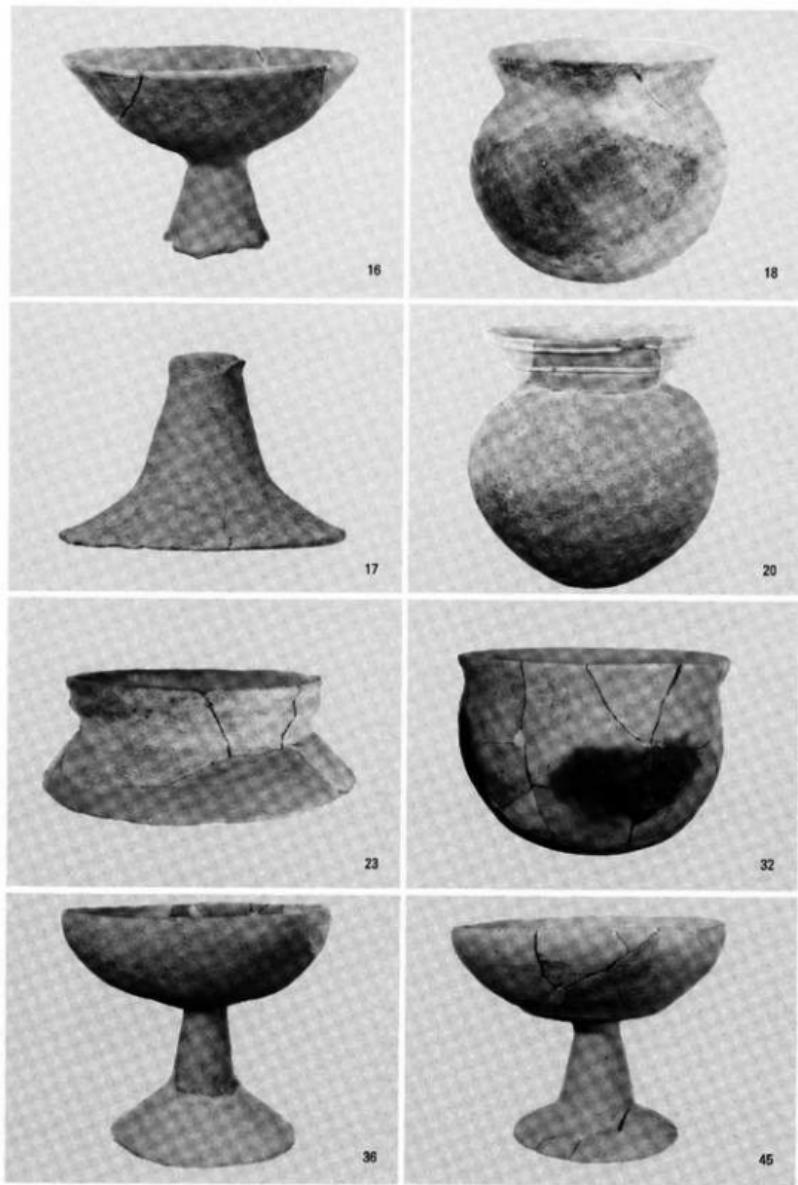
C トレンチ第1調査面水田 d (西から)



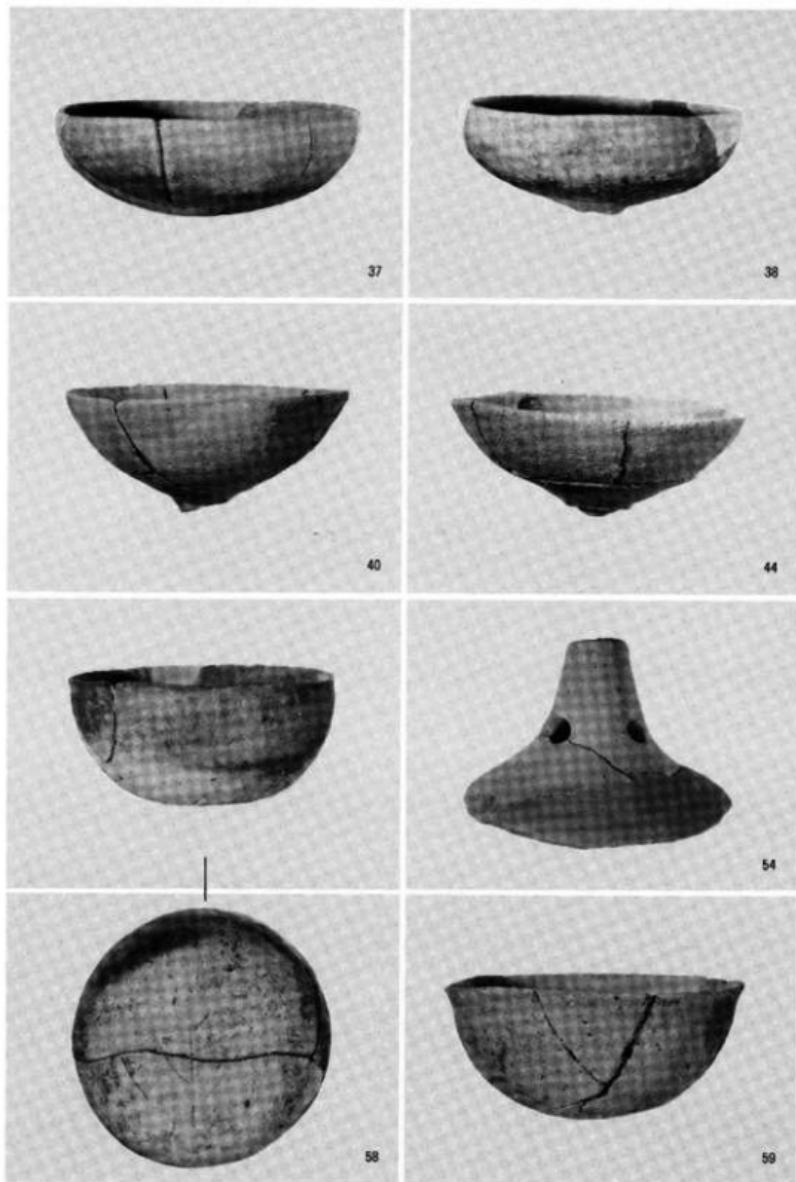
同 第2調査面大畦畔 (北から)



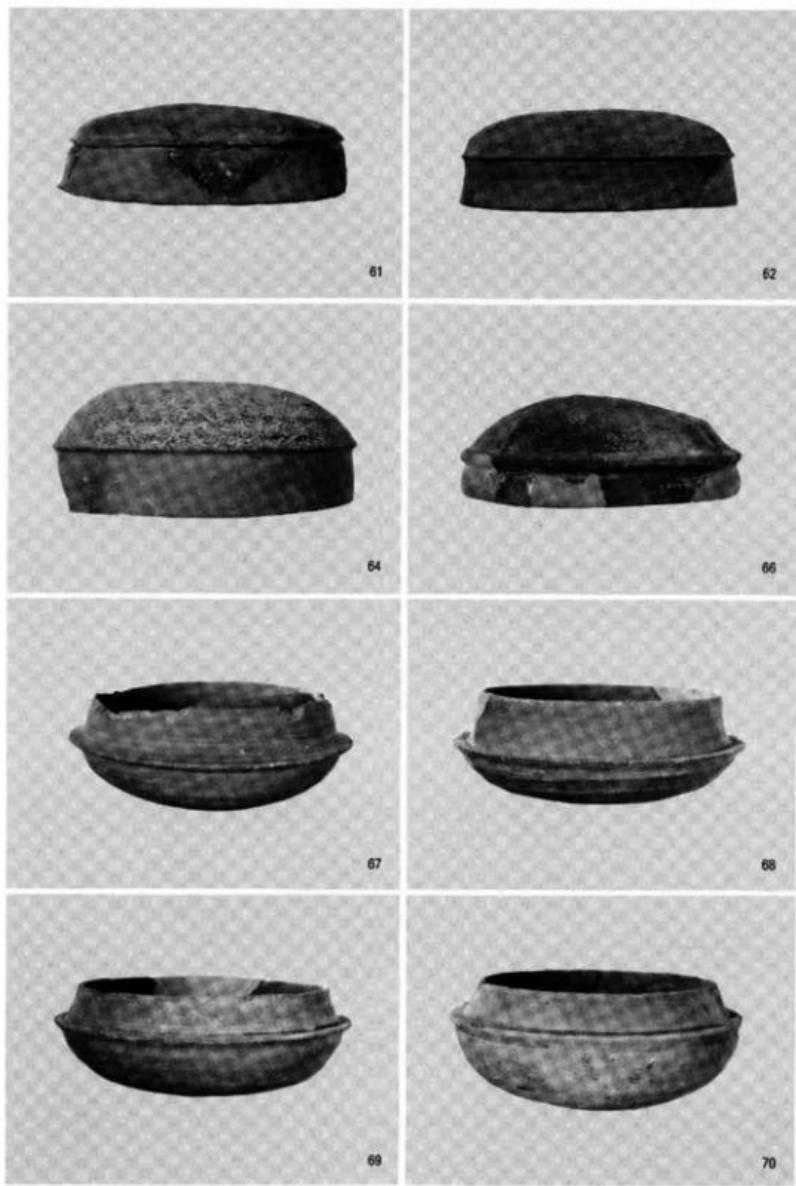
A トレンチSK-1出土遺物



A トレンチSK-2 (16~18・20)、SK-3 (23・32・36・45) 出土遺物



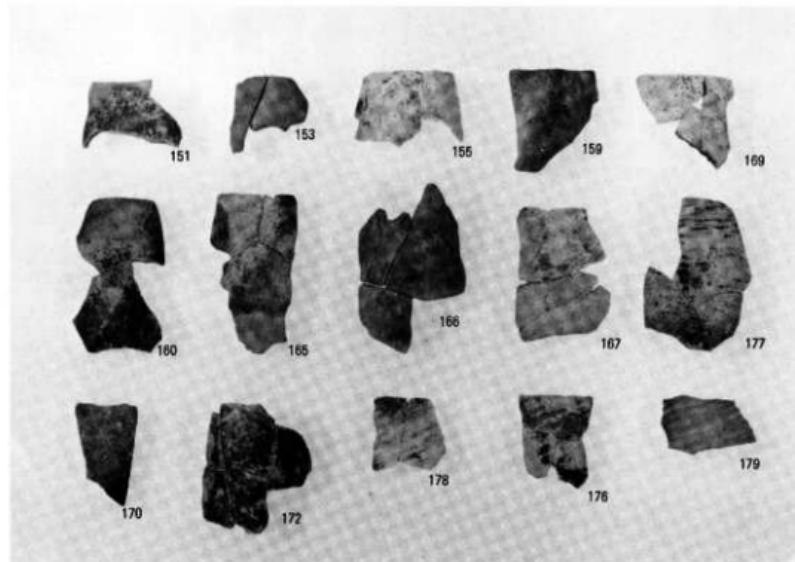
A トレンチSK-3 出土遺物 (土師器)



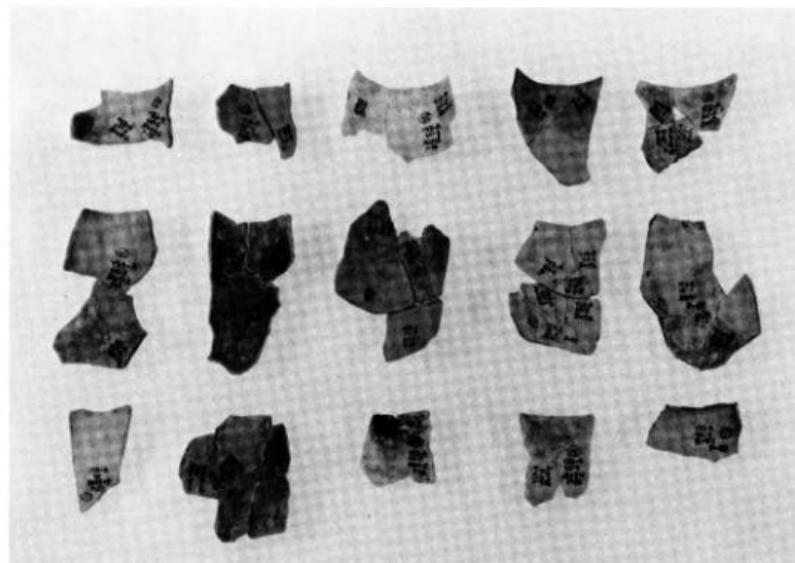
A トレンチSK-3出土遺物（須恵器）



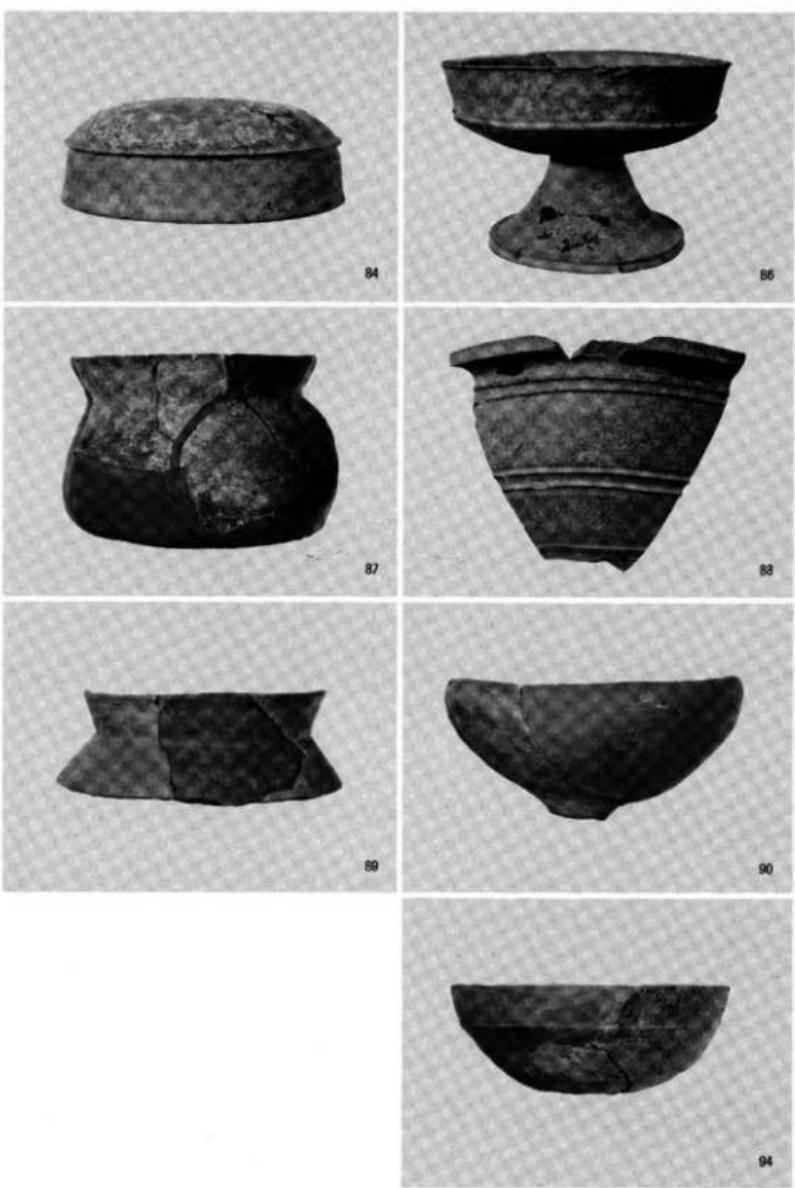
A トレンチSK-3出土遺物（須恵器・勾玉）



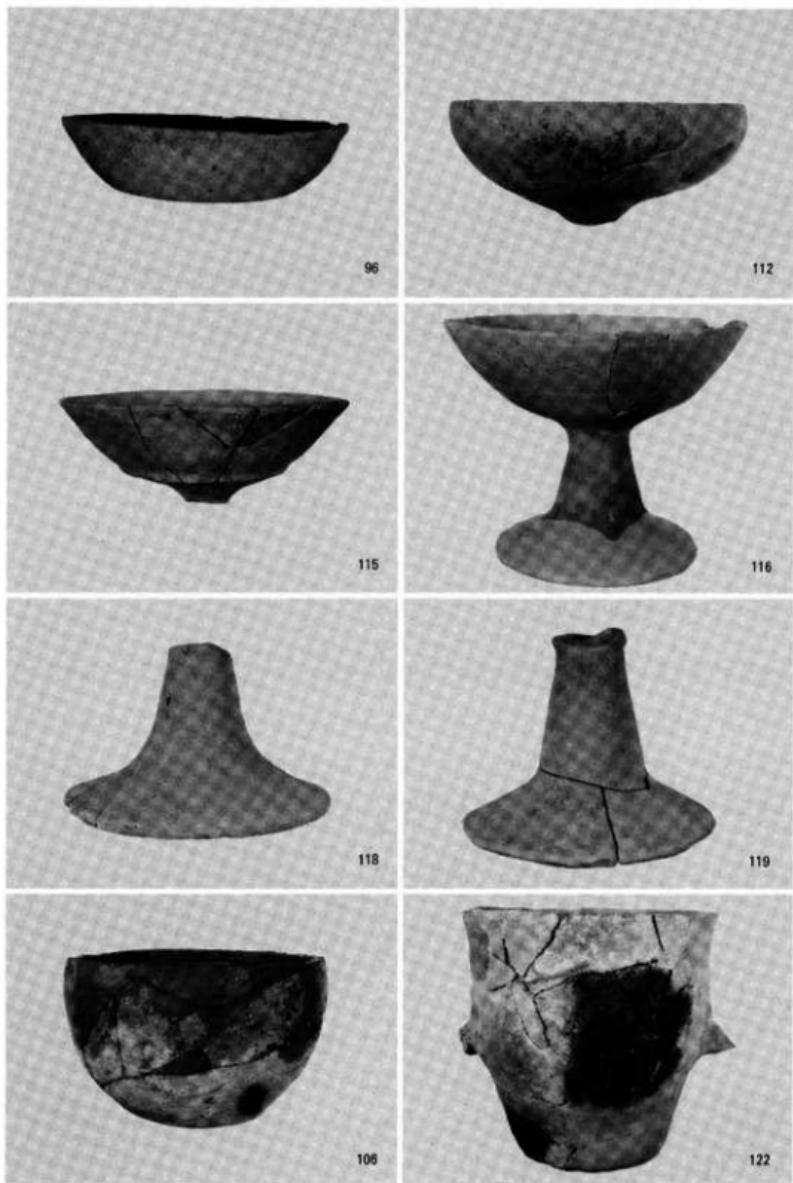
A トレンチ出土製塙土器—SK—4 (172)、包含層 (170)、他はSK—3出土



同 裏面



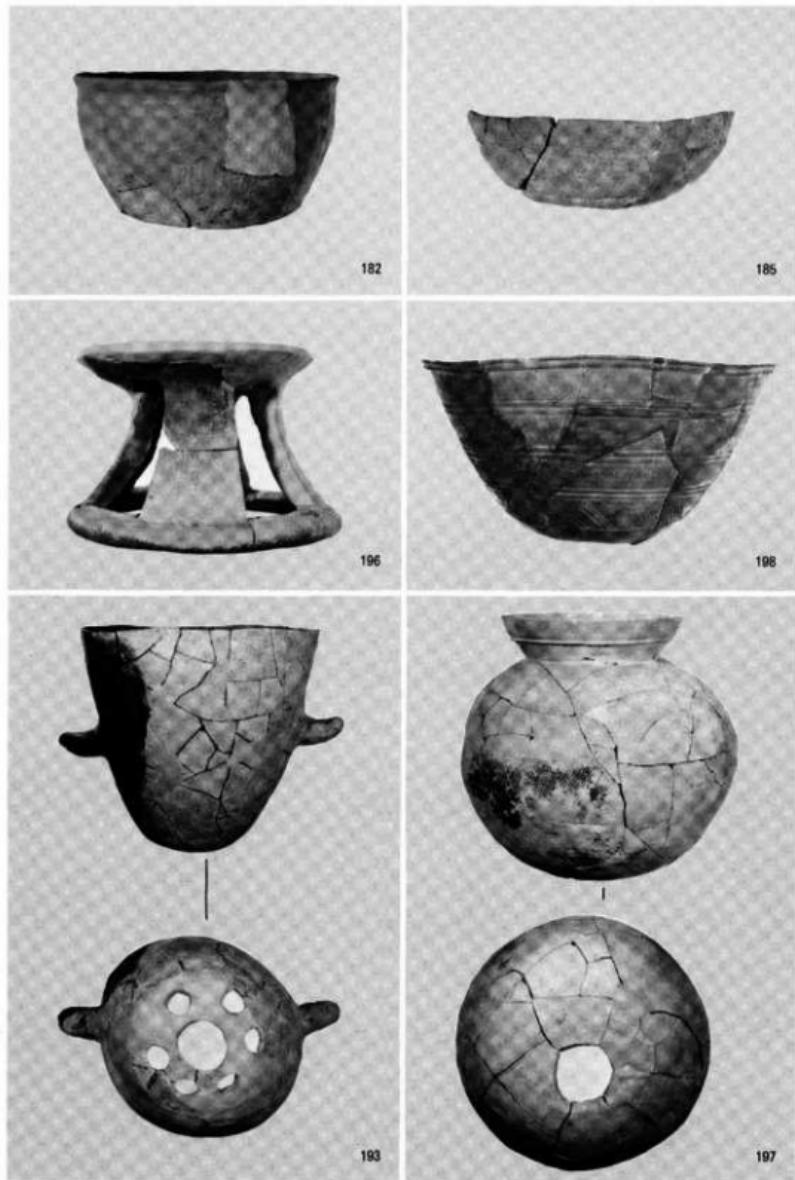
A ドレンチ SK-4 (84・86)、SK-5 (87・88)、SK-8 (89)、SK-9 (90)、SP-7 (94) 出土遺物



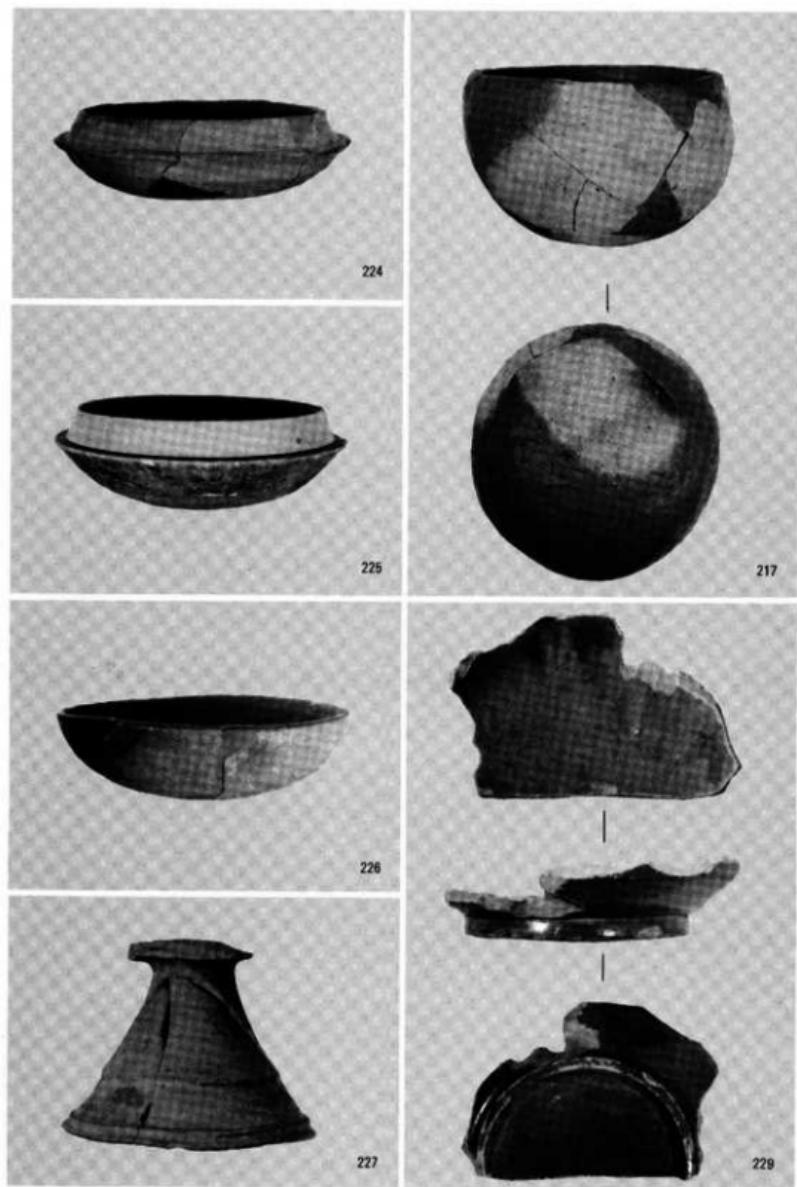
A トレンチ包含層出土遺物（土師器）



A トレンチ包含層出土遺物（須恵器）



B トレンチ SK-11(182)、SD-8(185)、SW-1(193・196~198) 出土遺物



B トレンチ包含層(217・224~227)、C トレンチ包含層(228) 出土遺物

(財)八尾市文化財調査研究会報告6

八尾市埋蔵文化財発掘調査概報
昭和59年度

発行 昭和60年3月

編集 (財)八尾市文化財調査研究会
〒 581 八尾市清水町1丁目2番1号
0729-94-4700

印刷 (株)奈良明新社

(中性紙使用)

003